# STAY GOLD　（長編）

中野　里美

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＳＴＡＹ　ＧＯＬＤ　（長編）

【Ｎコード】
Ｎ９１１５Ｓ

【作者名】
中野　里美

【あらすじ】
高校生バンドの青春ストーリーです。
どうしようもない三人が、学園祭ライブまでの半年間、色々な人に接することで少しずつ成長していきます。

# 一章　ロック部

新学期の始まった高校二年生の春。
校門前の桜は咲いているのに、僕の気持ちは暗かった。
登校して二年生の教室に入ると、新しいクラスメイトとの顔合わせに周囲は賑わいをみせていた。始業式をぼんやりと過ごし、教室に戻るとホームルームが始まった。委員や係りを決め、班分けを行ない、いつの間にか放課後になった。でも、僕は誰とも話せずにいた。一人で帰ろうと駐輪場に歩いていると、旧校舎からドラムの音が聴こえてきた。それはロック部の練習だった。
僕はそのドラムを聴いて、立ち止まり思った。
暗い気分の原因は、やはりロック部にある。
ロック部は旧校舎の片隅にある小さな教室を活動場所に使っている。リノリウム貼りの床は傷だらけで、所々剥がれているし、天井や壁は黄色く汚れていた。一箇所だけある窓は黒いスプレーで「ＲＯＣＫ部」と書かれていて、外からは逆さに映っていた。それでもバンド演奏ができるよう一通りの機材が置いてある。ドラムセットや、三台設置されたアンプにマイク、ギタースタンドや、卒業した先輩が残したバンドスコアなどだ。
部室の前で足を止めて、入るか躊躇（ちゅうちょ）した。でも、引き返すことを体が拒み、一息に開けてなかに入った。
部室で一人、ドラムを叩いていたジュンは、かっこをつけてスティックを回そうとしていたのだけど、ドアの開く音に驚いたのか、ただ下手だったのか、スティックは飛んでいき窓から外に落下した。
ジュンは手元を見て「あれ、どこいっちまったんだ？」と言った。
「なにしてんだよ？」
「練習に決まってるだろ！　ちょっと拾ってくる」
ジュンはそう言って、外に駆けて行った。
僕はパイプイスに腰掛けて待っていた。しばらくしてジュンは戻

って来た。池田も一緒だった。池田は制服のズボンを腰で穿いて、上履きをスリッパみたいに引きずっている。背中にはベースの入ったソフトケースを背負っていた。

池田は僕を見ると「よぉ」と言った。それから「なんだやらねえのかよ？」と続けた。

僕は曖昧にこたえてから、周りを見る。埃が教室の隅に溜まって、飲み掛けのジュースの缶や、お菓子の袋の詰まったゴミ箱はもう溢れていた。こんなの夏になったらゴキブリだって沸くはずだ。

池田はベースをチューニングしていた。

ジュンはドラムをポコポコ叩いていた。

池田の準備が整うと、ジュンはスティックを三回鳴らす。二人が演奏したのは、一月の予餞会で、三年生に向けて演奏した曲だった。

ベースとドラムだけなのだが、そのフレーズを聴いて鳥肌が立った。そのときの記憶が蘇ってきたからだ。

去年の夏、僕は先輩に誘われてロック部に入部した。

それは、放課後のホームルーム前の空き時間だった。先輩は一年生の教室に突然入ってきて、教壇に立つと言った。

「はい、こんなかにギターできる人いる？　できる人挙手挙手」

その人は久保さんという三年生で、茶髪でピアスでタトゥの入ったちょっと怖い印象の人だった。僕は好奇心で手を挙げた。

久保先輩は僕を見ると笑顔で言った。

「まじで！　どんくらいできるの！？　どんな曲弾ける？」

僕は練習していた曲をいくつか挙げた。

久保先輩は僕の前に来て言った。

「きみ最高。今日の放課後空いてる？」

「あ、はい」

「まじ。じゃあロック部ってとこに来て！　待ってるから。あ、名前教えて」

「柏崎です。柏崎つかさ」

「おっけ。楽しみにしてっから！　ちゃんと来るんだぞ！」
先輩はそう言って教室から出ていった。
放課後ロック部に向かい、部室のドアの前に立ったとき、丁度演奏が始まった。演奏していた曲は先輩たちのオリジナルだった。かっこよくて、僕は放心状態でそのままドアの前で立ち尽くしていた。
曲が終わってから部室に入り、その日は先輩たちの演奏を聴いて過ごした。
その後、パートをもらい僕は猛練習した。先輩に教えてもらい、ライブに連れて行ってもらったりもした。
夏休みが終わり、九月の末が学園祭だ。
それぞれのクラスが出し物を準備するなかで、僕は曲の練習に集中した。先輩たちはオリジナルを十曲、コピーを十曲の合計二十曲を演奏する（ただ一曲の長さが一分から長くて三分くらいだ）。先輩のバンドは三人構成で、久保先輩がギター、その他にベース兼ヴォーカルの先輩とドラムの先輩がいる。僕はサブで弾くだけで、そのパートは久保先輩のこだわりみたいなものでなくても成立する。
学園祭当日、朝の六時に学校に集まり、軽いリハーサルを行なった。久保先輩は音合わせを繰り返していたけど、僕はまかせっきりだった。今考えると、ちゃんと見ておけばよかった……。
そして本番が来た。普通、学園祭のバンド演奏なんて暇な生徒がチラホラいるだけなのに、このときの学園祭はどういうわけか体育館の半分以上が観客で埋め尽くされていた。生徒の他に、外部から訪れた人もたくさんいた。それは先輩がバンド活動を外でもやっているからなのだけど、とても驚いた。皆演奏が始まるのを楽しみにしていたからだ。
そしてライブは始まった。暗幕が上がり、先輩たちはすぐに演奏を始める。
学園祭ライブは信じられないくらい盛り上がった。僕はその場で演奏できることが嬉しくてしかたなかった。そして、すごいカタルシスを得て、先輩たちにとても感謝をした。

演奏は最初予定していた曲数より増え、先輩たちは五十分くらいぶっつづけで演奏し、学園祭ライブは幕を閉じたのだった。
機材の片付けや、膨大なゴミの始末を終えた先輩たちと僕は、先輩の家で打ち上げをした。僕は自分の演奏で先輩たちの足を引っ張っていたと感じていた。でも、そのときに久保先輩からお礼を言われた。いきなり誘っちまって悪かったな。バイトも休ませたみたいだし。でも、お蔭で大成功だった。僕は嬉しくて泣いた。お礼を言うのは僕のほうだ。
先輩たちとの半年間は、僕にとって貴重で、掛け替えのないものだった。

学園祭が終わると先輩は部室にはもう来なくなった。打ち上げの終わりに、僕は先輩に肩を叩かれて「あの部室好きに使っていいぞ」と言われたけど、え？　部員僕だけ。
しかし、十月に入ると池田とジュンが入部してきた。
池田は不良に憧れるベーシストで、髪を伸ばしているけど、痩せ過ぎているし血色も悪いのでかっこよくない。
ジュンに関してはドラムに触れるのも始めてだった。でも「俺は経験者なんだよ！」と言っていた。訊けば茶碗とスティックを使って練習しているのだそうだ。よくわからないけど、そんな練習方法があるとジュンは話していた。
僕はとりあえず歓迎した。ロック部は先輩が作った部だ。できるなら廃部にしたくなかった。僕は顧問の老先生に事情を説明し、ロック部はまた始動することになった。
そのとき、職員室で老先生は言った。
「次は予餞会の演奏でいいか？」
「え？」
「三年生を送る行事だよ。文化部は出し物していいんだぞ。時間は取れて十五分くらいだけどな」
「それ何月ですか？」

「一月の末だったかな」
あと四ヶ月はある。僕は「お願いします」と老先生に頼み、職員室を出た。
ロック部に戻って二人にそのことを話すと、池田は「めんどくせーよ」と言い、ジュンは顔を青ざめさせた。
僕は、とりあえずあと四ヶ月もあるから、何曲か練習して「イケる」と思ったのやろうか、と二人に話した。
だが予想に反してことは進まなかった。まずジュンがほぼ素人であったことと、池田が駄目な奴であったことと、僕もそれほど上手くないことと……、今更なにを言っても言い訳にしかならない。
僕は経済的な事情からスーパーでバイトをしていて、先輩との練習でシフトを減らした反動がじわじわと来ていた。バイトを頑張るとバンドが疎かになってしまい、早二ヶ月が過ぎた十二月の期末試験明け、僕は久しぶりにロック部の部室にいた。ジュンと池田も部室にいた。
僕はパイプイスに腰掛けて二人に訊いた。
「そろそろ予餞会で演奏する曲決めたいんだけど、なんかやりたい曲ある？」
池田は欠伸をして目をこすりつぶやいた。
「ねみぃ」
お前今日の試験ほとんど寝てたじゃねえか。
ジュンはお菓子を食べていた。
「ジュンは？」
「あぁ？　なんでもいい」
むしゃむしゃ。
そのとき練習していた曲はハイロウズやブルーハーツで、三人でやるにはもってこいのバンドだったし、大抵の人は知っている。易しい曲もある（僕らにオリジナルなんて選択肢はない）。
池田が思い出したように言った。
「オフスプだな」

「無理だろ。そもそも歌える人知ってんの？」
「知るか」
「じゃ却下だ」
というわけで、ハイロウズやブルーハーツの練習をそのまま継続して、合計三曲演奏することになった。
うち一曲だけ『ハイスタンダード』というバンドの『Ｓｔａｙ Ｇｏｌａ』という曲をやらせてくれと僕は言った。先輩が学園祭で演奏した曲だ。
ジュンは「ハイスタってなに？　誰？」と訊いてきた。
「先輩が演奏してただろ」
「あぁ？」
僕は無視して言った。
「ＭＤとスコアは僕が用意するから。明日持って来るよ」
二人は納得したみたいだった。
そして僕らは演奏をした。下手糞だ。でも下手でどうしようもないけど、演奏をしている間は楽しかった。二人も楽しそうだった、と思う。
そして冬休みに入った。僕は毎日バイトをした。一回だけ皆で集まりスタジオを借りようとしたけど、池田が熱を出して中止になった。
冬休み明けの放課後、僕らはまた部室に集まっていた。
ギターをセットしながら僕は言った。
「休みの間に練習した？」
ジュンを見ると親指を立てている。
「まじで！　完璧！？」
と僕は驚く。
「本気出せば余裕だよ！」
とジュンは言う。
池田もめずらしくジュンを褒めた。
「いい仕事するじゃねえかよ」

だが、演奏を終えて、池田が違和感に気が付いた。
「お前のドラムなんか変じゃねえ？」
「変じゃねえよ！」
とジュンは声を荒げた。
「ちょっともう一回叩いてみろ」
池田に言われ、ジュンはスティックを鳴らすところからやり直した。
僕も気が付いた。足りない。重要なものが足りない。
僕は恐る恐る言った。
「ジュン、お前気が付いているんだよな？」
「なにが！？」
「なにがじゃねえよ！　お前バスドラ叩いてねえじゃねえか！」
ジュンはバスドラムという足を使って叩く箇所を叩いていない。とても重要な部分だ。僕らは今までどうやってリズムを取ってたんだ。
ジュンは顔を真っ青にして言った。
「だって難しいんだよ！　手と足が一緒に動いちゃってさ！」
「馬鹿野郎！　あと一ヶ月切ってるんだぞ！」
「それにリズム遅くね？」
と池田が駄目押しした。
テンションが下がり僕はギターをスタンドに掛けた。
その横では池田が煙草を吸い始めていた。煙がゆらゆらと僕の目の前を通り過ぎていき、もうなにも言う元気がなくなった。
池田がぽつりと言った。
「止めようぜ」
「もう先輩にはやるって言っちまったよ。久保先輩は中途半端なこと嫌いだからな。今更やっぱ止めますなんて言ったら、下手すれば殺される……」
池田はピクっとして黙った。
でもクソみたいな演奏しても殺されそうな……。

「ところで、池田もコード進行間違ってたろ」
ベースの音はわかるんだよ。
池田はぶつぶつと言い訳を始めた。
「スコアなんだけどよ、かあちゃんが俺の部屋勝手に掃除して捨てちまってよ。いや、あとでゴミ袋から拾ったんだよ、でも猫のクソがひっかかっててクセえんだわ。それでこれもう駄目だと思ってよ。いや！　だって捨てんだろ、猫のクソひっかかってたら！　大丈夫だよまだ間に合うから」
池田はアンプの角で煙草をもみ消して、後ろに捨てた。
僕は顧問の老先生に頼んでコピー室を使わせてもらい、新しいスコアを池田に渡した。
もうなんか、すごくイライラしていたけど我慢した。
実際に池田はベースを覚えてくるだろうから問題はなかった。
でもジュンはどうにもならなそうだ。
ジュンがドラムの練習をできるのは学校だけで、七時までしか部室は使えない。練習時間は限られている。予餞会まで二十日しか残っていなかった。
僕はうなだれているジュンに言った。
「バスドラは諦めるよ。そんなのなくてもわかりゃしないさ。でもスピードとパワーはもう少し頑張れるだろ？」
「腕の関節が痛むんだ……」
そうジュンはお腹を押さえながら言った。よく胃が痛むらしい。
「わかった。それも諦めよう」
どうすんだ、これ。
いやでも、演奏はクソでもメロコアはハートなんだ。パフォーマンスなんだ。僕は全力で歌ってやる。跳ねてやる！　走ってやる！
そう、だから僕は、覆面を買った。

予餞会では僕たちロック部が最後に発表することになった。
老先生は「頑張れよ、しっかりビデオに撮ってやるからな」と僕

らを励ましてくれた。でも、そのビデオに映る醜態を僕はいまだに観る勇気がない。
順番が回って来た。暗幕はまだ下がっている。
僕はポケットから覆面を出し被った。
池田は風邪を引いてマスクをしていた。
ジュンは今日は調子が悪いだの、腕が痛いだのとほざいていた。
暗幕が上がる。
そこには全校生徒がいる。でも、そんなことより先輩がいる。予餞会はかなりゆるい行事で、とくに席も決まっておらず、生徒はフリーに観ている。
久保先輩や音楽が好きな先輩が舞台の前まで来てくれた。僕が覆面を被っていることに久保先輩は爆笑していた。
ジュンがリズムを刻み僕がメンバー紹介をする。
「ベースの池田！」
池田が適当にベースを弾いた。
「ギターとヴォーカルが覆面！」
僕は簡単なギターソロを弾いた。
「ドラムのジュン！」
ジュンは見た目派手にドラムを叩いた。そのときスティックが折れた。僕は急いでジュンに駆け寄り言った。
「早く予備のスティック持って来い！」
ジュンは叫ぶ。
「ねえよ！」
「なんでだよ！　アホかよ！」
「ああアホだよ！」
「いいから代わりになるもん探せ！」
「ねえよ！」
僕も焦っていたんだと思う。落ち着いて考えれば音楽室から借りることもできたのに。そして目に付いたものは舞台の隅に転がっていた汚れた箒だった。それを膝を使って折り、ジュンに渡した。

「それでやれ！」
「お、おう」
僕たちは演奏を始めた。なぜか箒のほうがジュンのリズムは取れていた。理由はわからない、わかりたくもなかった。
僕は全力で歌った。池田は今にも倒れそうだった。ジュンのリズムはどんどん狂った。でも、だからこそ跳んだんだ。走ったんだ。
久保先輩たちは爆笑しながらノッてくれたけど、他の生徒の方々はポカンとしていた。
全曲終わったあと、僕はマイクに向かって叫んだ。
「愛してるぜお前ら！　くたばれ！　ファック！　ファック！　ファック！」
そしてギターをバスドラに叩き付けた。
暗幕が僕を隠すようにバサっと降りた。そんな気がした。
僕はその後、先生に呼ばれ怒られた。謝った。調子に乗りすぎました。
そしてもうロック部なんて知らんと思った。あのアホ二人で勝手にやってりゃいいんだ。
僕はクサった。
ただ、あとで先輩たちに三人でお礼を言いに行ったとき、久保先輩は「お前ら超面白かったよ、学園祭もやれよ」と言ってくれた。ちょっと安心したけど、なんだか複雑な気持ちだった。

いつの間にか外は暗くなっていた。先輩が卒業してからこの部室はなんだか暗い。
僕は池田とジュンが演奏しているのをずっと眺めていた。上手くなっていなかった。僕もあまり練習していないから人のことは言えないけど。
僕は休憩していた二人に訊いた。
「なあ今年の学園祭出るの？」
二人はなにも言わなかった。

「じゃあなんで練習してるの？」
「やることねえし」
と池田が携帯の画面を見ながら言った。
「俺部長だし」
ジュンがこちらを見て言った。
「なにそれ？」
「わかんないけど、じいちゃん（顧問の老先生）が来て部長決めろって言うからさ」
僕はもうなにを言えばいいかわからなくて、部室を出た。
気分は暗いままだった。

部室を出ると、同じく旧校舎に部室のあるダンス部部長サキさんと鉢合わせた。
サキさんは一つ上の学年で、三年生だ。ストリートダンスチームのメンバーで、パンクな格好をしていてすごく綺麗な人だ。
サキさんは僕の顔を見て言った。
「なに暗い顔してんの？　元気出せー！」
サキさんは全身でリズムを取った。
「サキさん見たら元気出たっす！」
「まじで！　私すごくね」
「すごいっす！」
「そうかそうか、苦しゅうないな。てか、本当にどうしたのよ？久保君が卒業して寂しいの？」
「それもあるんですけど、なんか色々と」
「一人で悩んでないで私に言ってみなよ。恋の悩みならいくらでも聞くよ」
なんて言おうか考えている僕に、サキさんは言う。
「わかった、ロック部のことでしょ」
僕は頷く。
「まあぶっちゃけ、つかさ君がロック部入るの見えたから、出てく

るの待ってたんだけどね。あれから一回も部室に顔出してなかったでしょ」
あれからとは、予餞会のことだ。
「だって……」
「だって？」
「……」
「私はあの演奏すごく良かったと思うよ。まあ、ちょっと下手だけど、みんなを楽しませようって気持ちは伝わってきたし。久保君も喜んでたじゃん」
サキさんに気を使わせてしまった。
「ありがとうございます」
「ねえ、本当だよ。だから学園祭に向けてまた頑張りなよ」
黙っている僕に、サキさんは背中をビシっと叩いて部室に戻っていった。

翌日、僕はギターを持って登校した。
下駄箱で池田と鉢合わせると、気持ちの悪い笑みを浮かべて池田は言った。
「やっとやる気になったのかよ」
「ちょっとだけな」
「つうかよ、ベースとドラムだけじゃ練習にならねえんだよ。面白くもなんともねえ」
「そりゃそうだろ」
「それにあの猿と二人だと俺まで下手になった気がすっからよ」
猿とはジュンのことだ。タンバリンを持った猿のおもちゃと同じレベルだと池田が命名したのだった。
「でもジュンも頑張ってるわけだし」
「頑張っても上手くなんねーからな、あいつは」
「……これから伸びるかもしれないだろ」
なんで僕がジュンのフォローをしているんだ。

放課後に池田と部室に行くと、すでにジュンがドラムを叩いていた。ジュンは最近バスドラを克服したらしいのだけど、まだリズムが巧く取れていない。
演奏をすると、途中でバラバラになってしまうことがある。とくに早い曲は苦手みたいだった。
それから池田に関しても、あまりに体力が少な過ぎる。三曲ごとに休憩をはさまないといけないし、部室で煙草を吸うのは止めてほしい。
でも二人の欠点を指摘出来るほど僕も上手くはなかった。
三曲演奏したあとで、先に部室を片付けようと僕は言った。汚い部室のせいで空気が悪くて、歌いにくい。そもそも、こいつらなんでこんな部室で平気なんだ。
真っ先に文句を言い出したのは池田だ。
「かったりーな。どうせまた汚れるだろ」
ぶつぶつ。
ジュンは意外とそうじが得意らしくテキパキと動く。彼はおばあちゃんっ子らしく、掃除や洗濯はまかせろ、と言っていた。
ジュンはプロのドラマーを目指しているのだけど、どうやら卒業したら専門学校に通うつもりらしい。その学費もおばあちゃんが出してくれるのだと、ジュンは僕に話したことがある。
僕は応援すると言ったけど、正直ジュンがプロの世界で生きていけるのか疑問に思っていた。それは技術より、メンタルの部分でそう思ったからだ。
アンプの裏には煙草の吸殻が何本か落ちていた。先輩も煙草を吸っていたので、僕は毎日掃除をしていたのだけど、卒業してからは誰も手を付けていない。それは全部池田の捨てた煙草の吸殻だった。
当の喫煙者池田を見ると、こいつは不良ぶっているけど几帳面なので、ぶつぶつ言いながらもちゃんと掃除していた。
三十分くらいの掃除で部室はどうにか綺麗になり、失くしていた池田のピアスと、ジュンのギザ十円を発見できた。

僕らは休憩したあとまた演奏をした。部室が綺麗だと、少し気分もよくなった。でも、演奏はもう、駄目なものは駄目だった。

学園祭は今年も九月の末にある。現在、四月の半ばなので、まだ半年程期間があるのだけど、意味のない練習を半年続けても上手くならない。

だからといって顧問の老先生は音楽は専門外だし、久保先輩はアマチュアでバリバリ活動するような人だ、僕らなんかのために時間を使って下さいなどと頼めなかった。

考えてみれば、僕らには学園祭で演奏を成功させる動機が薄かった。

池田は暇潰しでベースをやり、ジュンは卒業するまでの練習くらいにしか思っていない。僕はといえば、バイトをしていて練習に割く時間は二人より少ないのが現状だ。

僕ら三人はまるでコンパスのない船のように、目印のないところをグルグル回っているだけなのかもしれない。きっとそれでは目的地には着けない。

漠然とそんなことを感じながら、時間は過ぎて行く。

五月になると桜は散り、新しいクラスも落ち着きを見せ始めた。だけど不安は増していく一方だ。

ロック部はこれじゃ駄目だ。なんか駄目だ。でも、どうすりゃいいんだ。

ジュンは相変わらずタンバリンを持った猿のおもちゃだし、池田はすぐにバテる。

新しい曲もいまだに練習していない。

五月の半ば、日曜の朝だ。僕は悪夢にうなされて目が覚めた。汗をびっしょりかいて、息を弾ませていた。心臓はバクバクと音を立てていた。

夢は学園祭で演奏している僕らの姿だった。池田はミイラとなり、

ジュンは猿となり、僕はギターの代わりにダイコンを持って舞台に上がっていた。演奏しようにも大根じゃ音は出ないし、池田は倒れるし、ジュンはタンバリンを鳴らしていた。舞台の下の観客は皆ブーイングをしており、僕らを冷たい目で見ている。僕は悪くない、許してくれ、そう言いながら目が覚めた。

汗を流すため風呂に入り、午後になってからも落ち着かず、相談相手を求めて久保先輩に電話をした。

「お久しぶりです先輩！　柏崎です」

「え？　誰？」

と久保先輩は言った。

忘れられてる……。

僕が無言でいると久保先輩はげらげら笑って言った。

「嘘だよ。忘れるわけないだろ」

げらげら。

「先輩……」

冗談に聞こえないです。

「どうしたんだよ？　お前が連絡よこすなんて」

「バンドのことで相談に乗ってほしくて」

「はあ？　お前らのバンドのことだろ、お前らでどうにかしろよ」

「それは、そうなんですけど……」

「しゃあないな。今から駅前のゲーセンに来いよ。待ってるから」

「え？」

「ゲーセンだよ。今俺一人でいるから」

「わ、わかりました！　すぐ行きます」

僕は通話を切ってダッシュで駅前のゲームセンターに向かった。

久保先輩は工場のツナギを着た姿でコインゲームをやっていた。

「お久しぶりです！」

と声を掛けると、久保先輩は振り向いて言った。

「よお。相変わらずエロい顔してんな」

「すみません」

僕は頭を下げた。
「隣座れよ。これやるから」
頷いて隣に失礼すると、先輩はコインの入ったカップを僕のほうに寄せた。
「これどうしたんですか？」
久保先輩はスロットマシンを指差した。
「で、お前らのバンドは上手くいってるの？」
「まったく上手くいってないです。そのことなんですけど、ベースの奴もドラムの奴も見栄えだけよくしようとして地味な練習しようとしないんですよ。全然上達しなくて、どうすればいいかわからないんです。できれば僕も先輩たちみたいな演奏したいんですけど、つか、あいつらもそう思ってるんだろうけど、なんか一向に目標に辿り着ける気がしなくて。だからどうすれば先輩たちみたいに演奏できるか色々と――」
「おいおい」
「はい？」
「俺たちの真似してどうすんだよ」
と久保先輩は渋面で言った。
「いえ、先輩たちには遠く及ばないのはわかってるんですけど……」
「あのな、お前らはお前らの好きにやりゃいいんだよ。下手でも、クソでも、それがお前らのバンドなんだから。好きに楽しくやってくれって」
「好きに、楽しくですか。そんなのどうやってやればいいのかわからないっすよ……」
なんだか見放された気分になった。
「アホか」
久保先輩は余っていたメダルを隣に座っていたおっさんに渡すと「行くぞ」と言った。
「どこに行くんですか？」
「とりあえず、パチンコだな」

久保先輩に連れられてパチンコ店に入った。先輩に「いくら持ってる？」と訊かれて、給料が入ったばかりなので二万はあります、とこたえた。
「全部つっこめ」
「でもこれ、食費とかも含まれてますんで」
「どうにかなるよ。気にするな」
「わかりました。先輩はいくら持ってきたんですか？」
久保先輩はポケットから財布を出して確認していた。
「六千円だな」
「勝てるんですかね？」
「無理だな」
「やっぱり止めませんか？」
それにパチンコ店って十八歳未満は入店禁止だ。
「ここまで来て止められるかよ」
僕は久保先輩の作業帽を借りて、マスクをした。変装だ。
そして久保先輩のあとに付いてパチンコ店に入った。店内の騒音と店員さんに怯えながらも、先輩と空いている席に座った。
やり方は先輩の見よう見まねだ。お金を入れる場所や、狙う場所を先輩が教えてくれた。僕の打った台は『ＣＲブタペンギン　渡る世間は鬼ばかり』という台だった。
先輩は三千円使ったところで煙草を銜えて他の台に移動してしまった。
しばらく打ち、僕は一万円を使いきろうとしていた。
再び玉貸しのボタンを押したとき、僕は無性に悲しくなってきた。なにをしているんだ、僕は。
時給七百五十円で働いて稼いだお金が、たったの三十分で消えてしまった。やっぱり断っておけばよかった。しかし、そう思ったとき、突然画面のブタペンギンが数字に突っ込んだ。
「おっしゃ！　こいこいこい！」

と言ったのはいつの間にか後ろにいた久保先輩だ。
僕も画面を凝視した。マスコットキャラのブタペンギンが汗を流して目を細め、必死に真ん中の数字を合わせようとしていた。
ふとブタペンギンの髪型がオールバックに変化した。顔は真っ赤だ。
「あつい！」
先輩は叫ぶ！　僕も緊張する。
派手な音楽と電光が一瞬止まり、ブタペンギンは「クアー！」っと鳴いた。そして数字を合わせることに成功した。
先輩は僕の肩を叩いて言った。
「やったな。ビギナーズラックだよ。じゃあ頑張れ」
「ちょっと、え、先輩どこ行くんですか？」
「帰る。負けたし」
先輩はいなくなってしまった。
久保先輩がいなくなったのと、突然の大当たりに僕は緊張して手が震えた。思いっきり未成年だ。
その後もブタペンギンは頑張り続け、僕の玉は急速に増えた。
店員さんに箱を替えてもらうたびに心臓が破裂しそうになる。
僕の玉は十分ごとに一箱増えて、床には八箱が積まれていた。ブタペンギンは絶好調だった。
でも、再び大当たりしたときに、店員さんが来て言った。
「お客様、大変申し訳ないのですが身分証を確認させていただけますでしょうか」
僕はどきどきしながら振り向きこたえる。
「すいません、持ってきてないんですけど……」
「当店では年齢確認できないお客様は、入店をお断りさせていただいておりますので」
もう完全にバレていた。
店員さんは哀れむように言った。
「大変申し訳ないのですが……この当りが終了したらお終いで。出

た分は構いませんので」
「……はい」
僕は玉を流してもらい、換金した。
結果僕の二万円は二時間で五万円になり、お金を持つ僕の手は震え、頭は混乱した。こんなに簡単にお金を手に入れていいのだろうか。パチンコはもうやらないと思うけど、三万円稼ぐのに普段ならどれほど苦労しているかと思うと、虚しくもあった。でも、やっぱり気分が良かった。お金が増えたことよりも、勝ったことが嬉しいのかもしれない。つか両方だ。
僕はマクドナルドでビックマックのセットとデザートを頼んだ。普段なら高価なセットメニューなど頼まないけど、こんな日くらいいいだろう。
一人でもぐもぐ食べてジュースを飲んだ。なんだか普段と景色が違って見えた。
僕は携帯を出して、久保先輩に電話をした。
「よお！　勝ったか？」
と久保先輩は言った。
「はい、途中で店員の人に年齢バレちゃいましたけど」
「まあ、そんなこともあるよ。でもよかったな」
「ありがとうございました。お礼にご飯奢らせて下さい」
「今度な。気分は少しは明るくなったか？　お前、さっきは犯罪者みたいな顔してたけど」
「お蔭様で！　でもパチンコはもう止めておこうかと」
「お前には似合わないかもな。あのな、俺たちはバンドもやるけど遊びもして、もちろんバイトもしてたんだよ。一日二十四時間あるから、バンド八時間、仕事八時間、遊び八時間でちょうど二十四時間になる」
学校と寝る時間が入ってないっす！
「遊びも全力でやってみな。バンドだって遊びの延長みたいなもんだよ」

「うす」
「ライブだってこっちが楽しまなくちゃオーディエンスは楽しんでくれないし。つか、たぶんこっちの感情が伝播するんだよ。それがどんどんハコのなかに広がっていくんだ」
「？」
「たまには息抜きしろよ」
「はい！」
先輩は通話を切った。
僕は残ったビックマックをほお張りながら、久保先輩まじパネェっすと思った。

翌日の放課後、僕は部室に行くと、二人の前で言った。
「おいお前ら！」
二人はなにも言わずにこちらを見た。ジュンは懲りずにスティックを回す練習をしていて、池田は携帯を開いてなにかしているところだった。
「僕は学園祭を成功させたいんだ。ってわけで曲決めるぞ！」
池田がうんざりした口調で言った。
「おい、なに燃えてんだよ」
「昨日悪夢を見たんだ。学園祭が大失敗に終わる夢だった」
「はあ？」
と池田がすっとんきょうな声を出した。
ジュンも口を開いた。
「俺も毎日見るよ」
そうか。そうだろうよ。
僕ははっきりと言う。
「このままじゃ、絶対に僕らは赤っ恥をかくはめになる」
「まだ時間はあんだろ」
「安心しろ。頑張るのは僕とジュンだ。池田は問題なさそうだし」
池田はよくわからないけど照れていた。

「でだ、僕は久保先輩に会ってきた」
ジュンと池田に緊張が走ったようだった。久保先輩の存在は僕らにとって大きい。
「久保先輩はバンドも頑張って、遊びも頑張れって言ってた。さっそく遊びに行くぞ！」
「よし！」
と池田はめずらしく張り切った。
ジュンはすでにスティックをバックに閉まっていた。
池田が言った。
「で、どこ行くんだよ？」
「……どうせお前ら金ないんだろ？」
池田はわざわざ財布を見せてきた。ボロボロで汚い皮の財布の中には、四百円とカラオケの割引券が入っていた。
ジュンの財布には二十円が入っていた。
「カラオケ行こうか。奢ってやるから」
二人は「やったー」と喜んだ。
そんなわけで僕らは駅前のカラオケに行き、五時から八時まで順番に歌ったのだった。そう言えば、二人とカラオケに来るのも初めてだ。
二人の歌唱力ってどのくらいなのだろうかと疑問だった。
結果、ジュンは下手だった。
でも、池田はもっと下手で、音痴だった。
ところで先輩が学園祭で演奏した『ハイスタンダード』というバンドの曲はカラオケでは歌えない。歌いたいならバンドを組んでやるしかない。そして歌詞は英語であり、歌っている僕は英語の発音なんてわからないので雰囲気で歌っていた。
カラオケでも雰囲気で洋楽を歌ったのだけど、それを聴いていた池田が自分も洋楽を予約リストに入れた。
池田も適当に英歌詞を歌うのだろうと思っていたのだけど、違かった。

池田は英語の歌詞になると音痴ではなくなり、発音が綺麗でよどみなかった。
僕はちょっと驚く。ジュンを見るとノリノリになっていた。
池田はそのことに気が付いていないみたいだった。邦楽を歌うときも自分が音痴だと自覚していないから、自分が英語の歌詞を上手く歌えていることにも気が付かないらしい。
一方、ジュンは音痴ではないもののあまり上手くない。でもなんだか勢いがある。それにダミ声なのでシャウトは迫力がある。
ただ気持ち良さそうに歌う二人に比べて、僕はあまり自分の声が好きではなかった。特徴がない。それが僕の歌だった。
カラオケを歌い終わった僕らは、なんとなくまだ遊び足りなくて銭湯に行くことにした。
そこも僕が奢るわけだけど、パチンコで勝ったのでそれくらいの気前の良さはまだ残っていた。
二人はまた「やっほー」と喜び、池田は「わりぃ」と笑いながら付け足した。
僕とジュンは自転車で通学しており、池田は電車を使っている。池田はジュンの自転車で二人乗りしていた。
銭湯に行く途中、パトカーにその姿を見つかり、拡声器で「こら！　降りなさい！」と怒られて池田は素直に降り、僕らはテクテクと歩いたのだった。
ふと思ったのだけど、煙草を持っている池田が補導でもされたら僕ら全員学校に連絡されて部活どころじゃなくなるんじゃ……。その辺り麻痺して考えてなかった。老先生にも迷惑を掛けてしまう。
池田を見ると気にしている様子はなかった。
僕は池田の横顔を見ながら言った。
「池田さ、煙草止めないの？」
「冗談じゃねえよ！」
と池田は笑いながら言う。
「金も掛かるし、喉にも悪いだろ」

「煙草は飯みたいもんだな。これがなけりゃ死んじまうよ」
「……はいはい」
僕はそれ以上強く言えなかった。
銭湯に着くと僕らはレンタルしたタオルと、設置されている石鹸で体と頭を洗い、チャポンと湯船に浸かる。
ジュンはガリガリだ。池田はさらに痩せていて青白かった。
三人並んでタオルを頭に乗せ「うぃー」と言い、池田は「あー極楽極楽」と言った。
「学園祭、成功させよう」
と僕は目を瞑ったままつぶやいた。
「当たり前だろ。去年より盛り上げてやるよ」
と池田が言った。
ジュンも言う。
「頑張ろうぜ！」
それからサウナに三人並んで入った。
そこで僕は言った。
「先輩たちに言うぞ。絶対に盛り上げるから、学園祭観に来てくれって」
「……」「……」
二人は反応しなかった。なんでだよ。
銭湯を出るともう十時だった。明日も学校がある。今日はここで解散することにした。池田を駅まで送ったあと、僕とジュンは並んで自転車を漕いでいた。
ジュンがポツリと言った。
「俺、明日から朝練もするよ。もうじいちゃんに頼んだんだ」
「じゃあ僕もなるべく行くようにするよ」
「ありがとうよ」
ジュンは空を見上げた。
翌朝は六時に起きて学校に行き、ジュンと二人で練習した。

池田と僕は同じクラスなので、僕は今朝の朝練のことを話した。
すると意外にも池田は憤慨した。
「なんで俺にも言わねえんだよ！」と。
「だってお前面倒臭がりじゃん」
「そりゃそうだけどよ。たまには行くかもしれねえだろ」
そこは否定しないのかよ。
「じゃあ来れるときは来いよ。部室の鍵はジュンが老先生から預かっているから、やる日はあいつに連絡してくれ」
「おうよ」
その日はバイトがあって僕は放課後の練習には顔を出せなかった。
自転車に乗りながらＭＤを聴き、学園祭でどんな曲をやるかを考えた。先輩と同じ曲をやりたいけど、さすがに、全曲同じものをやるわけにはいかないだろう。でも先輩たちがコピーしたバンドでも、違う曲をやる分にはいいかな。たぶん。
あとは二人の意見も聞かなくちゃいけないか。
バイト先に着くと、僕は学生服に店のエプロンを掛けた格好でレジに立つ。そろそろ一年経つのでお客さんとも顔見知りになったりしている。
そのなかでひときわ異彩を放つお客さんがいた。
その人は体が大きくて、髪は普段短いけど、化粧をしているときは、かつらを被っているのか長くなっている。クネクネと歩きながら、レジでお金を渡すときに手に触れてくることもあった。
その日もそのお客さんが来て、綿棒とチーズとビールを買っていってくれた。
「ありがとうございましたー」
と頭を下げると、可愛い笑顔で去っていくのだ。
僕は不思議な人もいるんだな、とバイトをしていてよく思う。
五時間のバイトを終えて、僕は店長にシフトの相談をしにいった。
週五日のシフトを週三日に減らしてもらえるか相談した。
その代わり、他の人が急に休んだとき代わりに出たり、土日や休

日はできるだけ朝から出してもらえるよう頼んだ。
店長は「うん、いいよ」と言った。
「度々、すみません。ありがとうございます」
「でもどうしたの？　彼女でもできた？」
「いえ、部活が忙しくて」
「青春してるね。今のうちだけだから、遊べるのは。どんどん遊んどいたほうがいいよ」
「そうっすかね……」
「そうそう、私なんてここの安月給で暮らしもいっぱいいっぱいだよ。ボーナスも今年からカットされるし、子供が新しくできるわで」
店長は二十八歳の二児の父親で、大変苦労しているのか、いつも目の下には隈がある。僕は店長に三万円貸して欲しいと言われて、渡したことがあった。いつ返してくれるのかはわからなかった。
「大変ですね」
店長は深いため息をついた。そして言った。
「柏崎君ってギターやってるんだよね、私のギター三万で買わないかな？」
「え」
「買ったときは三十万以上したんだけど、どうせもうやらないし、柏崎君が使うなら譲ろうと思うんだけど」
「いや、持ってますから。通販で買った二万のギターですけど」
「三十万のレスポールが三万だよ。お買い得だよ」
要らないならくれてもいい気がするのは、僕だけだろうか。
「……じゃあ譲らせて下さい」
「よし。やっぱり大切にして欲しいしね。使ってくれる人に譲りたいじゃない」
「わかりました」
三十万のギターは、少し怪しいと思った。
翌日もバイトだったので、終ってから店長にギターをもらった。

それから「これは内緒ね」と言われた。僕は誰に内緒にするのかわからなかったけど「はい」とこたえた。
家に帰ってギターケースを開け、その三十万のギターとやらを取り出すと、めちゃくちゃ汚れていた。ホコリが隅っこにこびりついて、弦は錆び、ボディーがなぜかベトベトしていた。どこで保管すればこうなるんだ。
僕は弦を外し、専用の液体とクロスを使ってギターを丁寧に磨いた。
その後新しい弦に張り替えてチューニングをし、マルチエフェクターに繋いで音が出るかたしかめた。問題ない。それに汚れていたけど、ネックの反りもないし、目立つキズもなかった。
そしてなにより、使いやすかった。通販のギターと違い弾きやすい。音も綺麗だ。それはレスポールというギターの特長でもあるのだけど、もしかしたら、本当に良いギターを僕は譲ってもらったのかもしれない。いやしかし、そんな都合のいい話があるわけはない。僕は少しだけ店長に感謝をした。

翌日の朝練から、僕はそのギターを持って行くことにした。前に使っていたギターは弦を緩めてケースに入れ、予備としてしまってある。狭いアパートだから母に捨てろと言われたけど、捨てるには愛着が沸いていた。買ったときは嬉しくてステッカーをペタペタ貼り、去年学園祭で先輩と一緒に演奏したギターだ。バスドラに叩き付けたりもしたけど、捨てたくはない。
新しいギターに対する二人のリアクションはなかった。
たしかに音は良くなっていた。僕の譲ってもらったレスポールといったタイプのギターは、ひょうたんのような形をしており、音が太くて、迫力があるように感じる　（前はストラトキャスターといったタイプだった）。でも少し重いので、長い時間練習していると肩が痛くなることがあった。
朝練が終わり、授業に出て昼休みになった。

僕ら三人は階段の隅で一緒に昼飯を食べている。なんだかんだ言っても、音楽の趣味が合うし、同じレベルで話せるので二人といるのは気が楽だった。
僕はそろそろと切り出した。
「いいかげん曲を決めよう。もう五月も終わっちまう」
ジュンはもぐもぐと飯を食べながら、流行のバンドをいくつか挙げた。それを片っ端から池田が拒否した。いつもこうだ。
「一応、僕がやりたい曲のスコアとＭＤは用意してある」
僕はバックからスコアのコピーとＭＤを取り出し二人に渡した。
二人は受け取り、無言でバックにしまった。
この辺の僕たちの感覚は意外に合うようだった。
しつこいけど、それは『ハイスタンダード』だった。
「二人もやりたい曲があるならスコアとＭＤ用意しといて。それまでは、とりあえずこれを練習していこう」
「まあ、いいだろ」
「俺もいいよ」
と二人は頷いた。
「あと」と僕は続ける。「先輩たちには学園祭に来てもらえるよう頼むぞ」
僕らは甘えを捨てなければいけないんだ。
微妙な間のあと、池田が言った。
「先輩たちが来てくれるのは大歓迎だけどよ、忙しいだろ」
ジュンも言う。
「もう少し上手くなってからでもよくね？」
「……それもそうか」
たしかに、やる気はそこそこ出て来たものの、僕らは全然下手糞なのだ。
僕自身、言ってはみたものの、先輩に来てもらうのは怖かった。
その後僕らは黙って飯を食べた。

# 二章　六月

六月になり雨が多くなると池田が当たり前のように文句を言い始めた。めんどくせーよ、だりーよ、雨降るなよ、じめじめするよ。
でもベースはしっかりと家に持って返って練習しているようだった。
そして、僕は思う。
遊んでる場合じゃない。
そう、僕らは血の滲むような練習をしなくてはいけないんだ。バスケ部を見ろ！　このジメジメしたなか体育館で声を出しながら必死で練習しているじゃないか。吹奏楽部はどうだ！　顧問が駄目出しをして何度も同じところを練習している。漫画研究部だって鉢巻して一生懸命頑張ってるんだぞ！　僕らは先月なにやったよ！　パチンコ行って、カラオケ行って、銭湯に行って、グダグダして終わりじゃねえか！　アホか！
「七百五十円になります！」
レジを打つ手が震えてしまう。
現実に戻るんだ。
しかし、今の状況を打破する手がまったく思い浮かばない。
スーパーのバイトが終わるともう十時だった。ＭＤを聴きながら自転車を漕ぐ。夏に切り替わる前の生ぬるい空気を感じながら自宅に帰り、とりあえず制服を脱いでロングＴシャツとハーフパンツに着替え、冷蔵庫からビールを一缶取り出して、また外に出た。
ぶらぶらと散歩し、近所の公園まで歩くと、ベンチに腰掛けてビールの蓋を開けた。
味の良し悪しなんてわからないけど、飲もう。
「はあぁ……」
長いため息のあと、空を見上げた。
たいして綺麗とも思えない星空に、なんの感慨も湧くわけもない。

でも酒の肴になるものもない。星空を見ることくらいしか思い浮かばなかった。

僕は学園祭を成功させたい。でもなんのためなんだ。バンドでプロを目指そうとか、そんな目標も僕は持っていないし、そもそも、高校を最後にバンド活動はお終いにするつもりでいるんだ。久保先輩に見てもらうため？　そうじゃない。顧問の老先生に今年も頑張れって言われたから？　そんなわけない。バンドが好きだから、それはちょっとはある。それか、予餞会での恥を拭いたいから。今更そんなプライドは残っていない。

「はーあ」

なんだか頑張る理由が見つからない。

ビールに口を付けてからまた空を見上げた。すると、夜空に一筋の流れ星が輝いた。そして心になにかが、ボワっと閃いた。

「サキ先輩……」

もやもやとしていた胸のつっかえが取れた。僕はサキさんのダンスに負けないくらいの演奏をしたいんだ。サキさんに演奏をしている姿を見てもらいたいから、まだロック部を続けてるんだ。なんでこんな簡単なことがわからなかったんだ。

僕はビールを一気に飲み干した。むせた。その勢いで公園を駆け、家に帰ってギターの練習をした。でも夜遅かったので小さなアパートでは音が出せなかったのだけど。

目的意識がはっきりすると、僕は目が覚めたかのように練習に打ち込むことができた。とにかく、基礎がしっかりしなければ話にならないに違いない。そういうわけで、二人を引き連れ市立図書館へ向かった。二人は図書館には始めて来たそうだ。

僕は久保先輩と何回か来たことがあった。久保先輩が小説を読んだり、歌詞を書いたりするのに図書館を利用していたので、僕も付いていっただけなのだけど。

久保先輩は自分で作詞作曲をする。オリジナルの曲を作り、アマ

チュアで活動している。英語を勉強して、一度だけ、海外の小説を原典のまま読んでいるのを見掛たことがあった。
久保先輩は辞書を引きながら、サリンジャーやフィッツジェラルドの著書を読んでいた。でも僕が声を掛けると、久保先輩はそれをバッグにしまった。それから、再び歌詞の制作に戻った。
久保先輩は他人に自分の努力している姿を見られるのが嫌いなのだと思う。とくに後輩には見せたくない姿だったのかもしれない。
そんな思い出のある図書館で、僕たち三人は探し物をしている。
「基礎から始めるロック・ドラム」
「始めようロック・ベース」
「コツがつかめるロック・ギター練習帳」
僕らのレベルはせいぜいこの辺だ。
それらを貸出しし、翌日学校のコピー室で必要な部分をコピーさせてもらった。ジュンは音楽室からメトロノームを借り、基礎から練習を始めた。僕と池田も、ピッキングやコードの押さえ方などを基礎から確認した。
反復練習だ。休み時間や昼休みも練習し、ジュンは常にスティックを持つようになった。腰の辺りに挟んでいる。
それにしても、僕のやる気に二人がそこそこ付いてきてくれたのは、とても意外だった。
学園祭までに十曲は覚えたい。
しかし、今のジュンの体力では十曲を全力で演奏するのは難しい。筋力も体力も技術もない。でもジュンのパートが、もしかしたら三人の中で一番きついのかもしれなかった。
ジュンのパートはスピードとパワーがありったけ必要だからだ。
僕も池田も、ネックになるのはジュンだと感じていた。
「あのさあ、ジュンは筋トレとかしてる？」
僕は帰り道で訊いた。
「ああ、毎日な！」
ジュンは少しずつ成長しているから、嘘ではないだろうし、僕ら

三人のなかで恐らく一番努力しているに違いない。
「どんなことしてるの？」
「公園でまずは懸垂を十回して、腕立て伏せと腹筋を三十回。それに牛乳を毎日飲んでる」

じめじめした天気のなかで僕と池田はコンビニに買出しに出かけた。池田はその途中、物陰で煙草を吸う。
「悪いな、一服させてくれ」
と池田は言い、風が吹いたので僕はライターの火が消えないように盾になる。
煙草を止めろとは、あれ以来言っていない。しかし、池田自身止めないといけない、そう思ってはいるらしかった。
吸う本数は前よりも減ったらしいし、部室では吸わない。吸うときもちゃんと隠れる。
その池田の変化はジュンの努力を見ているからかもしれない。
コンビニで僕らは飯を買い、外に出る。
そのとき、僕のバイト先によく来るお客さんを見掛た。
この日は普通の格好で、短髪で化粧もしていない。でも服装はややフォーマルな感じで、白いシャツに黒いスーツを着ていた。ただシャツにはキラキラとラメが入っている。
あちらも僕に気が付いた。僕は挨拶し、頭を下げた。
「あら、こんにちは。あなた江南の生徒だったのね。こんなところでなにしてるの？」
池田はキョトンとしていた。
「これから部活です。買出しに来ただけで」
「へえ、なに部？　デ部？　いやだぁ」
いや、そんな部ないっす！　と僕は冷静に突っ込んだのだけど、池田はブブっと笑った。
「ロック部ってとこで、バンド演奏してて。こいつともう一人メンバーがいます」

「まあ、そんなのあたしの代にはなかったわね」
江南の卒業生だったのか。
「ロック部は去年できたばっかりだから」
「羨ましい。で、あなた楽器は？」
と彼は目を細めながら言う。
「えと、ギター兼ヴォーカルです。ちなみにこいつはベースです」
と僕は池田を見た。
池田はちっすと頭を下げた。
「ふーん、楽しそう。頑張ってね、応援してあげる」
「うす」
僕らは笑顔で別れようとしたのだけど、ふと、思い出したように彼は言った。
「久留米先生はまだいる？　元気かしら」
久留米先生って誰だっけ、と僕は考える。
「やっぱりいるわけないか、もう十年も前のことだし」
僕が首を捻っていると、池田が口を挟んだ。
「久留米って、俺らの顧問だろ」
「そうなの？」
老先生の名前、そういえば知らなかった。
「たしかそうだよ」
と池田はかったるそうに言った。
「久留米先生、まだ在校されているの！？」
と彼は驚いた。
僕らも驚いた。
彼の目がとんでもなく開かれ、僕を見ていたからだ。
「あの、僕ら老先生って呼んでるんですけど。もう白髪まじりで、優しい先生ですよね」
「そう。素敵な先生だったわ」
と彼は言った。
「たしか、三年前くらいに江南に戻って来たんだよ」

と池田は言った。意外と物知りだ。池田に江南出身の兄がいるからかもしれない。
そして、彼を見ると本当に驚いているようで、少し切ない表情にも見えた。
でも、すぐに明るく言った。
「今度、あんたたちの部活見に行っていいかしら？」
「あ、もちろんです！　ただ全然下手ですけど……」
「いいわ」
と言い、彼は財布から名刺を取り出して、僕は受取った。
名刺には、スナック・メルヘン　しげちゃん　と書かれており、携帯電話の番号とメールアドレスが載っていた。
「あとで連絡頂戴、私これから仕事なの。ごめんね」
「了解っす！　頑張って下さい」
僕と池田は頭を下げた。
しげちゃんはスタスタと歩いて行った。

池田やその他の目立とうとしている生徒を見て思うのだけど、本当に危ない奴、というのは一年生の二学期くらいには退学している。残っている奴はだいたいが本質的にそんな気のない人間だ。それが、地域で最低偏差値の人間が集まる江野守南高等学校に通っている僕の感じていることだった。もちろん、その中には目標が持って入学する人もいる。勉強よりも自分の目標が重要だと感じて、それに向かって努力するために入学する。
それはダンス活動であったり、バンド活動であったりと様々だ。
しげちゃんと別れたあと、僕は名刺に書かれた連絡先にメールを送った。こんにちは、練習なんですけど明後日の放課後やります。来れそうですか？
しげちゃんからは「おっけー。どんなもんか楽しみにしてるわ」と返信があった。
老先生にも、ＯＢが来るのでその日は部室に来て下さいと伝えた。

「ＯＢって誰だ？」
と老先生は湯のみを置いて言った。
「しげちゃんです。本名はわからないです」
「は？」
でも、しげちゃんは前日に学校の事務に連絡して、部活動見学をさせてもらえるように頼んでいたらしい。
それから問題なく部活動の見学に来てくれ、色々とあった。もちろん、老先生との邂逅もあった。
しげちゃんは二十六歳の男だ。でも心は女だ。端的に言えばオカマである。十年前、しげちゃんが高校二年生の頃の担任が久留米先生こと、現ロック部顧問の老先生だった。
高校生の頃、しげちゃんはまだ自分が同性愛者だと認識していなかった。でも、自分が周りの男子生徒同様に女子生徒に恋心を抱くことはなかったし、かといって男子生徒を好きになるかといえば、そうでもなかった。しかし、担任の久留米先生は違った。
しげちゃんの初恋の人、ではない。初恋はまだしげちゃんが幼い頃に、親戚のお姉さんに抱いた。
だけど、しげちゃんの二回目の恋は老先生だった。それを恋だとわかるまで、しげちゃんは苦しんだ。
悩み抜いた。
そして結論に至った。あたしは同性愛者であり、老先生が好きなのだ。師弟関係を超えた感情だと。
当時、高校生だったしげちゃんは、老先生へ自分の気持ちを伝えることなくそのまま卒業し、その後、あるきっかけでオカマバーで働くことになる。そのときにバンド活動に終止符を打ったのだそうだ。
しげちゃんにとって、老先生は卒業して忘れたはずの片思いの人だった。
僕は現在、しげちゃんの２ＤＫのアパートの一室でビールを飲んでいる。

池田とジュンもいる。
しげちゃんは煙草の煙を吐き、遠い目をしていた。
ところで、しげちゃんがバンド活動をしていたのは、どうやら堂々とメイクができたからだそうだ。ビジュアル系バンドの走りのようなスタイルで、オリジナル以外では、Xやキッスなどもコピーしていたらしい。働いてからは職場でメイクができる、というわけでそっちに専念したのだった。もちろんバンドを抜けた理由はそれだけじゃないのだと思うけど、しげちゃんはそれ以上話さなかった。
その話を僕らに聞かせてくれたところだ。
池田は酒を飲めないのでドクターペッパーを飲んでいる。ジュンは正座をして缶酎ハイを飲んでいた。
しげちゃんは言った。
「青春って一瞬よ。だから精一杯頑張らなくちゃだめ。後悔したくないでしょ」
後悔。
ジュンが身を乗り出して言った。
「師匠！　頑張ります！」
池田は、そんなジュンを見てやや引いていた。
僕は言った。
「しげちゃんは老先生のどこが好きになったの？　だってしげちゃんが高二のときでも老先生は五十歳近いでしょ」
「あたし、渋い人が好きなの」
「そうなんだ」
この辺の老先生の人柄はよくわからなかった。久保先輩達も、老先生を信頼していた。
「僕らなんかにそんな大切な思い出を話してよかったの？」
「たいした思い出じゃないわよ。ガキんちょに話すことなんて」
「だよね」
僕はビールを飲む。
ジュンはつまみの燻製イカを食った。

池田は制服の内ポケットから煙草を出して吸おうとした。火を点けようとしたところで、しげちゃんがそれを奪い取った。熊のような動きで。
「よくないわよ」
呆然としている池田に、しげちゃんは言った。
「あんた、高校生のくせにセッターなんて吸ってるの？」
「いいだろ、べつに」
と池田は言う。
しげちゃんは話すとき相手の目を見るのだけど、池田は必死で逸らそうとしていた。
「いいわけないじゃない」
しげちゃんは自分の煙草を吸って、ゆっくり煙を吐いた。
「だってよ、こいつらだって酒飲んでるし」
「未成年だから吸うなって言ってんじゃないのよ」
「じゃあいいじゃんか……」
池田はタジタジしていた。
「これからあんた、煙草なんて吸えない体になんのよ」
池田はぶら下がったバナナが取れない、オラウータンみたいな顔をしていた。
また少し戻るのだけど。
この日の放課後もいつも通り部室に集まり、練習の準備をしていた。
しばらくしてから、約束通りしげちゃんが現れた。しげちゃんは部室の隅で腕を組んで黙って練習を見ていたのだけど、指でトントンとリズムを取っていたりする。
まずは予餞会で演奏した三曲を聴いてもらった。もう予餞会から半年が経っているので、たぶん人に聴かせるレベルには達しているはずだ……と思ったのは僕の思い上がりで、しげちゃんは右手で隠しながらアクビをしていた。
三曲終わって一旦休憩した。池田はベースを置いてアンプの上に

座っていた。
この時期、旧校舎の三階にあるこの部室ですら蒸すような暑さだ。僕らは制服を脱いでTシャツ姿になっていた。池田はズボンをまくってゴボウのような足を出しているし、ジュンはTシャツをビショビショにして塩をふいている。その光景だけ見れば、なんとなくバンド頑張っています、って思えるかもしれない。
演奏を終えた僕らはしげちゃんを見た。
一言目でしげちゃんは言った。
「あんたたち、下手ねえ」
「……」「……」「……」
僕らは改めて落ち込んだ。
「ちょっと貸してちょうだい」
としげちゃんはジュンに近づき言った。ジュンはドラムの席を譲った。しげちゃんはファーマルな格好をしていたのだけど、そのシャツの首元のボタンを外して、袖もまくった。厚い胸板と太い腕があらわになった。
ジュンからスティックをもらうと、しげちゃんはドラムを叩き始めた。
瞬間、爆音が学校中に響き渡った。
僕と池田は呆然とし、ジュンは目を丸くしていた。
しげちゃんはビートを上げる。
ぶっ壊れるんじゃないかって程のドラミングだった。

しげちゃんのドラム演奏が一段落付く頃に、老先生が部室に現れた。
ドアをゆっくり開けて入ってきていた。
しげちゃんは老先生に気が付くと、演奏を終えて言った。
「やだー、お久しぶりです先生。すっかり老けましたね」
老先生は笑顔で言う。
「余計なお世話だよ。ドラム壊すなよ、築地」

しげちゃんの本名は、築地重雄という。
「いやだぁ、そんなに力持ちじゃないですよ」
あっはっは。と老先生は笑う。
しげちゃんはジュンにスティックを返すと「どうも」と言った。
それから軽い足取りで老先生と廊下に出た。
「池田、やるぞ」
池田はアンプから立ち上がりベースを構えた。ジュンもスティックを頭上に挙げていた。
僕らは熱に浮かされたような気持ちのまま練習を再開した。
しばらくして、しげちゃんが老先生との話を終え、部室に戻ってきた。僕らは一旦演奏を止めた。
「あんたたち、学園祭に出るのね」
しげちゃんは確認するように、そう訊いた。
「うん」
「去年は盛り上がったらしいじゃない」
「去年は物凄かったよ。僕らは先輩の演奏聴いてロック部にいるんだから」
しげちゃんはなにか考えているみたいだった。そしてため息を付いた。
「あんたこちこれからうち来てちょうだい。本気でバンドやんなら協力してあげる」
そして、僕らはしげちゃんのアパートに向かったのだった。

しげちゃんが僕らに協力してくれるのは、どうやら老先生がそれとなく頼んでくれたからしい。しげちゃんだって暇ではない。毎日新宿のスナックで働いている。それでも引き受けてくれた理由に、老先生が今年で退職を決めているということがあった。
僕も知らなかったけど、もう老先生は決めてしまっている。
それならばと、しげちゃんは学園祭までの四ヶ月を僕らのために使ってくれることにした。

しげちゃんはビールを飲みながら言う。
「久留米先生はあんたたちのこと心配なのよ。頑張ってるとは言ってたけど、あたしが見た感じ全然駄目だしね」
「やっぱり」
「あと四ヶ月しかないから、あんたたちが本気でやるんなら手伝うとは言ったんだけど」
うーん、としげちゃんは悩む。
「お願いします！」
と僕は頭を下げた。こんなに心強い人は僕は他に知らない。
ジュンも頭を下げた。
池田は不審そうに僕らを見た。
「どうしたんだよ？」
と僕は言った。
「いや、なんでもねえよ」
「まあいいわ、学園祭で演奏する曲なんか教えてちょうだい」
そう言えば、
「……まだ決まってないです」
しげちゃんは目蓋をパチクリさせた。

僕らは学園祭で演奏する曲すらまだ決めていなかった。去年は二十曲以上演奏したのだけど、今年は、目標五曲くらいにしよう。十曲はやりたかったけど無理だ。予餞会で演奏した曲はさすがにできないので、新しい曲を五曲。うち三曲はすでに練習しているので、あと二曲ならできるはずだ。
ただ、完成度を上げないといけない。
「もう全曲ハイスタでいいんじゃない？」
と僕は二人に言った。
「ハイスタ聴いてる奴ってうちの学校にいんのかよ？」
と池田は仏頂面で言い、続けた。
「それに去年もハイスタやったろ。しかもあんだけ盛り上がったの

に。今年も同じ曲やってどうすんだ」
「じゃあ、どんなのやりたいんだよ」
オフスプリング、グリーンデイ、ノーエフエックス、はたまた、ブリンク１８２、ＳＡＭ４１、エアロスミス、オアシス、レディオヘッド、クラッシュ、ニルヴァーナ、ブルーススプリングスティーン。そんな名前が出た。
「誰が歌うと思ってんだよ！」
そもそも三人でできないじゃないか。
「ギター弾きながらそんな曲歌えるはずないだろ」
「じゃあ、モンパチとかハイロウズか？」
「それならたぶん……」
「ハイスタにするか」
と池田はつぶやいた。
「ジュンは大丈夫そう？　たぶん五曲くらい演奏すると思うけど」
「……おう」
「じゃあ、全曲ハイスタでいいか」
こんな決め方でいいのか。
「決まった？」
としげちゃんが言った。
「あ、はい」
しげちゃんは僕らが曲を決めている間に、なにかメモを作っていた。
それを僕らに渡した。
「とりあえず毎日そのトレーニングしといて」
メモには筋力トレーニングのメニューが書いてあった。ランニング、腕立て、腹筋、背筋、懸垂、池田のメモには禁煙、さらに食事では野菜を取るように、と。
「それサボったら」
としげちゃんは唇を尖らせて池田を見た。
「キスするわよ」

池田は「うぎゃ！」と叫んであとずさった。
池田はしげちゃんが苦手みたいだった。
それから僕らはまじめに筋力トレーニングをし、新しい曲の練習も始めた。池田は本当に禁煙を始めた。

暑さを増してきたその日、素敵なお客さんが部室に遊びに来てくれた。ダンス部のサキさんだ。
ジュンはTシャツがすぐ汗で駄目になるので、上半身裸だった。池田もTシャツを肩まで巻くっている。
「汗くさいねー」
とサキさんは笑いながら入ってきて、「ま、私たちの部室も同じだけどね」と付け足した。
「こんちはっす！」
二人もうっすと頭を下げる。
「まじ、塩用意しといた方がいいよ。夏は死んじゃうから」
「そうします」
はいこれ、とサキさんは二リットルのスポーツドリンクを差し入れてくれた。
「最近頑張ってるじゃん。今の曲も去年久保君がやった曲でしょ、上手い上手い！」
「え、そうすか」
僕はテヘヘとなって頭を掻いた。
「池田君とジュン君も顔付き変わってきたね。かっこよくなったよ、前より」
池田とジュンもテヘヘとなっていた。
「今度、僕も練習見に行っていいですか？」
と僕はサキさんに訊く。サキさんは笑顔で頷いた。
「もちろん！　ついでに踊っていきなよ、教えてあげるからさ」
「行くっす！」
「うんうん」

サキさんはジュンにちょっとやらせてと言い、ドラムを叩いた。意外と上手くて僕はちょっと驚く。
やんわりとした雰囲気のなかで、僕らはサキさんの差し入れてくれたスポーツドリンクを回し飲みした。
サキさんは「あ」と思い出したようにつぶやき、ドラム叩く手を止めた。
「この前久保君に会ったんだけど、学園祭観に来てくれるって言ってたよ」
僕はスポーツドリンクを噴出した。
ごほごほと咳き込んでいると、池田が嫌そうな顔をした。
僕はサキさんを見た。完璧なスマイル。でも僕の慌てぶりを少し不思議に思っているようだった。
「まじすか」
「気合入れなくちゃね」
「……はい」

僕らはサキさんがウルトラスマイルを残して部室を去ったあと、会議をした。
「もう後には引けないぞ。わかってるよな」
「……どういう意味だよ」
と池田が言った。
「久保先輩の前でまたクソ演奏なんてできないってことだよ。前回大失敗してるわけだし、一応先輩たちが作った部なんだから、引き継いだ僕らが恥かくようなことできないだろ」
「っても、そんなに心配することか？」
「わからん」
わからんが、久保先輩は本当になにをするかわからない。
ジュンは少し自信が付いてきているのか、久保先輩の名前を聞いても顔色は変わっていない。
「とにかく、僕は久保先輩に会ってくるよ。それに相談したいこと

もあったし」
「ああ？」
池田は僕がなんで困惑しているか、わかっていなかった。
僕はすぐに久保先輩にメールを送った。お久しぶりです。ご迷惑かもしれないんですが、また相談させてもらいたいことがありまして。ご飯も奢らせてもらいたいので、都合のいい日教えていただけませんか。
夜の十時頃に久保先輩から電話があった。
「よう！」
「お疲れ様です！　仕事終わりですか？」
「ああ」
「すみません、度々」
「いいって、寿司奢ってくれるんだろ」
「寿司ですか！　いや、大丈夫です寿司でも焼肉でも奢ります」
「うそうそ。本気にすんなよ！」
げらげらと久保先輩は笑った。
「そんじゃまあ、ガストでいいや。今から来れるか？」
「はい！」
「じゃあ俺らがよく行ってたガストな」
「うす！」

ガストで久保先輩とご飯を頼んだ。ガストといえど、食い盛りの男二人が行けば二品三品で終わるわけもなく、とりあえず八品を一気に頼む。僕もまだ飯を食べていなかった。
「お前、少し顔付き変わったんじゃないか？　バンド上手く行ってんのか」
と久保先輩はモグモグしながら言った。
「なんとか」
「で、今年はなにやんだよ？」

「ハイスタです」
「お前ら、今年もハイスタやんのか……」
僕はうす、と頷いてからドリンクバーに二人分の飲み物を取りに行った。
席に戻ると料理が来ていたので、食べながら話をする。ガツガツ食う。久保先輩の食欲はすさまじく、あっという間にハンバーグセットを食べてしまっていた。
「それで、何曲やんだ？」
「今のところ、五曲くらいを予定してます」
久保先輩は少し間を置いてから言った。
「ハイスタだぞ」
「はい？」
「五曲ってお前、十分ちょっとで終わりじゃねえか」
「……ですね」
「あと十曲やれ」
「ええ！」
「まだ四ヶ月はあるし、夏休みも挟むだろ。いけるよそんくらい」
「……」
「俺らのライブでも告知してやるから」
この展開はまずい、と僕は感じた。
「いえ、あの、久保先輩が来てくれれば僕らはそれで」
「まあ、どんくらい来るかはわからないけど。ほら、意外と学園祭の設備よかったし、体育館って広いだろ。屋台もある。去年楽しかったって人がけっこういたんだよ。今年はやんないのかって訊かれたりもするし」
それは久保先輩達が演奏したから盛り上がっただけです！
「五曲しかやらないんじゃ駄目だろ。あと十曲な」
「……うす」
いきなり、天辺が見えないくらいハードルが上がってしまった。
久保先輩はウエイトレスを呼んで、注文を追加した。僕もついで

に追加。
「あれ、久保先輩のライブはいつなんですか？」
久保先輩は半年程ライブをしていなかった。なんでも卒業後、ヴォーカル兼ベースの先輩が一人でインドに旅立ったのだそうだ。久保先輩とドラムの先輩は黙って見送ったらしい。連絡もなかったみたいだけど、無事に帰ってきたのか。
「来週の金曜日だよ。来るか？」
「もちろんです！　あとベースとドラムも連れて行きたいんですけど」
「そっか」
久保先輩はバックから日取りと場所の書かれているチケットを取り出し、僕に渡した。
「あざす」
会計は八千円くらいで、それでも久保先輩は余裕があるみたいだった。ガストでよかった。財布を見てそう思った。

翌日の昼休みに僕は二人にそのことを伝えた。
久保先輩は学園祭に来る気満々で、しかもお客さんを連れて来るらしい。よってあと十曲は演奏するようにとの厳命を受けたのだと。
ジュンは昨日の自信ありげな様子はどこへ行ったのか、顔を真っ青にして弁当の箸を置いた。
池田はやつれたチンパンジーみたいな顔をしていた。
「後には引けないってわかってるよな」
何回目になるかわからないこの台詞のあと、やはり返事はなかった。
沈黙のあと、池田が食パンを齧りながら言った。
「そういやお前、先輩に相談するとか言ってたよな。なに相談したんだ？」
本当は曲順どうするかや、音作りのことなんかを訊こうとしたけど、なんとなく切り出せなかった。

「もう少し曲覚えてからにしようと思って止めた。ハードル上がったから」
「はあ？」
ジュンが思い出したように言った。
「そうそう、しげちゃんから連絡あったんだ」
「ジュンに？」
「そう」
僕と池田に連絡はなかった。
「それで、しげちゃんはなんだって？」
「なんか、学校終わったら駅で待ってろって」
「一人でかよ？」
と池田が訊く。不審そうに。
「たぶん！」
僕と池田は顔を見合わせた。一応、僕らも一緒に行くか……。

僕らは放課後、しげちゃんに会うために約束の駅に向かった。
クラクションが鳴る。見ると軽自動車に乗ったしげちゃんが手招きしていた。
「おまたぁ」
としげちゃんは窓から顔を出して言った。本日、しげちゃんはデニムパンツにTシャツとカジュアルな装いで、一見普通の男性に見える。
ドアを開けて中に入る。後部座席に池田とジュンが乗って、助手席に僕が入り込んだ。
シートベルトをしてから、僕は言った。
「三人で来てもよかった？」
「問題ないわよぉ」
と語尾上がりの口調でしげちゃんは言う。
「どこ行くの？」
「場所言ってなかったかしら？　あたしの実家」

車は発進し、しげちゃんの実家には十分程で着いた。そこは目が飛び出るくらいの豪邸だった。大きな木製の門の前でしげちゃんは車を止めて、インターホンで誰かと話す。すると門が開き、車を庭に駐車して僕らは降りた。

庭にバスケットゴールがあり、大型犬が三匹放し飼いになっていた。しげちゃを見ると、ワンワンと寄ってきた。僕とジュンは犬が好きだ。よしよしと撫でると尻尾を振って、お座りした。池田は犬が大嫌いだ。子供の頃、追いかけられて尻を噛まれたらしい。

犬も池田が嫌いらしく、ぐるぐると喉を鳴らしていた。

「早く中に入ろうぜ」

と池田がそわそわしながら言うので、僕とジュンは犬を撫でるのを止めた。

出迎えてくれたお祖母さんに挨拶をして、僕らはテクテクと進む。廊下には絵が飾られて、広い和室や、システムキッチンがチラリと見える。完全にバリヤフリーになっていた。

しかし、僕らが案内されたのは地下だった。階段を降り、ドアを開くけど真っ暗だ。しげちゃんは電気を点けた。

パッと照らされたその空間に僕は驚愕する。この豪邸のどんな部屋よりも凄かった。隣ではジュンが目を見開いて戦慄(おのの)いていた。

部室より広いその空間は二十畳くらいはありそうだった。コンクリートの打ちっぱなしの床に壁。筋力トレーニング用の器機やフリーウェイト用の器具などが揃えられており、奥にはドラムセットが置かれていた。

池田が「すげえ……」とつぶやいた。

ジュンは「ウキャー！」と叫んで、ドラムに走っていった。

しげちゃんは僕らを見て言った。

「見ての通りの場所よ。あんたたちを鍛えるために丁度いいんじゃない」

「僕ら使っていいの？」

「そう」

アンプは置いていないので僕と池田には連絡を入れなかったのかもしれない。
「ここなら夜中も練習できるでしょ」
「うん。でもこれすごいね！」
「皆家出ちゃっててて、ここも使う人もいないから。あとトレーニングは欠かさずやってるわね」
としげちゃんは目を細めて言う。
僕らは頷く。
「トレーニングマシンの使い方も教えるから、鍛えていきなさい」
「しげちゃん……、頑張ります」
池田を見ると、さすがに感謝しているみたいだった。頭を下げていた。

この日、僕らはマシンの使い方を教わり、ジュンはドラムの指導を受けた。それから、外の物置小屋からアンプを運んできて、設置をし、僕と池田も練習をした。
気が付けば時計は十時を回っていた。
「ちょっといいかな」
と僕はジュンのドラムを見ていたしげちゃんに話し掛けた。
「どうしたの？」
切り出しにくくてこんな時間になってしまったのだけど、今日のうちに相談しないといけない。僕は、曲数をあと十曲増やすことを伝えた。
しげちゃんは「え！？」と驚いた。
「あと十曲って、あんたたち合計で十五曲演奏するの？」
僕は緊張した。
「無理かな……？」
「無理もなにも……でも、なんで？　理由でもあるの」
理由は久保先輩にやれと言われたから。そう言おうとして言葉を飲み込んだ。僕らが演奏する理由は、僕らがそう決めたから。言葉

に責任を持たせなければ、協力してくれるしげちゃんにも、久保先輩にも、本気でやりますなんて嘘になると思った。池田とジュンも練習を止めて話を聞いていた。
「僕らも、学園祭ライブを盛り上げたくて」
しげちゃんは黙ってなにか考えていた。
僕は池田に振り向いて言った。
「そうだよな、池田？」
池田は薄っすら笑みを浮かべて言う。
「おう。当たりめえだ」
ジュンは両手を挙げて言った。
「頑張るよ！」
しげちゃんは頬に手を添えて優雅に悩む。そして低い声で言った。
「死ぬ気でやれんの？」
僕らは反射的に頷いた。
「じゃあ、やってみなさい。できることはしてあげるから」

具体的に僕らがどのように練習し、現状で理想のバンドを作り上げるかは、しげちゃんがアドバイスを出してくれた。
まずは毎日の練習。朝錬、放課後、それが終わったこの地下室で練習をする。しげちゃんが来ない日も、僕らが使えるようにしげちゃんはお祖母さんに頼んでくれ、快く承諾してくれた。僕らは頭を下げて、家の掃除や、庭の手入れや、その他手伝える用事は遠慮なく言って下さいと言った。
しげちゃんは「別にいいわよ、そんなの」と言った。僕らがなにかしなくても手は足りているらしい。「感謝してくれるなら、学園祭ライブ成功させてちょうだい」そう言った。
曲数を増やすにあたって、池田がヴォーカルも担当することになった。
試しに池田が歌ってみると、初めてなのに、ベースを弾きながら歌うこともあまり難しくなさそうだ。ただ、マイクのない状態だっ

たとはいえ、やはり声量が小さいし、声が続かないのはなんとかしないといけない。それでも、僕より上手いかもしれない。しげちゃんも池田のヴォーカルにちょっと驚いていた。
「あんた、意外と器用ね」
「そうか？」
と池田は少し照れた。
「ただその仏頂面じゃ女は寄ってこないわよ」
「……」
池田はぎこちなく笑って見せた。
池田がヴォーカルも担当すれば、僕の負担が減る。今まではギターを弾きながら僕が歌っていたので、どうしても易しい曲が中心になっていた。ギターパートが難しいととても歌えないし、ただでさえミスが多かった。これで演奏できる幅を広げることができる。
池田にも不満はないようだった。当たり前だ。今までだって歌ってくれてよかったじゃねえか、と思ったけど、それは煙草やら運動不足のために任せられなかったのか。
それから、ジュンもリズムが安定してきたら叫ばせるつもりだとしげちゃんは言い、本人もやる気を出していた。
曲目については、全曲『ハイスタンダード』をやるつもりだったけど、それは止めようということになった。しげちゃんも「それじゃ面白くない」と言った。
僕らは他に、グリーンデイ、スネイルランプ、モンゴル８００を演奏することにし、モンゴル８００とハイスタの一部の曲はスコアを持っていなかったため、耳コピすることになった。
それも練習になるからとしげちゃんは言い、あたしが駄目出しをたくさんしてあげるから安心しなさい、とも言った。僕らはしげちゃんの細めた目を見てゾクっとなり、黙った。
学校サボるか、と池田が小声で言った。
「……あんたたち」としげちゃんは腕んで僕らを見た。「学校サボって久留米先生に迷惑かけちゃ駄目よ」

僕とジュンは一拍おいて「うーっす」とこたえた。池田を見ると、唇を突き出してゴリラみたくなっていた。

六月には中間試験があるけど、僕らの学校では試験前に配られるプリントをサラサラと覚えてしまえばまず赤点になることはない。追試などやっている暇はないので、とりあえず最低限の勉強をし、三人ともつつがなく試験をクリアした。

その月の終わり。久保先輩のライブの日が来た。

ライブは地元の小さなライブハウスで行われる。僕は先輩たちのステージは何回か観に行ったことがあった。ジュンと池田は学園祭を除けば始めてだ。大きなステージで行われるプロのライブとは違う、小さなハコならではの良さがある。

土曜の六時からスタートし、先輩たちの他に三組が演奏する。僕らはスタート直後の六時にライブハウスに入った。

ワンドリンク千五百円の入場料を支払い、ドリンクの券をもらう。ジュースを片手に僕らはテーブルについた。

池田はブラックのデニムパンツを穿いて、黒いシャツを着ていた。靴はドクターマーチンだった。胸元にはクロムハーツを下げている。ジュンはディッキーズのハーフパンツにエイプの偽物のTシャツを着ていた。靴はペンキのかかったナイキのスニーカーを履いており、右手にミサンガを付けていた。僕は古着のリーバイスを腰で穿いて、白いロングTシャツを着ていた。

三人でテーブルを囲んで座っていると、池田が言った。

「ガラガラだな」

僕は飲み物に口を付けてから言った。

「まあ、先輩たちは三組目に演奏するから」

現在、本日一人目のアーティストが演奏している。シンガーソングライターで、フォークギターで弾き語りをしている。曲が終わると、MCを始めた。

店内には僕らだけしかいない。彼は五分間しゃべり、次の曲に移

った。
ジュンは真剣に聴いているようだった。池田は退屈そうだ。
「ちょっと早く来すぎたな」と僕は言った。
「ったくよ、こんなの聴きに来たんじゃねんだよ」
ぶつぶつ。
「けっこう楽しいじゃん」と言ったのはジュンで、ライブに来るのが始めてのせいかやや興奮気味だった。
三十分後、シンガーソングライターのステージは終了した。
二組目は八人構成のボイスパーカッションのグループだった。
その頃になると、徐々にお客さんが増えてきた。
グループは男性六人女性二人で、体でリズムを刻みながら歌う。ボイスパーカッションは始めて聴いたのだけど、気持ちよかったし、観ていても面白かった。お客さんもかなり盛り上がってきていた。
池田を見るとまだ退屈そうだ。ジュンは楽しそうだった。演奏が終わるたびに拍手をしている。ジュンがはしゃぎながら言った。
「おい！　前に行こうぜ！」
「めんどくせーよ」
池田は口癖をぼやくけど、僕とジュンが席を立ったらしぶしぶ付いて来た。
ステージの前に行くと熱気が伝わってきた。どきどきする。汗や呼吸や表情の一つ一つがすぐそこにあるからかもしれない。
彼らのステージが終わると、後ろにはいつの間にかお客さんがたくさん集まっていた。フロアを埋めている人のなかには女性もいる。格好はTシャツやタンクトップ、ハーフパンツやデニムパンツだ。金髪、赤髪、メッシュ、タトゥ、そんな、ファッションか威嚇かわからない方々が多いなか、しかし怯むわけにはいかない。次は久保先輩たちのステージだ。
このライブハウスではモッシュやダイブは禁止されている。お客さんに飛び込んだり、押し合ったり、ぐるぐる回ったりしては駄目

だ。
久保先輩たちがステージに出てきた。簡単なセッティングを終えると、ベース兼ヴォーカルの先輩がマイクを歌いやすい位置にセットした。インド帰りの先輩は真っ黒に日焼けしていて、坊主頭になっていた。
「ナマステー」
とベース兼ヴォーカルの先輩が言った。
一瞬シンとなった。
滑ったのかもしれない、と僕はなぜかハラハラした。
ベース兼ヴォーカルの先輩は気にした様子もなく続けた。
「じゃあ怪我しないように気を付けて。盛り上がって行きましょう！」
それだけで、演奏は始まった。
スティックを三回鳴らし、学園祭でも演奏していた曲が響く。瞬間、全身に鳥肌が立った。同時に後ろの人の重圧が圧し掛かって来た。前に前に、皆体重を掛けて、拳を振り上げたり跳ねたりする。
メロコアは演奏を聴くというより、ライブに参加するようなものだと僕は思う。身軽な格好をして、バンドと同じくらい汗をかいて盛り上がる。
前列は特に強烈だった。肘が飛んできたり、体当たりされたりする。
でも、久保先輩たちの演奏はどんどん盛り上がる。僕らも負けないようにテンションを上げる。先輩たちの演奏を勉強するつもりが、お構いなしに楽しんでいた。
ジュンももみくちゃにされながらノッていたし、池田は無愛想で可愛くない顔を、ちょっとだけはしゃがせていた。
演奏している先輩たちはクールだけど、楽しそうだった。真剣だけど、笑顔だし、跳ねたり、回ったりする。ギターソロでわざとらしくかっこつけたり、首を振ったりしていた。

演奏は八曲で終わりだった。
最後に簡単なＭＣが入っただけで、ほとんど演奏だった。一瞬で終わってしまった。
それで帰る人もいたけど、最後まで観る人が多いみたいだった。
僕ら三人は離れ離れになっていた。地下では携帯も使えない。もう外に出てしまったのかと思ったら、二人は人の少ない隅っこでボウっとしていた。
池田は気持ち悪い、とつぶやいた。人に酔ったらしい。ジュンは目をキラキラさせていて、テンションが高かった。
「まじすげーよ！　すっげーな！　ワハハハ！」
と僕の顔を見ると、ジュンは言った。
池田はしゃがみ込んで丸くなった。
「少し休んでから帰ろうか。先輩たちに挨拶したかったけど、たぶん知り合いと話しているだろうし」
池田は小さく頷いた。ジュンは最後まで観ようと言った。
「あと少しだし、そうしようか」
僕もちょっと放心状態になっていて、うずくまる池田の横でボンヤリとライブを観ていた。ジュンももう前列には行こうとしなかった。
極端に盛り上がったのは先輩のライブだけで、最後のバンドも上手かったけど、お客さんが極端にガヤガヤすることはなかった。
池田が「あー」とか「うー」とか言うので、水を買ってきて飲ませた。ぐったりしていた池田は立ち上がり、トイレに行くと言ってふらふら歩いていった。
黙って演奏を聴いていると、誰かに後ろから頭をチョップされて、見ると久保先輩だ。Ｔシャツを着替えて、おでこに冷えピタを張っていた。インド土産でもらったのか、左手首にインド物のような銀の腕輪をしていた。
「よお」
と久保先輩は片手を挙げた。

「お疲れ様です！」
僕とジュンは頭を下げた。
「楽しんだ？」
と久保先輩は笑いながら言う。
「最高でした！　すごい盛り上がりましたね」
「今日は地元だから。隣の彼はドラムの人だよね？」
ジュンは頭を掻きながらお辞儀した。
「うす！　ライブ、すごかったっす！」
久保先輩はハハと笑って言う。
「よかったらまた来てよ」
「はい！」
僕らはその後、学校でのこととか、バンドの調子とか、好きなバンドのライブのことなんかを話して、そろそろ最後のバンドも終わろうとしていた。
「そうだ、これ」と久保先輩は思い出したように、デニムの尻ポケットからなにかを出した。それはフライヤーだった。次のライブの日付が書いてある、チラシのようなものだ。
先輩たちが勝手に作ったものらしく、来た人に渡している。ちなみに十曲入りの自主制作ＣＤも無料で渡している。普段はそれに挟んでいるわけだ。
毎回すぐになくなるので、そろそろお金を取るかどうか悩んでいると言っていた。けっこう費用も掛かるらしい。
僕はそれを受け取ってお礼を言った。
「よく見てみ」
と久保先輩に言われてフライヤーを見直す。
「これは……」
ジュンも覗いてきた。
「あぁ！」
とジュンはのけ反りながら驚いた。
「フライヤーだけでも五十枚は配ったから、少しくらい宣伝になる

だろ」
「まじ、頑張ります」
僕の言葉は棒読みに近かったかもしれない。
「おう」
フライヤーには僕らの演奏する学園祭ライブの日取りと、メロコアを演奏するという内容が書かれていた。フライヤーの一番隅っこではあるけど。
「今度は都内でライブすんだけど、また配るつもりだよ」
「うす。頑張って下さい……」
「学校行事は外からお客さんが来ると全然違うからな。までも、不安になるほど集まりはしないだろ」
と僕らの表情を見て、久保先輩は言った。
「いえ、僕らも先輩に負けないように盛り上げます」
そうだよ頑張れ、と久保先輩は僕の肩をぽんぽん叩き笑顔になった。
「ところで、お前らのバンド名ってなんだ？」
僕とジュンは顔を見合わせる。
とくに決まっていなかった。
「決めとけよ。バンド名もフライヤーに入れとくから」
「わかりました。色々とすみません」
「いいって。俺も楽しみにしてるんだよ」
先輩はそう言って、へっへっへと笑った。
「そういえば、もう一人いたろ？」
久保先輩に言われて思い出した。池田がまだ戻らない。
「具合悪くてトイレに行ってるんですけど……」
大丈夫かよ、と先輩は言うので、僕はいつものことですから、とこたえた。
「そうか。俺はもう行くから。二人とも気を付けて帰れよ」
「お疲れ様です！」
先輩はスタスタと去っていった。

もう最後のバンドも演奏を終えていた。他のお客さんも帰ろうとしている。僕らもトイレの傍でうずくまっている池田を引っ張って、ライブハウスをあとにした。

帰りの電車のなかでバンド名を考えることにしたのだけど、上手くいかない。

僕は、僕らのバンドはクズの集まりだから『ＫＵ，ｓ』『クッズ』がいいんじゃない、と言った。ジュンは渋い顔をした。池田はなんだそりゃと言った。残念ながら却下。

池田は考え中。

ジュンは「『ＪＵＮ，ｓ』がいいんじゃない？」と言った。

「は？」「あ？」と僕と池田は声をそろえた。

「ジュンズ」と僕は言い直してみる。

池田は「麻雀の話してんじゃねえんだよ」と言った。シュンツ？

僕は「これは、まさか」と思い当たった。

「もしかして、自分の名前から取ったのか？」

「そう」

「本気か……」

そりゃ僕の考えたバンド名も寒いかもしれないけど、これはない。ちなみに、ジュンの本名は鈴木純という。

池田が言った。

「いっそ『鈴木ジュン，ｓ』にするか」

おい。

「先輩のフライヤーに載せるんだし、もう少しまじめに考えた方がいいだろ。いくらなんでもそりゃ酷い」

「冗談だよ」

池田があっさりそう言い、ジュンはしょんぼりした。

先輩たちのバンド名は『Ｔｈｅ　Ｓｅｃｒｅｔ　Ｇｏｌｄｆｉｓｈ』という。秘密の金魚。サリンジャーの『ライ麦畑でつかまえて』という小説内からとった名称で、十五歳でバンドを組んだとき久保

先輩が名付けたものだ。ただ、先輩はこのバンド名を今は恥ずかしがっていて、変更したいらしいけど、なかなかする機会がなくて困っているらしい。
でも僕は好きだ。
僕はさり気なさを装って言った。
「フィービーってのは？」
「なにそれ？」
とジュンがポカンとして訊いた。
「ホールデンの妹の名前がフィービー」
「意味わかんねえよ」
と池田も言った。
僕はくどくどと説明した。先輩のバンド名がライ麦から取ったこと、その小説の主人公がホールデンという名前であり、ホールデンはフィービーという妹がとても好きであるといったこと。
「だからフィービーにしよう」
二人はいまいち納得しかねた。そりゃそうか。
「じゃあ『Ｔｈｅ　Ｐｈｏｅｂｅ，ｓ』は？」
と僕はやけくそで言った。
腕を組んでいた池田が、こちらを見た。
「それだな」
ジュンもこちらを見た。
「いいんじゃねえ？」
「どこがいいんだよ」
と僕が訊くと、ジュンは言う。
「ザ、が付くとこだよ！」
ジュンは得意げな顔をしていた。
「じゃあこれでいいか……」
僕らのバンド名は『ザ・フィービーズ』となった。
翌日、僕は久保先輩に連絡してバンド名を伝えた。ザ・フィービ

ーズです。
久保先輩は電話越しに一拍おいて「それでいいの？」と言った。
僕はなんて言おうか少し迷う。
「やっぱり、変ですかね？」
「変じゃないよ」
「じゃあ、それでお願いします」
「それにしても、どっからそのネーミングは出てきたんだ？」
「ライ麦のホールデンの妹の名前から取ったんですけど」
「お前小説好きだったっけ？」
「いえ、たまに読むくらいです……」
久保先輩がそれを読んでいたから、僕も興味を持った。そして好きになっただけです。
「サリンジャーが好きなのか？」
「はい」
「ふうん。なんか似合わないな」
「そうですかね」
「ああ」
「……」
「じゃあ切るぞ」
僕は慌てて言った。
「あ、すみません先輩！　今度音作りとか、曲順決めるの相談に乗ってくれませんか！」
「そりゃ自分で決めろよ。楽しみの一つだろ」
「お願いします！」
僕は甘えた。
「時給発生するよ」
と久保先輩は言う。
「まじすか……千円くらいなら」
「一万」
「一万ですか！　頑張ります！」

「アハハ、馬鹿だろお前。今回だけだからな。今度うちに来いよ」
「ありがとうございます！」
僕は携帯電話を持ちながら頭を下げた。
「んじゃ切るぞ」
「はい！　すみません」
ツーツー。切れた。

暑さも本格的になってきた七月の始め、僕はサキさんのいるダンス部にお邪魔した。今月の終わりから夏休みに入ってしまうので、その前に部室に遊びに行きたかった。夏休みになったらサキさんに会えなくなる。
ダンス部にはサキさんともう一人部員がいる。サキさんと同じ三年生で女子だ。
サキさんには放課後お邪魔してもいいですか、と伝えてオッケーをもらっていた。
僕はダンス部のドアを開けて「こんにちは」と挨拶した。
サキさんともう一人の先輩は音楽に合わせてリズムを取る練習をしていた。ドア三つ分くらいの鏡の前でイッチニ、サンシ、ニイニ、サンシとステップを刻む。
サキさんはリズムを刻んだまま言った。
「そこで見ていて！」
「わかりました！」
二人の先輩は学校指定のジャージを穿き、Tシャツ姿で練習している。サキさんは長い髪アップにして、手首にはエスニックなアクセサリーを付けていた。ノーメイクだけどすごく綺麗だ。汗で少しブラジャーが透けて見えていた。
エロかっこいいです！
僕はみとれた。
一段落付いたようで、二人はダンスを中断した。
僕は持参してきたスポーツドリンクを二人に渡した。

「サンキュー」とサキさんに言われ、もう一人の先輩は「気が利くねー」と言った。
このくらいいくらでも持って来ます。
汗を拭くサキさんが笑顔で言った。
「少しやって行きなよ！」
「リズム感あんまりないんで……」
「大丈夫大丈夫、音楽やってるんだし若いんだから！」
こうだよ、と言ってサキさんは基本のステップを教えてくれた。
僕はワイシャツを脱いで、Tシャツ姿になる。制服のズボンはくるくると裾をまくった。
「はい、イッチニ、サンシ！　イッチニ、サンシ！」
サキさんは手拍子を取る。鳴らしている音楽はR&Bだ。
「まじ、難しいです……！」
僕の芋虫のような踊りに二人の先輩は爆笑した。
「アハハハハ！　才能あるよ！　ファイトファイト！」
「はい！」
リズムに合わせて脚を動かす。ステップを刻む。
サキさんの踊るジャンルはロックダンスといい、音楽に合わせて身体を止めたり、腕を回したり、跳んだり、指をさしたりする。普段使わない筋肉を使っている気がした。
「サキさんすみません、今日はこれくらいにしておきます」
もう全身が汗まみれだ。
「お疲れー。いい感じだったよ」
サキさんに褒められたのは嬉しいけど、喜ぶ体力がなかった。
「サキさんまじ、すごいっす」
「なにがぁ？」
「いや、なんとなく」
なにそれ、とサキさんは笑う。
「いい運動になったでしょ」
「はい」

僕はその後も二人の練習を見ながら、一人リズムを取る練習をした。
それにしても、お二人ともめちゃくちゃかっこいい。バンド辞めてダンスしようかな。
サキさんは小柄だけど、ダンスはパワフルで迫力がある。
たった一年の差なのに、サキさんがすごく大人の女性に見える。なんだか、全然手が届かない人のように感じてしまう。少しへこむ。
三十分程練習をして二人は休憩をし、相方の先輩がトイレに立った。
僕とサキさんは少しの間だけ二人にる。
サキさんは汗を拭きながら、ラジカセを止める。一瞬シンとなった気がしたけど、ロック部の方向からはジュンのドラムが聴こえてきた。
僕はサキさんに声を掛けた。
「あの……」
サキさんは「ん？」と振り向く。
僕は息を吸って吐き、一気に言った。
「夏休みにデートしませんか？　お願いします！」
サキさんはポカンとした表情だった。
それからすぐに笑顔になり言った。
「いいよ。どこ行く？」
「え！　本当にいいんですか！？」
「もちろん」
「あの、まだ考えてませんでした。でもすぐに考えます！　できれば携帯の番号も交換させてくれると嬉しいです」
「あれ。そういえばまだ交換してなかったっけ」
ほい、とサキさんはバッグから取り出した携帯電話を僕に手渡してくれる。
「あの、連絡してもいいんですよね？」
「もちろんだよ！　いつでもしなぁ」

サキさんは笑う。なんだか信じられない。今日は最高の日だ。
それからすぐ相方の先輩が戻ってきた。僕は二人にお礼を言い、僕もそろそろ部室に戻らないといけないと伝えた。それに、さすがにダンスの練習の邪魔になってしまう。
部室を出ようとすると、「またねー」とサキさんが手を振り、「いつでも来なよ、アクエリ持参でー」と相方も笑いながら言った。
僕は「了解です。また来ます！」と言ってゆっくりドアを閉めた。少し歩くと、もうダンス部からは練習の曲が聴こえてきた。

そんな人生最高の出来事のあと、浮かれ気分でロック部に戻ると、池田とジュンは僕を睨んだ。
「そんな目で見るなよ」
そう僕はたまらず二人に言った。
二人は黙って練習を再開しようとした。
「なにか言ってくれよ！」
池田が背を向けたまま言った。
「俺も行きたかったよ。つれねえな……」
ジュンも言った。
「ああ、すげえ行きたかったな」
僕はそわそわして二人に言った。
「じゃあ今度は三人で行こうよ。な、」
池田がため息をついて言った。
「いいんだよ。俺たちはしょせんお呼ばれじゃねえんだし。お前一人で行ってよかったんだ。気にするな」
ジュンも言った。
「ああ、全然気にするな」
「……」
仕方がないので二人に缶ジュースを買って来た。そしたら機嫌はあっさり直った。
「さ、頑張ろうか」とジュースを飲み終わった池田が言った。

ジュンも「やる気が出て来たぜ！」と言った。
僕は、本当にこいつらが嫌いかもしれないと思った。

## 三章　夏休み（前書き）

読んで下さった方、本当にありがとうございます。

## 三章　夏休み

期末試験が終わり、ようやく夏休みに突入した七月の後半。学校がないのは喜ばしいことこの上ないのだけど、夏休みは部室をあまり使えない。顧問がいる日しか使えないからだ。だからといって老先生に毎日部室に来てもらうのはなんとなく気が引けるわけで、この真夏のなか倒れられたら大変だし、僕らはまとめてしげちゃんに抹殺されてしまう。

それでも週に三回、一時から五時まで使わせてもらえることになった。

それ以外の日には、しげちゃんの地下室で練習させてもらうこともあるし、スタジオを借りてもいい。池田と僕は、家でもどこでも練習できる。

それにしても、なんのつもりか、池田がバイトを始めた。

お兄さんの土木関係の仕事を手伝っているそうだ。鳶職のアルバイトである。池田は練習もしっかりしているし、技術もそんなに問題はないので止める理由はなかった。池田の欠点は体力なので、鳶の仕事なら都合よく鍛えることもできる。

そしてジュンなのだけど、ほぼ毎日、部室かしげちゃんの地下室で練習をしている。バイトをする予定はないし、家族旅行や海水浴や花火大会など、遊びの予定も入れない。ドラム、ドラム、ドラミングフォーだ。しげちゃんは妥協を許さないスパルタ方式でジュンにドラムを教えている。しげちゃんの顔を見るだけでジュンは吐くことがあるそうで、僕は練習の邪魔はしないようにマンツーマン指導の日は顔を出さないでいる。

それでも、しげちゃんがジュンに指導できる日は週に二日くらいなのだけど。

しげちゃんは、ジュンにジャンクフードや炭酸飲料すらあまり取らないようにさせているらしい。なんだか格闘漫画の修行のようだ

と僕は思う。でも限られた時間で成果を出すにはそのくらいしなくてはいけないのかもしれない。
僕もジュンに見習っている。
まあジュンは頑張ってくれ。死ぬ気で頑張ってくれたまえ。悪いけど僕はサキさんとのデートで頭がいっぱいなんだ。
そんな薄情なことを思いながら、ギターの練習を毎日していた。ブラッシングといった技術の歪んだ音を安定して鳴らすために、個人練習を繰り返していた。他の弦を鳴らさないように、スピードを落とさないように、手元を見ないように、上手くできている姿をイメージして練習を繰り返した。
十五曲を全て演奏しきる筋力と体力も身につけないといけなかった。
練習では十曲をまがりなりにも演奏していた。でも覚えただけで、ミスは多いし、リズムは狂ってしまう。それに通して演奏したあと、腕がパンパンになり声が枯れた。
やはりジュンが一番きつそうだった。
最近ではジュンが練習をストップさせることが多くなっていた。少し前は池田がストッパーだったけど。「ちょっと休ませてくれ」と言うことが練習時間の経過とともに増え、そのたびに中断する。練習の流れは、まず全ての曲を覚えてしまい、その後、苦手な箇所を分けて練習していくといったものだった。とにかく体にリズムを覚えさせる。
しげちゃんが練習を見に来てくれたときに、僕は話をした。
「だいたい高校生のバンドに完成度なんか期待してないわよ」
としげちゃんは腕を組んで言った。
「でも観に来てくれる人に楽しんでもらいたいし」
「がっかりさせないように、ってまずは思ったほうがいいかもね」
「それでもさあ……僕らだって上手くなってきてるでしょ」
「あんたたちは、全然下手よ」
しげちゃんは嘘をつかないから信頼できるのだけど、少しへこむ。

僕が黙っているとしげちゃんは言った。
「でも、あんたたちのバンドで良いところが一つだけあると思うの」
「一つだけなの」
「そう。でも重要だと思うのよね」
「なに？」
「なんていうのかなあ、必死さというか」
「……」
あまり嬉しくない。
「若さとか、素直さかしら？　うぅーん、クセがないというか、真っ白な感じなのよね。だから聴いていて嫌な感じがしないのよ。下手だけど」
「それ素人の集まりだからじゃない？」
「どうかしら？　それに予餞会のライブビデオを観たんだけど、盛り上がっていたじゃない」
「あれは先輩が盛り上げてくれたから」
「それでも、たしかにいい部分もあるのよ。そういったことって言葉じゃ説明しづらいのよね」
「じゃあ、僕らは結局どうすればいいの？」
「必死で練習するしかないじゃない。できればつかさ君もギター上手い人に教えてもらうのがいいんだけど、いないのそういう人？」
久保先輩しか思い当たらなかった。でも頼めない。
しげちゃんは僕のぶら下げていたギターを見て言った。
「そのギターを譲ってくれた人は？」
僕は自分のギターを見た。
バイト先の店長が貸したお金の代わりに譲ってくれたものだ。しかし、店長はあまり上手そうじゃない。ギターを弾いている姿は想像ができなかった。
「あれ？　なんでこのギターを譲ってもらったこと知ってるの？話したっけ」
「高校生がそんな高価なギター買えるわけないじゃない。それナビ

ゲーターでしょ、たしか」
「ナビゲーター？」
「やだ、あんた知らないでそれ使ってたわけ？　ギターが泣くわよ」
　このギターはＥＳＰ社のナビゲーターというブランドのギターだった。
「三十万くらいするものなの？」
「バンド組んでたときのギタリストも似たの使ってたけど、そのくらいじゃなかったかしら？　ギターは興味ないの、私」
「……全然知らなかったよ」
　どうして店長がこんなに高価なギターを譲ってくれたのかは置いておくとして、なんであんなに汚ごれていたんだ。それに専門店に売りに行けばもっと高く買い取ってくれそうなものだけど。
　しげちゃんは続けた。
「そうでしょ、ギターって細かくてイライラしそうじゃない。あたしには絶対無理よ！」

　しげちゃんに言われたこともあって、バイト終わりに店長のいる事務所に向かった。ノックして「失礼します」とドアを開けると、店長は一人でエアコンの効いた部屋で煙草を吸い、パソコンに向かっていた。液晶の光を浴びた店長は、心霊スポットに出るお化けのような風貌で、きっと過労死する人はこうやって増えていくのだろうと僕は痛感する。今日も残業かもしれない。
「やあ、お疲れさん」
　と最近一段と目の下の隈を濃くしている店長が振り返った。
「お疲れ様です」
「バンドは順調？」
「はい、お蔭様で。店長に譲ってもらったギターなんですけど、めちゃくちゃ使いやすいです。よかったんですか？　あんな高価なギター、僕なんかに譲っていただいて」
　店長はグーッと伸びをして、言った。

「なんか面倒臭くなって」
「え？」
「そんなこと気にしなくていいよ」
店長の言おうとしていることは、よくわからなかった。
「ありがたく使わせていただきます」
「うん」
「あと、あのですね……」
僕がギターを教えて下さいと言い出せなくてモゴモゴしていると、店長はアクビをした。ただでさえ忙しい店長にこんなお願いをするのは気が引けたけど、言うだけ言ってみるかと開き直る。
「ギター教えていただけませんか？」
店長はピクっとして僕の目を見た。でも無言だった。
やっぱり無理か、と僕は思い、小さく頭を下げた。そもそもギターを弾けるのかもわからないのに。
「いえ、すみませんでした。お忙しいのに変なこと言って」
僕が事務所を出ようとすると、店長は普段出さないハッキリした声で言った。
「ちょっとお待ちなさい。柏崎君」
「はい？」
「今度、ギターを持って来るといい。てか持って来なさい」
「教えてくれるんですか？」
僕がそう言うと、店長はニヤリと笑った。
僕はなにこの人と思った。

次のバイトの日、僕はギターとＭＤとバンドスコアを持って家を出た。その日は朝八時から四時までの勤務で、終わるとすぐに店長のいる事務所に向った。
事務所にはやはり店長が一人でいた。事務所は八畳くらいの空間にデスクやソファーが置いてある。あまり広くは感じない。店長と二人でいると少し緊張した。

「まあ、とりあえず座りなよ」
と店長はソファーを勧めてくれた。
僕はソファーに座ってギターをケースから取り出した。チューニングをしようとすると、店長はギターを持ち上げ、そのまま耳でチューニングを始めた。
「すごい。もしかして絶対音感があるんですか？」
「まさか。慣れればできるよ」
店長はデスクチェアに座って、ギターを構えている。白いワイシャツに黒いズボンを穿いて、擦り切れた皮靴を履いている。でもギターを構える姿はとても様になっていた。
その様になっている姿に、なにか物悲しさを感じてしまう。余計なことは考えないようにしよう。
「そのギターなんであんなに汚れてたんですか？」
高価なのに勿体ない。
「……子供がイタズラしてたみたいなんだ。なんだか気に入られたみたいで、そのまま台所に置いていたらああなっていてね」
「なるほど」
弦が異常なくらい錆びていたのも、ベトベトしていたのもそのせいだったのか。
「大変ですね」
「でも子供は可愛いから。あ、柏崎君も卒業したらうちに就職したら？」
さり気なく勧誘された。
「まだ先のことですから」
「一年なんてあっという間だよ」
あまり、卒業後のことは考えたくない。店長を見ていると尚更そう思った。
「店長はバンド組んでいたんですか？」
「まあね、もう五年くらい前の話だけど。子供が生まれてここに就職してからは音楽もしている暇がなくてね」

侘しい。
「もうギターやらないんですか？」
「私くらいの歳になると、ギターだバンドだと言えなくなるんだよ」
そんなものなのかな。でも、奥さんがいて、子供を育てている店長には、そんな余裕はないのかもしれない。これも一つの現実なのか。
「よし」と店長は言った。チューニングが終わったみたいだ。
僕はスコアを店長に渡した。
「ハイスタやるんだ。珍しいね」
「そうですかね」
店長はスコアを見ないでギターを弾いた。アンプに繋いでいない素音だけど、コード進行もピッキングも正確だった。
「おお」
僕は驚嘆の声を上げた。
「なまってるなぁ」
と店長は弾きながら苦笑いした。
そんなことない、めちゃくちゃ上手かった。
「店長、バンド組んでるときハイスタとかメロコア系の音楽やっていたんですか？」
「少し。あと洋楽も好きだったよ」
「すごいっす」
店長からギターを受け取り、構えて同じ曲を弾いた。
聴きながら、店長は僕のクセを直してくれた。ピッキング時の手の角度や、ブラッシングを右手で押さえる場合の位置など。
「ちょっと立って弾いてみて」
店長に言われ、僕はストラップを肩に回して立って弾く。座っているときと、立ったときとではギターを弾く感覚が変わる。普通、立ったほうが難しく感じる。
僕はしばらく演奏し、その間店長は黙って見ていた。
「なかなか上手いじゃない」と店長は言った。

「まじすか」
始めて褒められた。
「ただ歌いながら弾くんで、ミスも多いんですけど」
「あぁ、メロコアはテンポも速いしね」
「リズムがわからなくなることもあって」
「ちゃんとドラムの音に合わせてる？」
「え？」
「たぶん、ドラムが柏崎君のテンポに合わせてるんじゃないかな？」
「あまり考えていませんでした」
「歌いながら弾くのは難しいよ。ピッキングの強弱も変わっちゃうでしょ」
「たぶん」
僕は店長の言葉を待った。
店長はふうむと考えてから言う。
「柏崎君ってバンドのリーダー？」
僕は首を振った。ロック部の部長はジュンだ。
「なんとなくだけど、柏崎君がバンドのイニシアティブを取ってそうな気がするんだよね、しっかりしてるし。君が気付いてないだけで、他のメンバーは柏崎君をリーダーと思っているかもしれないよ。もしそうなら、なるべく心に余裕を持って、一歩離れて自分やメンバーを見るくらいじゃないと」
「はぁ」
そんなことないと思うけど。
「そうしないと、」と店長は無表情のまま続ける。
「バンドが崩壊するから」

そんなことを言ったあと、店長は嘘嘘冗談、と笑いながらスコアをパラパラめくった。驚いたことに、店長はスコアを見て、少しMDを聴いただけで、すぐにその曲の部分部分を弾いてしまった。
「なんで弾けるんですか……？」

「知ってる曲もあるから」
店長もバンドを組んでいたときはロックバンドやパンクバンドをコピーしていたらしく、有名なバンドの曲はある程度練習済みのようだった。でも始めて聴く曲も弾いている。
難しいと思っていた部分も店長の演奏を見たらコツが掴めそうな気がした。スコアだけでは微妙な部分がわからないことがあり、その辺は耳で完成させたりするのだと思う。しかし僕にそんなスキルはない。
店長は僕にわかるようにゆっくりと弾いたり、指摘してくれた。
ふと思ったのだけど、一時間近く事務所で練習していて、店長はその間ずっとここにいた。一回電話に出ただけだ。本当は暇なのか。仕事中にギターなんて弾いていていいのだろうか。
「あの、仕事はいいんですか？」
僕はギターで遊び始めていた店長に訊いた。
「ああ、いいよ仕事なんて」
「なんだか、すみません」
「なんで謝るの。店長がいいって言ってるんだから」
「はあ」
なんとなく、このスーパーには就職しないほうがよさそうだと僕は思った。
その日は四時にバイトが終わってから、五時半まで店長にギターを教えてもらっていた。六時くらいからスーパーも再び忙しくなりはじめ、店長は仕事に戻った。
僕はギターをしまうと、店長に言った。
「また教えていただけますか」
「いつでもいいよ」
と店長はいくらか童心に戻ったような顔付きで言った。
僕はお礼を言って事務所を出た。
それから、暑いのでアイスをレジに持っていったら、パートさんが「店長ってギターできるの？」と訊いてきた。

「かなり上手いですよ」
「人は見掛けによらないわね」
「……カッコいいですよ、ギター持ってる姿」
「本当ぉ？」
パートさんはとても疑っていた。

夏休みは七月二十日から九月一日までである。二年生のこの時期、大学受験をするつもりの人なら必死で勉強をするのだと思う。しかし、僕は全くもって勉強をしていない。大学進学する資金は僕の家庭にはないし、大学に行こうとも思わない。ジュンのように専門学校に行くのもいいかもしれないけど、そうまでしてやりたいことが僕には見つかっていなかった。

近い将来、僕も店長のように奥さんや子供をつくり、スーパーの社員となり、目の下に隈を作って働くのかもしれない。

将来に不安がないかと言われれば、もちろんないとは言えない。でも久保先輩やサキさんのように僕は音楽で食べていこうとはどうしても思えなかった。そんな自信も、才能もない。あるのは音楽に対する憧れだけだ。

店長はアマチュアで活動し、デビュー寸前まで行ったことがあるらしいけど、結局は諦めた。子供ができたからだ。プロになっても売れるとは限らないし、実際、店長の抜けたバンドは空中分解をして、解散してしまっている。

音楽で成功する人なんて、大海に放った魚を再び捕まえるくらいの幸運を手にするのと同じだ。

でも社会不適合者になってフリーターとしてプラプラ働くのは嫌だ。

休みが多いと無意味にマイナス思考に陥ってしまい、駄目だ駄目だと頭を振ることが多くなる。もう夏休みも十日が過ぎて、八月に入っていた。

練習は回を重ねるごとに上達しているのが実感でき、楽しかった。

池田は鳶のバイトで真っ黒に日焼けをして、筋肉も付いた。顔付きもかなり変わったと思う。正直認めるのは癪だけど、かっこいいのではないか。

池田は身長が百七十三センチある。普段、猫背なので全く気にならなかったのだけど、最近姿勢がいいので僕が見下ろされている形になる（僕は百六十センチ後半だ）。

練習中は伸びた髪を後ろで結わき、手首には黒いヘアゴムが巻いてあった。

白いタンクトップを着て、学校指定のジャージを穿いている。胸元にはアクセサリーをしていた。リズムを取って体を動かし、汗を流しながら演奏している。こんなに健康そうな池田は見たことがない。それに、英歌詞のヴォーカルはもう僕より上手くなっていた。

部室で練習していると、下級生の女の子がドアの隙間からチラチラ見てくることがあるのだけど、たぶん池田を見に来ている。

でも池田は女の子が苦手なのか、と言うか人が苦手なのか、話し掛けられても無愛想の上会話もなしで、連絡を取ったり、まして付き合うといったことはなさそうだった。

僕にはサキさんがいるから全然悔しくないけど。トイレに立ったとき、「池田先輩に渡して下さい」って女の子に手作りのお菓子を渡されても、捨てないでしっかり池田に渡したくらいだ。

そしてジュンなのだけど、すごく上手くなってきていた。でもいつもの馬鹿みたいなやる気が感じられない。夏バテか、練習の疲労が溜まっているのかもしれない。そう思った。

三人で練習する予定で、この日も一時に部室に向ったのだけど、珍しくジュンの姿がなかった。いつもなら一番乗りで部室にいるのに、今日は僕が一番に着き、老先生から部室の鍵を受け取りに行った。鍵を受け取りに行っている間、行き違いで池田も着いていたようで、部室の前で待っていた。

二人で部室に入り、ジュンが来るまで各々の練習をすることにし

た。しかし一時間経ってもジュンは来ない。携帯で連絡を入れようとしたけど、ジュンの携帯は電源が入っていなかった。
怪訝そうに携帯を見ていた僕に、池田が練習を止めて言った。
「バックレたな」
「まさか、そんなわけないだろ。事故とかじゃなけりゃいいけど」
そんな不安を他所に池田は言う。
「あいつが一番危ねえんだよ」
「やる気だけはあるだろ、ジュンは。それに上手くなってきてるのに、どうして逃げるんだ？」
「知るか。本人に訊け」
僕は少しその意味を考えた。でも、池田が言いたいことはわからなかった。
「とりあえず、しげちゃんに電話してみる」
僕はしげちゃんに電話を掛けた。
しげちゃんは二コール目で取った。眠そうな声だった。深夜の仕事だから、しげちゃんは昼間の時間に寝ていることが多い。
「しげちゃん？」
「んー、どうしたの？」
「ジュンが練習に来ないんだけど、連絡行ったりしてない？」
「ないわぁ」
しげちゃんの声はガラガラのおっさん声だった。
「なんか、声すごいけど大丈夫？」
「昨日遅くまで飲みだったのよ、そのあとカラオケ行ってこの声」
すごそうだなカラオケだと思った。
「それじゃ、ありがとね。また今度」
「ちょっと待ってえ。そういえばあの子、昨日練習に来なかったみたいよ」
「まじか」
「今日はあたしと練習するんだけど、来るかしら？　来ないなら寝てたいんだけど」

「わかんないけど、五時までにメール送るよ」
「はーい。それじゃおやすみ」
「おやすみ」
通話が切れた。池田は僕のほうを見ていた。
「あいつ、しげちゃん家にも行ってないみたい」
「どうするよ？」
池田は仏頂面で言った。
「探すしかないだろ」
「ったく、面倒くせー奴だな」
池田はしぶしぶとベースをスタンドに掛けた。
僕らは職員室に向い、老先生にジュンの失踪を伝えて、荷物を部室に置いたまま学校を離れることにした。
その際、老先生からジュンの自宅電話の番号を教えてもらった。家の場所は知っているのだけど、念のためだ。ひとまずジュンの家に電話を掛けた。
六コール目でジュンのおばあちゃんが電話を取ったのだけど、家にも戻っていないようだった。ジュンは遊びに行くと伝えて出て行ったそうだ。でも彼の交友関係は非常に狭く、遊びに行く友達などいないのはわかっている。
「どうする？」
僕は池田に言った。
「どうしようもねえだろ。帰ろうぜ」
「ここは探してやったほうがいいんじゃないのか？」
友達としては。
「どこ探すんだよ？」
「ジュンが行きそうな場所か……」
全然わからない。
校外に出て、真夏の太陽を頭上に受けながら池田を乗せて自転車を漕ぐ。

僕らがよく行く楽器屋、ゲームセンター、カラオケ、図書館、そんなところをぐるぐる回るけど見つからない。なんの手掛かりもなく見つかるはずはなかった。
携帯も電源が切れたままだ。
「しげちゃん家に行ってみようか？」
「無駄だろ」
実際にしげちゃんの家に行ってもジュンはいなかったし、見てないと言われた。
三時間街を彷徨って結局なんの手掛かりも見つからず、しげちゃんには「今日はたぶん来ないよ」とメールを入れた。しげちゃんからはすぐ「わかったわー」と返信が来た。
もう五時だ。部室に置いてある荷物だけでも取ってこないといけない。
仕方なく学校に引き返し、学校の裏門に続く小道を池田を乗せて走っていると、なにか見つけた。エイプの偽者のTシャツを着て、ハーフパンツを穿き、リュックサックを背負っている。
「でかい猿だな」
と池田が荷台からつぶやいた。
「百八十センチあるからな」
ジュンは裏門前の小道から、部室のほうを見ていた。黄昏ているようにも見えたし、そわそわしているようにも見えた。
まだ距離が離れているので僕たちに気が付いていないみたいだった。
「おーい」と僕は声を掛けた。
ジュンはこちらに気が付くと、バッと逆方向に走った。
「ちょ、なんでだよ！」
「追え！　全力で追え！」
池田がそう言って荷台から飛び降りたけど、着地に失敗してコケた。
「池田！」

池田はコケたまま「行け！」と手を振った。
立ち漕ぎをして追跡した。相手も全力だ。ジュンはそのまま自転車の通れない畑の方に走って行き、僕は自転車を乗り捨てて、追跡した。
「待てー！　この野郎！」
「うぎゃあああ！」
「逃げるなー！」
「きゃあああああ！」
「みんな心配してるんだぞ！」
「……うぅぅぅぅぅぅ！」
ジュンは金網をひょいと乗り越え、公園に侵入した。意外に素早い。
僕が金網を乗り越えたときには、もう姿を消していた。
「ジュン……」
一体なにしてんだ。

あとから池田がやってきた。膝を擦りむいたらしく、ジャージに血が滲んでいた。
「見失っちまった」
と僕が言うと池田は舌打ちした。それから言った。
「たぶんここにいるな。探そうぜ」
「もう逃げちゃったんじゃないか」
池田と僕は薄暗くなってきた公園を散策した。遊歩道が伸びており、歩いて行く。もう五時は過ぎていた。部室の荷物を取ってきたほうがいい。そうしないと老先生も帰れない。
「一回部室に戻って荷物取ってこよう」
そう言うと、池田は首を振った。
「今見つけてやったほうがいいんだよ」
「本当にここにいるのかよ」
「たぶんいる」

池田はぶっきらぼうにそう言った。
まだ空は明るい。でもあと少ししたら暗くなってくる。そしたら、もう見つかる気はしなかった。
池田は遊歩道の脇にあった公園に入った。小さな公園で、ブランコやジャングルジムがあり、滑り台の下に土管のような空洞が作られている遊具があった。
池田は迷わずその遊具に歩き、話し掛けた。
「おい」
「……」
池田は空洞を覗きこむ。
「出てこい」
池田がそう言うと、ジュンは丸い穴から顔を出した。
「やっと見つけた……」
僕は脱力して言った。
「どうして逃げたんだよ？」
「……」
「昨日はここで寝たのか。大丈夫なのか？」
「ああ」
ジュンは小さくそう言った。なかにはビニールシートが敷いてあり、蚊取り線香が置いてあった。本当に野生的だ。サバイバルじゃないか。
池田はジャージに手を突っ込んで、黙って僕らを見ていた。僕は言った。
「しっかりしろよ。お前部長なんだろ」
「……俺は部長なんかじゃねーよ」
とジュンは顔をそむけて言った。
「じゃあ誰が部長なんだ」
池田が僕に言った。
「お前だろ」
今度は僕が黙る番だった。

「猿にゃそんな起用なことできねーし、今までもお前が引っ張ってきたただろ」
なに言ってんだ。
「じゃあ、ジュンは部長って肩書きが重くて逃げたのかよ？」
「わかってねえな」
「なにが？」
池田はそっぽを向いた。
ジュンが小さく声を出した。
「俺にはドラムは無理だって、そう思ったんだ……」
「上手くなってるだろ」
「全然上手くなってねえよ。リズムはバラバラになっちまう、パワーもない、しげちゃんには蹴っ飛ばされるし、怒鳴られてばかりだ」
しげちゃん、蹴っ飛ばしてくるのか……。
「でも、ジュンが一番頑張ってるよ」
「頑張っても、できないもんはできないんだよ。もうしげちゃん家も行きたくねーよ」
ジュンはうなだれていた。僕は池田を見る。どうすりゃいいんだよ、とアイコンタクトを送るが、池田は首を振るだけだった。
ふと店長の言葉が思い出された。
もし君がバンドのイニシアティブを取っているんなら、なるべく心に余裕を持って、一歩離れて自分やメンバーを見るくらいでないと。
僕は最初、池田もジュンもあまりやる気がないのだと思って、自分からはバンド活動にあまり積極的にはならないようにしようと思っていた。もちろん学園祭を成功させたいとは思った。でも、それはジュンと池田が主体になるべきだとも思っていた。だから、僕はいつでも二人のせいにして諦めることができる環境を作っていた。そんななか、しげちゃんが現れて、久保先輩に曲数を増やすように言われ、頑張らなくてはならない状況になっていって、その流れに乗っかってきた。でも、三人でまとまり、目的に向かう以上、誰か

が舵を取らなくてはいけない。そうしないとバンドが崩壊してしまうのかもしれない。
それに、二人は変わった。僕も変わらないといけないのかもしれない。そうしないと、逃げているのは僕も同じだ。
僕はジュンに言った。幾分、強めに。
「お前がいないと練習できないんだよ。いいんだよ、クズでもクソでも、僕らのバンドなんだから」
僕はジュンのバッグを拾った。久保先輩の真似をしていた。
「きついなら無理しなくていいんだ。まずは楽しくやろう。それから上手くなろう。僕も自分のことで必死になりすぎてたし、お前に負担掛けてたんだ。わかってたけど、なんとなく甘えていたんだよ」
「……」
そんなことねえよ、とジュンは言った。
「ここで辞めたら、後悔するぞ」
そんなことわかっているんだろ。
「僕らはクズで、勉強もできないし、取り柄がなにもない。でもバンドやってるからぎりぎり今の自分を認められるんだよ。これ諦めたらもうその先になにも残らないだろ」
「わかってるよ」
「ドラムが嫌いになったわけじゃないだろ？」
「叩きたくてウズウズする」

ジュンは僕らといるとき、かなり無理をしていたのだと思う。音楽経験の浅いジュンは、なんとか追いつこうと必死だった。でもハードルは高い。そんなジュンを僕も池田も理解してやらなかったし、余裕はどんどんなくなっていった。
そんななかで、僕と池田はジュンに無言のプレッシャーを掛けていた。
もっと頑張れよ、お前ができなくちゃ前に進まないんだから、いつまで経っても上手くならないな。そう僕らは軽い気持ちでも、ジ

ュンには重い。
そうしてジュンは、楽しむ余裕がなくなる程、追い込まれていった。
原因は池田より僕のほうにあったのかもしれない。失敗の原因を僕は二人に押し付けていたのだから。予餞会の失敗以来、僕は上手くいかない原因を二人に求めて、知らず知らずに、そんな追い込むような雰囲気を出していたのかもしれなかった。
僕らは学校に戻り、老先生にこのことを報告をした。
「鈴木ぃ、お前公園で寝泊りしたのか」
と老先生はジュンを見た。
「はい」
「そりゃ大変だったな」と笑った。
荷物を取って僕らは学校を出た。もう七時半だ。老先生にはまた迷惑を掛けてしまった。
その日はしげちゃん家には行かなかった。少し悩んだけど、休むことにした。僕らは三人でガストに行った。池田はライスだけ頼んで塩を掛けて食べていた。煙草を吸っていたときの節約癖でガストすら高く感じるらしい。僕とジュンはパスタとポテトを頼んだ。そのあと、銭湯に行った。
翌日、僕と池田はバイトがあり、六時からしげちゃん家に集まった。
ジュンはすでに地下室で練習していた。ジュンはしげちゃんのお祖母ちゃんと仲良くなっており、午前中は畑仕事を手伝っていたらしい。体中真っ赤だった。
二日空けたためか、ジュンの体調は万全でドラムのキレがいい。叩くジュンも気持ちが良さそうだった。
ただ、体調が良好でもメンタル面をどうにかしないと、また同じことが起きてしまうかもしれない。それをしげちゃんに電話で相談したら、「それなら、こうしちゃえば」と秘策を伝授してくれた。
僕はサキさんに連絡をして、ジュンに会って欲しい旨を伝えた。

翌日、ジュンの大改造が行われた。
しげちゃんから伝えられた内容は、メイクをして生まれ変われば
いい、といったものだった。本当に効果があるか疑問だったけど、
とにかくやってみることにした。
ジュンのメイクアップに僕はもちろん付き添ったけど、池田は帰
ってしまった。
「こいつの女装なんて気持ち悪りぃだけだろ」と池田は本気で嫌悪
していた。
どんなメイクにするかはとくに決めておらず、サキさんに「可愛
くして下さい」と頼んだだけだ。
練習の終わった午後五時。ダンス部にジュン、サキさん、相方の
先輩、僕の四人で集まっていた。
休みなのにこんなことに付き合ってもらって、申し訳ない気持ち
もあった。でも、こんなこと頼める人は他にいない。サキさんも相
方の先輩もノリノリでオッケーしてくれていた。
「まじ、超ウケるね。やっぱつかさ君たち面白いよ」
僕はただただ頭を下げた。
「しかも学園祭もメイクして出るんでしょ？　アッハッハッハ」
僕は頭を掻いた。ジュンは椅子に座って緊張した面持ちだ。
「よろしくお願いします。最後にこのウィッグを被せてもらえます
か」
僕はビニール袋に入った金髪ロングのカツラを指した。しげちゃ
んがくれた物である。
「オッケーオッケーまかせておいて！」
相方の先輩は早速リキッドタイプのファンデーションをジュンの
顔に塗っていく。それにしてもこいつ顔がデカイ。サキさんの倍は
あるんじゃないか。
相方の先輩は美容師を目指しており、メイクの道具も豊富だし、
手際もすごくよかった。サキさんはほとんどお手伝いに回っている

ようだ。それにしてもお二人とも楽しそうだ。顔がデカイ分やりごたえがあるのかもしれない。
しかし、これで本当にジュンのメンタルは強化されるのだろうか。甚だ疑問だった。でもジュンも意外にノリ気だし、いいか。
そうして三十分後、見事にジュンのメイクは終了した。
グロスの入った赤い口紅や、ピンク色のチークを施し、カーラーやアイシャドウで仕上げた目元は強烈なインパクトを生む。ファンデーションで付けたグラデーションは輪郭を浮き立たせた。そしてウィッグだ。ロングの金髪はかのマリリンモンローすら爆笑するであろう。
僕は手鏡を渡した。ジュンは左右に首を振りながら仕上がりを確認する。
「ジュン、今の気持ちは？」
「生まれ変わったみたいだ……」
「よかったな」
「綺麗じゃないか」
気持ち悪い。
サキさんと相方の先輩も仕上がりに満足していたし、ジュンが思いのほか満足げだったことに気分を良くしてくれたみたいだった。写メをパチパチと撮っている。
その後、ジュンはメイクの方法を先輩に教えてもらい、メモしていた。今度は自分でやらないといけないしな。しかも、相方の先輩は今回使ったメイク道具をジュンに譲ってくれた。なんか、いらないらしい。
僕はジュンのメイク道具をもらったときのリアクションを見て、こいつ本物かもしれない、とちょっと思った。
二人にお礼を言い、僕らはしげちゃん家に向った。この日、しげちゃんはジュンの変身を見るために仕事前に練習に立ち寄ってくれた。

しげちゃんはジュンを見て、「あら、似合っているじゃない」と言った。
ジュンは「だろ」と笑った。
「あたしよりブサイクだけど」
どっちもどっちだ。
あと一応、ジュンはなぜかナルシストになっているだけで本物ではないようだ。
しげちゃんはすぐに仕事先に向ってしまった。僕らはトレーニングのあと、十時まで練習をし、しげちゃん家を出た。
翌日の部活。ジュンは自己流でメイクをしていた。
ガラガラとドアを開け、最後にやってきた池田はジュンを見ると呼吸を止めていた。まさに絶句だ。
僕は部室の前で止まっている池田に言った。
「ジュンは一皮剥けたんだ。もう昔のジュンではない」
「まじ、勘弁してくれよ」
池田は忍び足で部室に入り、ジュンを警戒していた。
「こっち来んなよ」
ジュンはガタっと席を立った。池田はベースを置いて逃げた。ジュンは池田を追いかけた。
「池ちゃーん。逃げないでー！」
「馬鹿野郎！　来んじゃねーって言っただろ！」
「なんでぇー？」
「なんで来るんだよ！　きゃあああ！」
二人の廊下を走る音が遠くなって行った。
外見が変わると内面も変わるとしげちゃんは言ったけど、まさかこんなに変わるなんて思わなかった。単純なほど変化は大きいのかもしれない。
本当にこれでいいのかはわからないけど、悪い方向には向っていないと信じたい。

久保先輩からメールがあり、見ると「六時にうち来い」と書いてあった。
僕はすぐに「わかりました」と返信する。そして、六時に久保先輩の自宅に向った。
六畳程の部屋にはベッド、テーブル、ソファー、十二型のブラウン管ＴＶ、ミニコンポがある。それ以外にギターが掛けてあったり、壁にポスターが貼ってあるなど、ごく普通の部屋だ。音楽を適当にかけているけど、流していたのはＲ＆ａｍｐ；Ｂだった。もともと久保先輩は家ではあまり音楽を聴かないらしいのだけど。
久保先輩がベッドに寝転がり、僕はソファーに腰掛けていた。
「そんで、なんだっけ？」
「あの、曲順と音作りを教えていただきたく」
「あー……、十五曲だよな。できそうなのか？」
「なんとかなりそうです」
「え、そうなの？」と久保先輩は意外そうな表情をした。
「たぶんですが」
「ふうん。とりあえず、お前はどうするつもりなんだ？」
「こんな感じで考えています」
僕は曲順を書いたメモ用紙を出して、久保先輩に渡した。
久保先輩はメモをさらっと見て言う。
「いいんじゃない、これで」
「じゃあ、決まりで」
「音作りは楽器店の店員さんに訊いたほうがいいと思うんだよな」
「でも高い商品買わされないですかね？」
「高校生相手にないだろ。予算伝えて試しに音聴かせてもらえばいいわけだし」
「あの、でも久保先輩と同じもの使いたいんですけど」
久保先輩沈黙。やっぱりそれ言っちゃまずかったか。
「すみません、自分で選んできます」
「いや。欲しいなら学園祭で使ったエフェクター貸してやるよ」

「本当ですか！？」
「俺も少し協力してやってもいいかなと思った」
なぜ？　逆に怖かった。でも余計なことを言って、やっぱり止めたとなる前に僕はお礼を言った。
「ありがとうございます！」
「あそうだ」
久保先輩はベッドの下に手を伸ばし、なにかを掴んで僕に投げた。
「これもやるよ」
キャッチして物を見ると、手作りのようなターコイズのチョーカーだった。たしか去年の学園祭で久保先輩はこれを付けていた。
「これって、久保先輩が作ったんですか？」
「まさか。作ったのはしもっち」
しもっちとは、先輩のバンドのベース兼ヴォーカルで、いきなりインドに一人旅に行ってしまうような変人だ。
「ありがたくいただきます」
「ああ、いらないなら捨ててていいから。どうせしもっちの作ったもんだし」
「いえ、大切にします。すごくかっこいいですよ」
「そう？」
もちろんです。
僕はすぐにチョーカーを首に結ぶ。外見が変わると内面も変化するというのは本当かもしれない、とふと思う。僕はギターが上手くなった気がした。
「この前のライブはどうでした？　都内でやったやつ」
「面白かったよ。上手いバンドが多かったし」
今回、僕らは久保先輩たちのライブを観に行かなかった。自信を失うかもしれないと思ったからだ。
「あと、フライヤーも捌(は)けたぞ。学園祭に興味あるって人もいたから絶対に盛り上げろよ」
「はい……」

夏休みも三分の二が過ぎた頃、僕らは予定していた十五曲をとりあえずは演奏できるようになっていた。サキさんに見てもらいから頑張るといった気持ちも強い。でも学園祭が近づくにつれて不安が拭えなくなった。その不安がマイナス思考を生んで、気持ちはスパイラル式に落ちて行く。

十五曲をステージで演奏すること不安だし、その三十分以上の間、僕はどんな気持ちで演奏していればいいのかわからない。冷めた空気のなかで演奏するのは地獄だ、想像するだけで眠れなくなる。

このままじゃ僕のほうが逃げてしまいそうだとも思う。久保先輩が外からお客さんを連れてきても、僕らはきっと盛り上げることなんかできない。

予餞会は三曲だけだったし、久保先輩たちが盛り上げてくれたからまだ乗り切れた。

卒業後の目標もなく、学園祭の演奏にすら恐怖に凍り付いている僕は、ジュンや池田より情けない。

サキさんとデートをする日が来た。入道雲の隙間から太陽が射す気持ちのいい日で、最高気温は三十七度。夏真っ盛りの関東平野である。

今の時期どこに行っても人だらけだ。遊園地、海水浴、レジャー施設は人ごみに違いない。

僕らは、地元の映画館に行った。お盆の時期で思ったよりも人は多くなかった。

サキさんは重ね着したキャミソールにタンクトップを合わせ、腿丈くらいのデニムを穿いていた。ゴールドのサンダルを履き、ペディキュアがしてある。エスニックなアクセサリーも付けていた。髪はストレートに下ろし、この日は薄くメイクをしていた。

そういえば、去年サキさんは髪を短くしていたけど、今年は伸ばしている。

僕はパッチワークのシャツを着て、デニムを穿いていた。胸元には久保先輩からもらったターコイズのチョーカーを付けている。あと、昨日美容室に行っているものの、普段とあまり変わっていない。
映画館で観た作品に僕もサキさんも号泣した。目を腫らしながら近くの喫茶店に入り、飲み物とケーキを頼んだ。映画の感動したシーンを話したり、出演していた俳優の話をした。
ふと、サキさんは僕の付けているチョーカーを見た。
「それ、久保君が付けてたやつだよね」
僕はチョーカーを指で触れてみる。
「そうです」
サキさんはちょっと大人な微笑みを浮かべた。
「つかさ君に似合ってるね」

僕らは喫茶店を出た。まだ五時過ぎだ。でもこれからどこに行くか、全然決めていなかった。デートなんてしたことのなかった僕は、女の子が喜びそうなところもわからない。そんなふうに考えていると、サキさんから言ってくれた。
「あそこ行ってみない、ライブハウス」
「オープンしていますかね」
「いいよ。とりあえず行ってみよ」
僕らは久保先輩がよくライブを行なうライブハウスに行くことになり、電車に乗った。
ライブハウスに着いたのだけど、まだオープンしていなかった。階段には入れないよう鎖と『ｃｌｏｓｅ』と書かれたボードが掛かっていた。
「まだ早いっすね」
「何時から開くのかな？」
どこかに書いてないかとキョロキョロしていると、スタッフが階段を上ってきて鎖を外した。
「どうぞ」

時計を見ると六時十分前だった。僕らはなかに入り、入場料を支払うと、飲み物をもらいテーブルについた。店内には、まだ僕とサキさんしかいなかった。室内は照明を暗く落ち着かせていた。
ステージに立ったのは、久保先輩のライブのときも出ていたシンガーソングライターだった。フォークギターを持って椅子に座り、弾き語りを始めた。
僕はサキさんに訊いた。
「サキさんも久保先輩のライブ観に行ってたんですか？」
「うん。でも後ろから観てるだけ。あの雰囲気には馴染めなかったから」
サキさんは脚を組んで、テーブルに肘を乗せてステージを観ていた。シンガーソングライターの浴びるライトが、サキさんに反射して淡く照らしていた。香水の香りが僕の鼻腔をくすぐった。
「久保先輩のライブ、もう観に行かないんですか？」
「どうだろうなぁ」
シンガーソングライターはＭＣに入った。この曲がどうして生まれたのかや、捨て猫を拾った話だった。そしてまた歌った。
「つかさ君はなんでバンドやってるの？」
僕は少し考えた。
「たぶん、楽しいからだと思います」
「じゃあプロ目指そうとか思う？」
「いえ、僕には無理だと思うし」
「どうして？」
「音楽で成功する人なんてほんの一握りだろうし、そんな自信はとてもないです。学園祭のライブだって成功するかわからないのに」
「つかさ君は自分に自信がないわけだ」
「……ありません」
僕は馬鹿だ。好きな人の前でなにを言ってるんだ。
「私ね、」
サキさんは静かに言った。

「卒業したら留学するつもりなんだ」
「留学？　どこですか？」
「アメリカかな。留学と言うより武者修行に近いけど」
なんだそれ。
「すごい……」
「私は絶対にプロになるつもり。一流のダンサーが夢なの」
「サキさんなら本当になれるかも」
「わからないけどね。それこそほんの一握りしかなれないし」
とても追い付けない。学園祭でどんな演奏しても、そんなんじゃサキさんには追い付けない。
サキさんは僕を突き放すためにデートを承諾してくれたのかもしれない。この話をするために。でもそれはサキさんの優しさだ。僕はどこまで甘えているんだ。
「つかさ君はまだ自分のやりたいこと見つかってないのかもしれないけど、そんなことで自信を失わないでほしいな」
「……きっと僕はスーパーの社員なんです」
「え？」
サキさんは首を傾げて僕を見ていた。

僕とサキさんはライブハウスを出た。僕はサキさんのアメリカ留学の話でかつてないほどショックを受け、もうデートどころではなくなり、腕を引っ張られる始末だった。
あと半年でサキさんに会えなくなると思うと、泣きたくもなるし胸が痛かった。
それから、気が付いたら僕はホテルの一室にいた。シャワーを浴びる音が聞こえてくる。サキさんがお風呂に入っている。
ライブハウスの近くにあるラブホテルに僕らは入っていた。
室内には大きなベッドがあり、大型のテレビがあり、テーブルには小さな四角いパッケージが三つ置いてあった。
サキさんがお風呂から出てきた。バスタオルを体に巻きつけてい

る。髪の毛も湿り気を帯びていた。バスタオル越しでわかる形のいい胸、人形のようなすらりとした脚、引き締まった完璧な身体だった。本当に高校生なのだろうか。
「つかさ君も入ってきな」
「あの、」
僕はどうしたらいいのかわからなかった。もちろん、どうするか知識はあるけど（ビデオの）、そうじゃなくて。
「浴槽にもお湯張ってるから気持ちいいよ」
「じゃあ、すみません。入ってきます」
僕は風呂に入るだけ入ることにした。汗もかいていた。
シャワーを浴びて、お湯に浸かる。サキさんの入ったばかりのお湯だ。飲もう。
シャワーから出ると、サキさんはベッドに腰掛けてテレビを観ていた。まだバスタオル一枚纏っているだけだった。
僕は緊張した。すごい勢いで心臓が鳴っている。
サキさんの隣に座る。サキさんは僕に頭を預けた。
「つかさ君は経験ある？」
始めてっす。
「……サキさん、あの、どうして僕らこんなとこにいるんですかね？」
僕はなにを言ってるんだ。
「えっと、つかさ君は自信を持つべきじゃないかと思って」
「でも、付き合ってるわけでもないのに」
「あ、それもそうだね」
「え」
サキさんはキッパリとそう言った。そして僕の肩から頭を持ち上げた。僕はめちゃくちゃやりきれない気持ちに襲われた。
僕とサキさんはベッドの上で背中を合わせて座った。もうテレビは消している。
「あの、サキさんは久保先輩が好だったんですか？」

チョーカーを見るサキさんの表情に、ずっと気になっていた。
「片思いだったけどね。一年の頃好きになったけど、なんかいつの間にか彼女作ってたし」
久保先輩には年上の彼女がいる。
「久保先輩は僕も大好きです。ほんと、かっこいいし」
「そうかな。よく見たらあんまりかっこよくないよ。ホクロの毛を抜こうとしないし、鼻血はよく出すし。かっこつけているだけ、久保君は」
知らなかった。
「今でも好きなんですか？」
「ううん。だったらこんなところに来ないよ」
本当はどうなんだろう。
僕の背中に、サキさんの熱が伝わってくる。
「あの、僕はサキさんが好きです。まじで好きです。ずっと一緒にいたいと思いますし、サキさんのためなら熊とも戦えます」
「つかさ君は、熊と戦うの？」
「いえ、例えですけど……」
「それなら学園祭ビシっと成功させてよ。熊と戦うよりも楽でしょ？」
「はい」
「絶対だよ」
「久保先輩よりかっこつけます」
「そう、その意気だよ」
サキさんはもう一度、僕の肩に頭を預けた。

夏休みも終わりに近づいてきた。
我々ザ・フィービーズは成長した。絶対に不可能と思えた十五曲を覚え、演奏しきる体力を身に付けた。その代償（だいしょう）にジュンはオカマと化したのだけど、それはなるべくしてなったのだろう。収まるところに収まったのである。見た目の変化というのは恐ろしいもので、

ジュンは口調も素振りもしげちゃんに似てきていた。もともと身長も顔も大きいジュンのことだ、周囲を圧倒させる迫力はたしかにあり、その結果はジュンにいい作用をもたらしていた。

僕らの調子は上がっていた。

夏休みの後半に僕とジュンは池田の家に遊びに行くことになった。初めてだったのだけど、電車で四十分揺られたあと少し歩き、一時間以上を費やしてようやく着いた。軽い旅行気分だ。なんだってこんな所から通ってんだ。

家は一戸建てで、お兄さんと両親の四人で暮らしている。自室が二階にあり、僕らは通された。脱いだ服や靴下がそこら辺にほうり捨ててあり、スコアのコピーが適当に重なっている。渡された座布団を敷いて僕は寝転がった。

池田のお母さんがコーラとスナックを持ってきてくれた。ジュンも僕もジャンクフードは禁止していたけど、折角だしこの日は解禁にしてムシャムシャ食べようじゃないか。

そしてゲームをした。しかし、こんなふうに無目的に遊ぶことも最近はなかった。バンドが楽しいから。でもこんな遊びもたまには必要だし、今回は珍しく池田から誘ってきた。

桃太郎電鉄を二十年目までやったところで時計は十時を回っていた。

池田のお母さんは部屋に布団を持ってきてくれた。そのあと、僕とジュンは順番に風呂をいただき、夕食におにぎりと味噌汁とから揚げを用意してくれたので、ガツガツ食べた。

池田が風呂に入っている間に、僕とジュンはコンビニに買出しに行くことにした。池田は面倒臭がるだろうし、コンビニも来る途中に見つけていた。

買い物を終えた帰り道で、池田のお兄さんが来たほうから歩いてきて、僕らを見ると手を挙げた。

池田のお兄さんは言った。

「少し話してもいい？　時間は取らせないから」
僕らは頷き、道路脇のガードレールに寄り掛かった。
風呂上りで、夏の夜風がとても気持ちよかった。
お兄さんは話した。
「知博の奴は学校で上手くやれているのかな？　君たちが仲良くしてくれているとは思うんだけど」
「もちろんですよ」
煙草が見つかって停学になったり、サボりすぎて留年しない限りは上手くやっていると思います。煙草は今は止めてるから問題ないけど。あと、池田の名前は知博という。
「今まで友達が家に来るなんてこともなかったから」
「なにかあったんですか？」
お兄さんは少し間を置き、なにか考えているようだった。
「あいつ、中学生の頃にイジメにあってたんだ」
「イジメですか……？」
そんな話は聞いたことがなかった。
「そんな心配なら全く必要ないです。池田は逞しく生きています」
お兄さんは安心したように、少し表情をほころばせていた。
「こんなこと俺の口から言わないほうがいいと思ったんだけど。あいつが中学の頃、不良ぶってる奴らが家に花火打ち込んできたり、壁に落書きしていったり、そんなこともあったんだ」
「それは、ちょっと酷すぎる気が……」
「今はそんなことされないし、知博も最近は学校に行くの楽しそうにしているんだけど、少し気になっていて」
池田も色々大変だったんだな。
池田が地元から離れた高校に通っているのも、中学時代の知り合いがなるべくいないところを選択した結果なのだそうだ。イジメが酷かったのは中学二年生の頃らしい。
池田は兄を誰よりも尊敬していた。物心が付いたころには兄の真似をしていた。服装であったり、言葉遣いであったり、聴く音楽も

そうだ。中学一年生の頃、池田はベースを始めたのだけど、それも兄の影響からだった。

帰宅部で、友達もいない池田は兄の真似をしてベースをかき鳴らし続けた。いつの間にかヴォーカルも口ずさむようになっており、几帳面な性格が発揮されたのか、英語の授業なんてできないのに発音だけはよくなっていった。

この話は僕もジュンも聞かなかったことにした。池田も僕らにこんな話を聞かれたくはなかっただろうし、部屋に戻って池田といたら気にしても仕方がないと思った。それに桃鉄をやり始めたら忘れてしまっていた。

## 三章　夏休み（後書き）

ひとまず五章で完結になります。最後までお付き合いいただけるよう、頑張ります。

# 四章　前夜祭

夏休みが終わり、二学期が始まった九月二日。今月の末に学園祭は行なわれる。この行事は生徒によってはそれほど大した企画ではないのだと思う。出し物を決めるなかでも、たこ焼き屋、漫画喫茶、映画上映、お化け屋敷、どこかのクラスでプロレス公演をするらしいけど、それにしたって楽しむことが目的だし、二年生の学園祭はまだあと一年残っているから、先生たちと思い出を作ろうといった気軽さもある。

しかし、僕らにとっては生き死にの問題だ。チェ・ゲバラは革命の合言葉に『祖国か死か』と詠ったが、僕らは『ライブか死か』と、どちらにしても死が待ち受けている。

クラスの出し物の準備は、文化部で舞台に上がる人間は免除される。出し物をするのはダンス部とロック部だけなのだけど。もちろんクラスを手伝ってワイワイやるのもいいけど、僕らのクラスの出し物はお化け屋敷であり、池田も僕も止めておいた。お化け屋敷なんてやったら、お化け役は殴られるに違いない。

始業式終了後のロングホームルームで決めたのが、この学園祭の出し物だ。僕はボケっとしていた。周りを見ても、張り切っている一部の貴重な生徒を除けば、皆、傍観者然としていた。

新学期そうそうクラスの席に一箇所空きがあった。池田の席だ。始業式とロングホームルームで帰れるこの日、他に休んでいる生徒はいなかった。

部活の時間には来るだろうけど、ちょっとサボり過ぎだ。留年するんじゃないのか。そのときは池田のクラスに行き笑ってやる。

放課後、部室に行くとジュンがすでに準備をしていた。僕もさっそく、練習の準備を始めた。

僕がストレッチや、ギターのチューニングをしている間、ジュンは簡単なメイクをしていた。バックから金髪のウィッグがはみ出て

いる。
「あら、池ちゃんは？」
アイシャドウを塗りながらジュンは言った。
「休みだよ」
そろそろ電話してみようと思い、僕は携帯で池田に電話を掛けた。
「お掛けになった電話番号は、電波の届かないところにあるか、電源が入っていないため、掛かりません――」
池田はこの日、部活にも来なかった。

池田が三日間学校を休んだことで、さすがに僕とジュンに危機感が芽生えた。池田のことだからほっとこう、と思えたのもさすがに三日までだった。連絡も来ないし、通じない。家の電話に掛けても誰も取らなかった。
事故か病気か、そんなの洒落にならない。
そんななか、担任に呼び出された。
職員室の横にある生徒相談室という小さな部屋で、僕は担任の先生と二人になっていた。
「池田、あいつなんで休んでるかわかるか？」
と担任は訊く前から諦めているように言った。
「わからないです」
と僕も諦めているようにこたえた。
「このペースだとあいつ留年するぞ」
「そうですか」
「うちは校則そんなに厳しくないほうだけど、油断していると卒業できないからな。それ伝えておけ」
本当に留年候補なのか、あいつは……。
「わかりました」
まだ二学期が始まったばかりなのに。

僕とジュンは池田の家に直接行くことにした。張り込んででも池

田を捕まえなくてはいけない。池田がバンド内では一番順調そうに見えたのに、今更学校も部活もサボり出すだんて一年の頃に逆戻りだ。

学校終わりに池田の家に向った。途中の電車内で電話があった。それは池田本人からだったのだけど、電車内で通話はできない。

適当な駅で降りて、池田に折り返した。

「池田か？」

池田は「おう」と乾いた声で言った。

「このままじゃお前、留年になるかもしれないって担任に言われたぞ。どうして休んでるんだよ？　さっさと学校に来いよ」

「俺、学園祭出るの止めるわ」

「はあ！？」

なに言い出してんだ。

「どうしてだ？」

「つうか学校も辞めるかもしれねえ。仕事先でそのまま鳶になれって誘われてんだよ。給料もいいし」

「馬鹿野郎！　馬鹿だ馬鹿だとは思っていたけど、なんでそこまで馬鹿なんだよ！　じゃあ今まで頑張ってきたのはなんのためだったんだ！？」

「俺の代わり見つけてくれ」

「見つかるわけないだろ……」

池田は通話を切った。僕は携帯を地面に叩き付けたい衝動に襲われた。

どうして、そんなに簡単に止めるなんて言えるんだよ！

「池ちゃん、どうしたって？」

ジュンが心配そうに訊いた。

僕は呼吸を落ち着かせた。携帯をポケットにしまって、ベンチに腰掛けた。

「ねえ、どうしたの？」

ジュンはもう一度そう言った。

「池田は学園祭に出ないって。学校も辞めるかもしれない」
「嘘でしょ？」
僕は首を振った。嘘でそんなこと言えるはずない。
知らない駅の、小さなホームのベンチで僕はうなだれていた。
納得できるわけがない。そんな理由でライブを放り出すなんて、おかしいだろ。池田は馬鹿で、どうしようもない奴だけど、音楽だけは真剣だった。
「直接池田と話をしに行こう」
「そうね」
僕とジュンは電車に乗り、再び池田の家に向かった。

家には誰もいなかった。インターホンを押しても反応がない。時計を見ると五時を少し回ってる。池田の両親は共働きなのかもしれない。
僕らは張りこみをしている警察のように、池田を待つことにした。
でも鳶の仕事って何時に終わるんだろ？　場所によっては夜中に帰ってくるんじゃ。
駅前の喫茶店で時間を潰したほうがいいかもしれない。
そう思っていたら、後ろから声を掛けられた。
「どうしたの。こんなところで？」
池田のお兄さんだった。スウェット姿の寝巻きのような格好で、レンタルビデオ店の袋を提げていた。
「あれ？　今日は仕事休みなんですか？」
「そうだけど。遊びに来たんなら家に入れば？」
お兄さんは池田が学校辞めるって言ってること知らないのか。
「池田のことで聞きたいんですけど」
「ああ、とりあえず家に入りなよ」
僕らは池田家にお邪魔することになった。
家には池田のお兄さん以外誰もいない。お兄さんはリビングのソファーを勧めてくれ、麦茶を出してくれた。お兄さんも向いのソフ

ァーに座った。
「池田が鳶の仕事を本格的にやりたいから、学園祭は出ないって言ってまして。学校も辞めるって。お兄さんはその話詳しく聞いてませんか」
「いや……、学園祭ってライブとかするの？」
「そうです。今月の末にあるんですけど」
「そうだったのか。俺も学校に行けって言ったんだけど。でもあいつ頑固で、今月まで仕事やらせてくれって言うんだよ。そうじゃなけりゃ他に仕事見つけるとか言い出すし」
「あいつは学園祭成功させるって言ってたんです。いきなり出るの止めるなんて理由があるんだと思うんですけど」
　お兄さんは額で手を組んで、うつむいていた。
「……前に知博はイジメにあっていたって話したけど」
「でも、イジメはもう終わったって」
「たしかに終わったんだけど……」
「やっぱり、トラブルとか抱えているんですか？」
　お兄さんはゆっくりと話を始めた。
「前の話しの続きなんだけど。学校で知博がなんでイジメにあっていたか俺にはわからないし、学校で　どんなことされていたか、あいつは全く話さなかったんだ。だからなるべく、自然に事態が落ち着いてくるのを待つようにしてた。でも中学二年の夏だったかな、丁度、家にイタズラが始まった頃だ。夜中に顔や体に擦り傷作って帰って来たことがあった。打撲もしてたし、乗っていた自転車も盗まれたって言っていた。俺は心配だったし、さすがにそのときは頭にきたんだ。なにがあったのか、このときは本気で聞き出した。
　知博はイジメの主犯格に家にイタズラするのは止めてくれって頼みに行ったらしいんだ、でも相手は条件を出してきた。夜中の国道で、走ってくる大型トラックに自転車で突っ込んでいくものだったらしい。あいつも馬鹿で、それをやったらしいんだ。
　下手したら死んでもおかしくなかった。なんでそんなことをあい

つがやらされなくちゃいけないのか、俺にはわからなかった。
　トラックはハンドルを思いっきり反対にきったんだろうな。知博もすんでのところでかわして地面を転がったのかもしれない。ガードレールや縁石にぶつかったのかもしれないよ。自転車は後輪がへしゃげた状態であとで見つかった。知博は急いでその場から逃げたらしい」
　僕とジュンは黙っていた。
「その話を聞いて俺はもう黙っていられなくなったんだ。弟が殺されかけたんだ。黙っているほうがおかしいだろ。そいつらを同じ目に合わせてやりたかった。本気で殺してやりたいと思った。その頃、俺は高校三年で、学校に連絡して相手の親と話すだとか、警察に被害届を出すとか考えつかなかったし、なにより頭にきていたから他のことが考えられなかった。それに、そんなクサったことする奴は性根を叩き直さないと同じこと繰り返す、そう思った。知博から主犯格三人の名前を訊いて、一人を学校の帰りに待ち伏せした。
　そいつを捕まえて、他の二人も集めさせた。それから、俺はそいつらを殴りつけた。空手をしていたから、ガキ三人相手にするなんて難しくもなかった。顔面の怪我や骨折なんかは避けるようにしたよ、最初は手加減するつもりだったんだ。もう知博にちょっかい出さなければそれでいいと思った。でも、そいつらの面を見ていたら怒りがどんどん溢れてきたんだよ。汚い面をしていた、本当に嫌な顔なんだ。
　俺は脅すだけのつもりで、携帯用のガソリン缶を持ってきていたんだ。それを倒れた相手の顔に掛けて火を点けた。顔は焼けて、転がっていた。やけど痕は相手の顔に一生残るらしい」
　お兄さんは落ち着いて話そうとしているけど、感情が抑えられないような感じだった。
「お兄さんは大丈夫だったんですか？　その、警察とか」
「今も執行猶予中だよ。地方裁判所で火傷を負わせた奴に五百万の支払いを命じられて、親と親戚に頭下げて金を借りた。それを返し

ながら働いてる」
「それから池田へのイジメはなくなったんですよね？」
「そうだよ。綺麗になくなった。その代わり、誰もあいつに関わろうとしなくなったはずだ。残りの一年、学校では前より浮いていたと思う。あいつ、その頃から煙草吸ったり、髪を染めたりしだして。教師もあまり知博を良く見ていなかったはずだ。無断でサボることが多くなっていたから」
池田はそうやって身を守っていたのかもしれない。
「それが尾を引いているんですか？」
「……俺には話してくれないんだ」

六時頃に池田が帰ってきたのだけど、玄関に脱ぎっぱなしの僕らの靴を見たからか、また出て行ってしまった。ジュンに負けない逃げ癖があるな、お前も。
僕とジュンは外に出て、池田を追いかけ捕まえた。
捕獲された池田は、なんだか日焼けしたアイアイみたいだった。
「話を聞かせろよ」
「話ならしただろうが。俺の代わりを見つけて、学園祭でもなんでもすりゃいいだろ」
「お前だって本気で言ってるんじゃないだろ？」
「やりたくねえんだよ。本当にそれだけだ」
池田は表情を曇らせた。
「お前のお兄さんから話訊いたんだ。中学の頃の奴らとトラブってるんじゃないのか？」
ジュンも後ろから言った。
「話してくれよ。寂しいだろ」
池田は黙っていた。
「煙草止めて、筋トレして、食事にも野菜食って、歌も練習して、お前だって頑張ってただろ。止めるならそれでもいいよ。せめて理由を教えてくれてもいいだろ？」

池田はポケットから茶封筒を出した。封筒には『七月分・給与』と書かれていた。
「あと、三十四万足りねえんだよ」
「なんのためだよ？」
「夏休み前に、中学の頃に俺にちょっかい出していた奴らと会った」
「じゃあ、やっぱりそいつらがなにかしてきたのか？」
「学園祭に来るってよ。俺がバンド組んでんの知って言ったんだ。意味わかるよな、学園祭ライブ邪魔しに来るんだよ。なんか知り合い連れて大勢で行くとか言ってやがった。五十万払えば邪魔はしねえみたいなこと言って、」
「いくら渡したんだ？」
「十六万。全然足りねえ。学園祭まで働いても五十万なんて貯まんねえよ。鳶で働くのも本気だ、もう学校も辞めたかった。兄貴が払ってる借金は俺が原因なんだ。学校辞めたら俺も一緒に返していける」
「バンドはどうなるんだよ？」
「だから言ってんだろ、お前らにも迷惑掛かっちまうんだよ！　怪我だってしたくないだろ？　老先生にも迷惑が掛かる！　しげちゃんだって、久保先輩だってそんなの嫌だろ！」
「僕らは学園祭を成功させるために頑張ってきたんだ、そんなクズどものせいで中止にしたくねえよ！　そんなの、クソどもの暴力に俺らは負けちまったってことになるんだぞ！　僕は絶対嫌だからな！」
池田はうつむいたまま言った。
「俺のせいで迷惑掛けたくねえんだよ。兄貴のときみたくなっちまったらどうすんだよ」
池田は目元をゴシゴシこすった。
「帰ってくれ」
池田は僕とジュンの間を通り、自宅に歩いて行った。

江南の学園祭は一般の人も入場できるようにしている。他の学校では他校の生徒や、父兄すら入場を制限しているところもあるので、その意味では貴重な行事かもしれない。
しかし、去年の学園祭で久保先輩がライブをし、モッシュやダイブをしたことが問題になっていた。怪我人が出なかったからよかったものの、今年は制限を掛けようという話も出ていた。だけど生徒が署名を集め、今年も一般公開に踏み切ったのだ。
そんななか、二代目ロック部の僕らが、「他校から不良が来るので、警備を強化して下さい」とでも学校に頼みに行ったら「じゃあロック部は学園祭ライブなし。ついでに廃部」となりかねない。
だからといって、本番にそいつらが邪魔しに来ても問題になってしまう。池田の言ったように顧問の老先生に迷惑が掛かる。演奏前に僕らが捕まって、暴力に遭うかもしれない。
でも、五十万を用意するなんて選択肢は最悪だ。
僕とジュンは黙って駅の方向に歩いていた。僕は一人で悩んでいた。
でも、ジュンはあまり悩んでなかった。
「しげちゃんに電話するわ」
ジュンはポケットから携帯を出した。
「しげちゃんに迷惑だろ。僕らの問題なのに」
「そんなこと言ってる場合じゃないでしょ。私たちにはどうしようもないし」
そうかもしれない。
「じゃあ、僕も久保先輩に電話してみる」
「そうして」
僕も携帯を取り出した。ジュンはもう電話をしていた。僕の手は震えた。久保先輩はなんて言うだろう、そう考えるだけで怖かった。
躊躇して、ジュンの会話を聞いていた。
「もしもし、姉さん？」
姉さん？

「池ちゃんが学園祭やらないって言ってるの、なんかさぁ、不良に絡まれているみたいで――」
しげちゃんは仕事中に電話を取ってくれたのだろうか。ジュンは説明を始めたのだけど、下手だった。
僕も久保先輩に電話しよう。気合で通話ボタンを押した。
三コール目で久保先輩は通話に出た。
「お疲れ様です……、すみません」
「いきなり謝るなよ。なんだ？」
「あの、もし僕らが学園祭ライブを中止するって言ったら先輩は怒りますか？」
「理由による」
「話してもよろしいでしょうか……？」
「さっさと話せ」
久保先輩のフレンドリーさが消えた。声のトーンが三段階は落ちた。
「ベースの池田がライブに出れないって言ってるんです。中学の頃に絡んできていた不良グループが学園祭ライブ邪魔しに来るって、脅してきたらしいんです。迷惑掛けるから、学園祭出るの止めるって」
電話の向こうの沈黙は、僕の精神をかつお節のように薄く削った。
「それで？」
「あの、それで池田は夏休みにバイトして、十六万稼いでそれを渡したらしいです。あの、でも五十万必要らしくて、まだ足りないって言ってて。あ、でも、そんな奴らにこれ以上金渡すなんてしたくないですし――」
「お前らそんなことで中止したら許さねえぞ。そんな下らないことで止めますじゃねえだろ」
「でも、久保先輩の連れてくるお客さんにも迷惑掛かるかもしれませんし、老先生だって――」
「いいからやれよ」

「僕とドラムはやります。でも、池田は本気で学校辞めるとまで言ってるんです。どうしていいかわからないんです！」
「じゃあ池田って奴に言っとけ。ライブに出ないなら、俺がテメエのチンポコちょん切るって。わかったか？」
「……はい」
「まだ時間はあるだろ。諦めるな」
僕は小さく返事をした。通話は切れた。
久保先輩。

僕と同時にジュンも通話を終えていた。
ジュンに話を訊くと、しげちゃんも久保先輩と同じようなことを言ったらしい。「そんなことで中止にするなんて、本当にチンチンついてんの、あんたたち？」そんな感じだったらしい。
二人の肝っ玉の大きい先輩に相談して良かった。でも、現実はなにも進展していない。それは、最終的には僕らがどうにかするしかないのだから。
この半年で、池田はバンドを辞めようと思えばいつでも辞めれた。しかし僕がクサっているときもジュンと二人で練習をしていたし、その後もブツブツ言いながらも付いて来た。そして、夏休みにバイトをし、池田なりに学園祭を無事に成功させようとした。
池田は変わりたいと思っていたんじゃないのか。自分を変えたいと思ってたんじゃないのか。
僕は池田の携帯に電話を掛けた。
池田は出ない。携帯をパチンと閉じ、僕はジュンに言った。
「もう一度、池田のところに行こう」
「そうね」

池田の家に着いてインターホンを押すと、お兄さんが玄関に出た。池田を出して下さい、携帯にも出ないんです、そう言ったけど、お兄さんは「あいつも疲れているみたいなんだ。今日はたぶん話しも

できないと思う。本当に申し訳ない」そう言って頭を下げ、ゆっくりドアを閉めた。表情は暗かった。お兄さんの立場もわかる。中学生の頃、自分がしたことで弟をさらに苦しめてしまった。そう思っているのだから。

僕は外から大声で言った。

「池田、聞こえるだろ！　聞こえるよな！？」

どこかの犬がワンワンと吠えた。

「久保先輩もしげちゃんもライブしないなら僕らの金玉をむしり取るって言ってたよ！　もうここまで来たらやるしかないんだ！　ライブをやってもやらなくても酷い目に遭うなら、やったほうがいいだろ！？　お前がいなくちゃできないんだ！　先輩たちよりも盛り上げてやるってお前言ったよな！　僕だって同じ気持ちだよ、盛り上げてやろう！　ザ・フィービーズはこんな下らないことで諦めちゃいけないんだ！　そうだろ池田！？」

カラスが鳴いて、バサバサと飛び立った。

ジュンも「待ってるわん！」と叫んだ。

傍から見たら近所迷惑だとか、青春してるなって思えるかもしれないけど、僕らは必死だ。それに池田はすごく辛いに違いない。

池田は出て来なかった。

その後、僕とジュンは一旦その場を去ることにして、しげちゃんの地下室に行くことにした。練習は続けるんだ。

それに本来なら一日たりとも無駄にしたくないし、どれだけ時間があっても足りない。もう残り三週間しかない。

池田は翌日も無断欠席をした。

僕とジュンは何回も電話をし、メールを入れた。返信はなかった。だが池田が学校を休み始めて十日が経ち、学園祭まで二週間を切ったこの日、ようやく池田は学校に来た。放課後だった。ベースを持ってお兄さんと一緒に部室に現れた。

池田は長かった髪を切り、茶髪から黒に染めていた。

僕とジュンは演奏をストップした。池田は無言で部室に入るとソフトケースを肩から下ろした。お兄さんは僕らに小さく頭を下げて、姿を消した。
池田の頬には痣ができており、それは、最近できたものに違い。
「その痣どうしたんだよ？」
「どうもしてねえよ。平気だ」
池田はつまらなそうにそう言った。
「ライブ、出るよな？」
「じゃなかったら来ねえだろ」
ジュンがドラムを思い切り叩き出した。めちゃくちゃな叩き方で、首を振り低い声で叫んでいた。
「アァァァアァァァァァァン！　イアァァァァァァァァァン！」
池田はベースをセットしながらつぶやいた。
「ったく、本当に猿じゃねえかよ」
僕は笑ってしまった。
本当だ。でも、お前も僕も、もうジュンのこと笑えないんだよ。
池田の準備が整った。ジュンはドラムを叩きながら言った。
「準備はいいかしら！？」
池田は首をコリコリ鳴らしてから僕を見た。僕はジュンに向って頷いた。
ジュンはスティックを三回鳴らす。
僕らは十日ぶりに、三人で演奏をした。
練習していると、老先生が部室に入ってきた。演奏を止めようとすると、老先生は手振りでそのまま続けなさい、と促した。
僕らは十五曲を最後まで通して演奏し、老先生はパイプイスに座って脚を組み最後まで観ていた。
演奏が終わると老先生は言った。
「池田、留年するんじゃないぞ」
「わかってるよ……」
池田はバツが悪そうにそう言った。

「今年も、学園祭は問題なさそうだな」
「僕ら上手くなった？」
「ああ。たいしたもんだ」
老先生はケラケラ笑っていた。老先生にはメロコアなんてうるさいだけに決まっている。それでも、僕らの顧問としてここにいてくれる。
珍しく池田が話した。
「先生には感謝してんだ」
ジュンも言った。
「長生きしてね」
老先生は笑っていた。
「たしかに夏場は年寄りにはきつかったな。長生きしてほしけりゃあんまり無理させるんじゃないよ」
「でも職員室にいただろ？　クーラー効いてなかったか」と池田は言った。
もう少し言葉を選べと僕は思った。
「そうだったか？　それじゃあ、学園祭頑張るんだぞ。またビデオに撮ってやるからな」
「うーっす！」
僕らは声を揃えて返事をし、老先生は職員室に戻っていった。

池田の頬の痣が気になった。不良グループとなにかあったのかもしれない、そう思ったからだ。老先生が部室からいなくなってから、僕は池田に訊いた。
演奏して気持ちもほぐれたのか、池田はぽつぽつと話を聞かせてくれた。
痣はお兄さんに付けられたものらしい。
池田は鳶のアルバイトを昨日辞めてきたのだそうだ。辞めたと言うより、辞めさせられたと言ったほうが正しいと思うけど。
池田は学園祭ギリギリまで金を貯めて不良グループに渡すつもり

でいた。しかし、五十万なんて溜まるはずがない。だからバイト代の前借を頼みに行った。それが兄の耳に入り、ぶん殴られ、そのままアルバイトも辞めさせられたそうだ。なんとも池田らしい話だと思った。

でも池田のお兄さんは、そうじゃなくても池田を辞めさせるつもりだったんじゃないだろうか。僕らと話したあの日、池田本人から事情も聞いていたのだと思う。

池田は学園祭ライブに出たいと思い、そのために金を貯めていた。

でも、考えてみれば金を渡して相手がなにもしてこない保障はない。それどころか、次はもっと要求を大きくしてくる。

池田は他に仕事を見つけようとした。

でも、お兄さんがさせなかった。そして池田を学校に連れてきた。

「とにかく練習に集中しよう。あと二週間しか残ってないんだ。相手がなにかしてきたら、僕らもやり返せばいいよ。こっちから手を出すことはないだろ」

「わかったわ！」とジュンが言った。

池田は不満そうに言う。

「相手は数十人いるんだぞ、もし学園祭に来たらどうすんだよ？」

「知らん」

そんなもん知るわけない。でも、学園祭やるんだよ！

「俺も知らねえぞ」

「僕たちはこれでもロックをしてるんだ。やるときはやるんだ」

「お前、開き直ると無茶なこと言うな」

「不良グループと久保先輩、どっちが怖いか考えれば一発で判断できる」

「……ライブ中止にしたら金玉むしり取られるからな」

「僕らは先輩たちに憧れてロック部にいるよな？」

「まあ、きっかけはそうだな」

ジュンも言った。

「去年の学園祭ライブを観てロック部に入ろうと思ったよ」
「その時点で、もう、僕らは後に引けなかったんだ。怪我しても、蹴っ飛ばされても、死に掛けても、ロック部継いだ時点で学園祭ライブはやるしかないんだよ」
池田が腕を組んで言った。
「あいつらが来るなら全員ぶっとばしてやりゃいいか」
ジュンも右手に力を込めて言った。
「私も、やっちゃうわよ」

その日、地下室で練習していると、しげちゃんが来てくれた。
「あんたたちにパンチの仕方を教えるわ。絡まれたら躊躇なくぶっ放しなさい」
僕らはジャブ、右ストレート、左フックのコンビネーションを教えてもらった。
「腰を使って打つ！」
「はい！」
「フックは右足を軸にしてムチのように打つ！」
「はい！」
三十分ほど僕らはパンチを練習した。
「あ、そうそう。あたしの職場の友達も来るから、ライブしっかり盛り上げてね」
「オカマバーの？」
「文句あんの？」
「ないです！」
「話変わるけどさあ、あんたたちって彼女とか好きな人いないわけ？」
池田とジュンは首を振った。
僕は財布からサキさんの写真を取り出して、しげちゃんに渡した。
「先輩なんだけど」
「あら、彼女いたんだ？」

「好きなだけで付き合ってないよ」
「ふうん」
しげちゃんは写真を目を細めて見ていた。
「ブスねぇ」
「ええ！？」
しげちゃんはんふふっと笑った。
「つかさ君はこの娘のために頑張っちゃうわけね」
「でも、高校卒業したらアメリカ行くんだって。手届かないよ」
池田とジュンも驚いていた。
「アメリカなんてすぐそこよ。諦めないで」
「僕も卒業したらアメリカ行こうかな」
「いいじゃない、それも。音楽は続けるつもりなのね」
「……わからないよ」
「しっかり考えなさい」

休憩をしていると、池田がトレーニングをしていたしげちゃんに近づいた。池田が自分からしげちゃんに話し掛けるなんて珍い。僕は遠巻きにその光景を見ていた。
「ちょっと話してもいいか？」と池田は言った。
しげちゃんはトレーニングを中断して、池田を連れて地下室を出た。
僕らには聞かれたくない話なのかもしれないけど、気になる。僕は二人のあとをこっそり後を付けた。ジュンも付いて来た。
二人は庭に出て、ライトの当たっているバスケットゴールの前で止まった。
僕とジュンはその裏に生えている植木に隠れた。
しげちゃんは言った。
「どうしたの？」
「なんて言うか、迷惑掛けて悪いなって」
「迷惑なんて掛けられてないわよ。あんたたちを手伝ってるのは、

やりたくてやってるんだから。それに、あたしもライブを観てみたいし」
「あいつらが学園祭に来ちまったら、そんときはまた迷惑掛けちまう」
「だから？」
「……」
「そんなの迷惑のうちに入らないわよ。いい、あんたはなにも悪いことしてないんだから、気にしなくていいの。堂々とライブをしなさい」
「……めちゃくちゃにされるのが、怖いんだよ」
「大丈夫よ」
「中学の頃みたいになっちまったらどうすんだ……」
「いくらでも手段はあるのよ。そうなったら、知り合いの弁護士に、頼んであげることもできる。あんたは一人じゃないのよ」
池田の声は震えていた。
「そこまで頼れるわけねえよ。俺の問題にこれ以上周りを巻き込みたくねえ」
「あんたはなんでも一人で抱え込もうとしすぎているの。もっと相談しなさい、そんなこと迷惑でもないし、相談してくれないと逆に寂しいものよ」
ライトに照らされた池田の影が小さく揺れた。
「……俺は金を渡したんだ。七月と八月分で二十万渡した。ライブが終わったら残りを払うとも言ったんだ。あいつら、なんで俺のこと邪魔すんだよ！」
しげちゃんは池田の肩に手を乗せる。
「そんな奴らに負けちゃ駄目よ」
池田は静かに泣いていた。
しげちゃんは池田の頭を寄せた。
学園祭の前日には前夜祭がある。全校生徒は体育館に集まり、順

番に舞台に立って出し物の発表や、宣伝をする。
でも、ダンス部とロック部は一曲だけ披露することになっていた。ダンス部のお二人は三年生のなかでも人気がある。僕らはおまけのようなものだ。
そのため、僕らは前夜祭の前の日、機材を体育館に運んだ。運ぶのが大変なのはドラムセットで、あとはマイクスタンドやギタースタンドなど細々した物を往復して運ぶ。
ＰＡの業者がすでに入っており、アンプの設置を始めていた。
全ての準備が整ったあと、少しだけ演奏することを許されていた。あまり長い時間使ってはいけないのだけど、三十分程、エフェクターの調節や音量を合わせたりと、準備をした。
前夜祭で演奏する曲はモンゴル８００の『小さな恋のうた』になった。いい曲だし、たぶんほとんどの人が聴いたことがある。音楽番組でランクインされているバンドだからだ。
その日もさっさとしげちゃんの地下室に向かおうとしたのだけど、校門を出て少し歩くと、けたたましいバイクの音が聴こえてきた。改造した原付三台が僕らに追い付いてきた。一台は二人乗りしており、四人いるのだけど、三人はダボダボのジャージを着ている。原付の荷台に乗っている奴だけ、スラックスに皮のローファーを履き、派手なシャツを着ていた。オールバックにして剃り込みを入れている。右手には木刀を持っていた。
僕らを囲むように原付は止まった。
こいつらが池田から金をせびっていた奴らだ。一人だけ顔に火傷痕のある奴がいる。左頬の皮膚が突っ張って、紫色に近い。そいつが池田に話し掛けた。
「ライブは明後日だっけ？　池田」
池田は表情を濁らせた。
「……金は渡しただろ」
火傷痕のある奴がポケットからぐしゃぐしゃになった封筒を出して、池田に投げた。それは池田の稼いだ金の入っていた封筒だ。

「約束と違うんじゃねえ？　残り三十万はどうすんだよ？」
「ふざけんなよ、そんな金あるはずねえだろ。頼むから、もう俺に付きまとわないでくれ」
「ふざけてんのはテメエだろ」
剃り込みが僕の前まで歩いて、木刀を腹に薙いできた。反射的にギターケースを盾にすると、剃り込みは僕を睨んだ。
喧嘩を覚悟したとき、火傷が言った。
「やめとけ」
剃り込みは唾を吐いて、後ろに下がった。
「金は今度利子付きで払ってもらうか」
池田は黙っていた。僕はどうするべきか迷っていた。しかしジュンが早かった。
ジュンは走りこんで原付に乗っていた火傷に右ストレート、左フックのコンビネーションを放った。
ただ、当りどころを見てもダメージはあまりなさそうだ。火傷の頬にストレートが当たり吹っ飛んだため、左フックは空を切っていた。
火傷は「ぶふ」っと声漏らして後ろに転んだ。
仲間のジャージ二人は驚いているだけだ。でも剃り込みは殺る気満々な顔を引きつらせて僕に走り込んできた。しかし、また火傷がストップを掛けた。火傷がこのグループのリーダーなのか、剃り込みはまた止まった。
止めたのは学校のほうから教師が来ていたからだ。
火傷は頬を押さえながら「いくぞ」と言った。
剃り込みは僕を睨んでいた。僕は黙って目を逸らした。
四人は原付を走らせて行ってしまった。

追いついて来た教師二人が僕らを不審そうに見て、体育教師が腕を組んで言った。
「お前ら、なにしていた？　あいつらは知り合いなのか？」

ジュンが相手を殴ったところも見られたかもしれない。でも知り合いだと言えば、問題が大きくなる。下手なことを言えば、ここで学園祭ライブを中止にさせられてしまう。
僕らは黙っていた。
「ロック部だな？」
「はい」
「三人とも学校に戻れ」
僕らは、すごすごと体育教師に付いていった。
学園祭の準備で空いている部屋が少ないためか、化学室に連れて来られ、僕らは質問を受けた。あいつらは友人なのか、どこの学校の生徒なのか、揉め事が起きたのではないのか、僕らが「知りません」「わかりません」「たまたま絡まれただけです」と言うと、体育教師は胡散臭そうに僕を見た。
「ロック部、今年も学園祭に柄の悪い連中を呼ぶつもりじゃないだろうな？」
「……」
「我々教師は、他の生徒が危険な目に合わないようにしなけりゃいかん。去年のような客をあまり連れられると他の父兄なんかがあまり楽しめなくなる」
たしかに一部の父兄は嫌な顔をするかもしれない。でも、先生が言うほど酷くはなかった。
「でも去年、問題は起きませんでした。それに学園祭も活気付いたと思うんですけど」
「お前らは学生なんだ。学園祭が盛り上がるのは大いに結構。しかしな、なにか起きたとき責任を取るのはお前らじゃない。こんな片田舎の学園祭だから一般公開もしているけどな、問題が起きそうならライブを中止してもいいんだぞ」
僕らは黙る。
「久留米先生に感謝しろよ。お前ら」
「え？」

「学園祭ライブは本来なら中止のはずだったんだ」
困惑する僕に、先生は「当たり前だろ」と付け足した。
「久留米先生がなにかしてくれたんですか？」
「問題が起きたら久留米先生が責任を取るのはもちろん、それを差し引いても、久留米先生の信用がなければライブはできなかった。校長先生も中止にする考えだったはずだ」
「……」
「もう一度訊くぞ。さっきの奴らはなんだったんだ？」
「知りません」
体育教師はため息を付いた。そして言った。
「もう行っていいぞ」
僕らは楽器とバックを持ち、化学室を出た。

帰道で、僕らは自転車を押しながらゆっくり歩いていた。
「まだライブ中止にするなんて考えてないよな？」
池田は言った。
「考えてねえよ」
本当だろうか。まだ、池田は迷っているように見えた。
僕は話題をジュンに振った。
「それにしても、ジュンはよく殴ったな」
「しげちゃんが躊躇せずぶっ放せって言ってたでしょ」
言ってたね。
「でも普通、逃げること考えるだろ」
「つかさも言ってたじゃない、やるときはやるって」
「いや、たしかに言ったけども」
ジュンはストレートに解釈しすぎだ。意外と危ないな。
「もしものときは喧嘩も考えるけど、まずは逃げることを考えよう。あのとき、あいつら喧嘩するつもりはなさそうだったし。怪我してライブ中止ってこともなくはないだろ」
「それもそうね」

わかってくれてよかった。でも、原付で囲まれて、相手に主導権を握られている状況でもあったわけだし、ジュンの不意を付いたストレートパンチはかなり効果があった気がしないでもない。なによりスカっとした。体育教師もどうやら気が付いてなかったようだ。

池田が言った。

「どうせ殴るならもっと腰入れて打っとけよ。俺も殴っておきゃよかったぜ」

池田が意外にも喧嘩腰だったので、勢いに乗っかることにした。

「今日も少しパンチ練習しておくか。僕が久保先輩から教えてもらった、殺人パンチも教えるよ」

「やるか」

「やりましょ」

僕らはしげちゃんの地下室に着くと、パンチの練習し、それからバンドの練習を繰り返した。

翌日、ホームルームが終わると、全校生徒は体育館に集まる。僕らは舞台裏で待機していた。

司会が入り、まずはサキさんたちダンス部が演技を披露する。

ダンス部のお二人は薄いメイクと、ダンス用の衣装に着替えていた。男性のような上下スーツ姿に、ハットを被っていた。

スポットライトが当たる。イントロが流れると、シンと静まり返った。そしてダンスは始まった。

三年生のほうから「かわいー」とか「ひゅー」とか聞こえてくる。サキさんはダンスのリズムを崩さず、少しだけ微笑む。

相方の先輩と交互に踊るのだけど、二人ともとても上手かった。

サキさんが舞台の端からムーンウォークを決めると、体育館が一気に盛り上がった。

「すげえ」

僕は舞台裏から見て、つぶやいていた。僕らもあれだけ盛り上げてみたい。

舞台裏には発表を待っている生徒がいるけど、皆、ダンスに釘付けになっている。
ダンスが終了し、サキさんと相方の先輩は舞台裏に戻ってきた。
「お疲れ様です。最高にかっこよかったです！」
「さんきゅ、ロック部もがんばって！」
笑顔のサキさんは、そう言って僕の背中をポンと叩いた。
「はい！」
「じゃあ、さっそくやっちゃおうか！」
「お願いします！」
サキさんと相方の先輩は、ジュンを隅のほうに連れて行った。前夜祭と本番は、お二人に完璧なメイクをしてもらう。ジュンたっての希望だった。
前夜祭では一年生から順番に、各クラスの出し物の発表や宣伝をしていく。
ロック部は全てのクラスが発表を終えたら演奏となる。
この日は一曲だけで、学外の人も来ていないのであまり緊張はなかった。池田もリラックスしている。ジュンもあまり気負っていないようだった。
そして、最後の発表が終わり、僕らの順番が回って来た。
一度暗幕が下がり、舞台の上でアンプやエフェクターのセッティングをする。ギターを久保先輩から借りしているエフェクターにシールドで繋ぎ、さらにエフェクターからアンプに繋ぐ。
準備が整うと、合図をして暗幕が上げてもらう。司会が「最後に、ロック部の演奏です」と言った。
もう一時間以上体育座りを強要されている生徒たちは、さっさと終わってくれ、といった表情だった。
ステージにスポットライトが当たった。
誰かが「オカマがいるぞ」と叫び、「気持ち悪りー」と揶揄した。周りは笑った。ジュンのことだ。
僕は少し不安になりジュンを見た。ジュンは余裕の表情で投げキ

ッスを返していた。
池田のほうは「さっさと始めろよ」そんな感じの顔だった。僕はジュンにもう一度振り返る、ジュンは両手を挙げた。僕はBメジャーを押えて小さく音を出した。
この曲は最初、池田のヴォーカルから始まる。僕はハモリを担当する。でも、途中で入れ替える。僕が歌い、池田がハモる。あと、ジュンもハモリを入れる。
池田がヴォーカルを入れた。僕とジュンは自分のパートを演奏する。
演奏しながら僕はサキさんを探した。ライトが前から当たっているので、よく見えない。でも、見つけた。
サキさんは笑った。そして周りの手を引いてその場で立ち上がった。笑顔で、皆も立つように両手を上下に動かした。
三年生は徐々に立ち上がっていく。池田と僕は目を合わせた。
僕は頭を下げた。
徐々に三年生が立ち上がっていき、手拍子を取っていく。すると後ろにいた二年生も立ち上がり、一年生も立ち上がった。
息を合わせて、僕らは演奏をした。感情が伝播していく不思議な感覚があった。
演奏が終わると、僕はマイクに向って言った。
「三年生の皆さん、ありがとうございました！　二年生と一年生の皆さん、ありがとうございました！」
司会が「ロック部の皆さん、ありがとうございました。生徒の皆さんご着席下さい」と言った。だけど座らない。サキさんの声が聞こえた。
「アンコールー！」
でも、僕たちに許されているのは一曲だけだ。
ジュンはまだドラムを小刻みに叩いていた。
「アンコール！　アンコール！　アンコール！」
三年生が徐々にそう言っていく。

僕と池田は興奮していて、その場を動けずにいた。
教師がマイクを持って、静めにかかった。
「もう時間だ、全員座れ！」
しかし盛り上がった三年生は座らない。
「やらせろー！」「いいからやっちまえ！」「演奏しろ！　ロック部だろー！」「池田せんぱい！　かわいいー！」
池田の名前が聞こえたのはなんなんだ。
「もう一曲、お願いします」
マイクに向って言うと、もう面倒臭くなったのか、教師もしぶしぶ許可を出した。学園祭前の雰囲気もあった。
司会が言った。
「では、ロック部にはアンコールにこたえてもらいます！」
先輩たちはさらに盛り上がった。
「ひゅー！」「いいぞー！」「がんばれー！」「オカマー！」
池田は困惑して頭をボリボリ掻いていた。ジュンは手を振っていた。そして、僕らはもう一曲演奏した。

## 四章　前夜祭（後書き）

次章が最後になります。よろしくお願いします。

# 五章　本番

九月の最後の土曜日。僕たちは朝の六時に学校に集まっていた。
去年もこの時間に集まってリハーサルを行なったのだけど、まさか、今年もこんなふうに集まるなんて思わなかった。ジュンと僕は六時に集まり、池田も少し遅れて無事に現れた。
学園祭は十時に始まる。ロック部の演奏は一時からとなっている。六時に学校に集まっていたのはロック部と一部の生徒会役員くらいだった。
今日なにが起こっても、僕らはできることを全力でやるだけだ。
少しずつ学校が賑やかになっていき、学園祭は始まった。
僕らは舞台衣装ということで、私服で演奏することを許されていた。池田はカーゴパンツを穿き、黒いタンクトップを着ていた。胸元には兄からもらったクロムハーツを下げているけど、トップはタンクトップのなかに入れている。
ジュンはしげちゃんからもらった赤色のドレスを着ている。それにメイクももちろんする。僕はハーフパンツにチェックのシャツを着ていた。久保先輩からもらったターコイズのチョーカーも首に巻いている。
僕らが体育館の舞台裏で素音で練習していると、久保先輩が来てくれた。
「よお、下手糞ども」
「ちっす！」
僕とジュンは挨拶し、池田を見ると直角にお辞儀をしていた。
「あんまり気を使わないでよ、こいつ以外」
と久保先輩は僕を指差した。はい。
「順調か？」
「今のところは」
「ライブ中はあんまり熱くなりすぎるなよ。こっちは少し落ち着い

ているくらいが丁度いいんだ」
「わかりました」
「でもライブを楽しめよ」
僕らはそろって返事をした。
久保先輩が舞台裏を出ていった。
体育館に人が集まりだしていた。午前の部は、十一時半からダンス部のステージがある。
ダンス部のレベルが高いのは周知のとおりで、学外の人も興味を持っていた。サキさんのストリートダンスのチームのメンバーもちらほらいて、あきらかに服装が違う。
サキさんのステージを僕らは舞台裏から観ていた。
二人が技を決めるたびに歓声がとんだ。当たり前のように盛り上がるサキさんのステージは、ジャンルは違うけど、僕らの演奏の比ではなかった。
サキさんのステージが終わり、僕らは舞台裏で少し話しをした。
「最高にかっこよかったです！」「盛り上がってました！」サキさんより僕のほうが興奮していた。
時間が迫ってきて、ライブまで残り三十分を切った頃、突然緊張をしてきた。手が震えて止まらなかった。
僕は練習を止めて、学外のコンビニ行くことにした。コンビニは歩いて十分程だ。気を紛らわせたいと思った。
体育館の外に出て、校庭に作られた駐車場を見るとほとんど埋まっていた。バイクや原付もある。出店も繁盛しているようだった。
僕は校門を出て、コンビニに歩いた。
失敗しても死ぬわけじゃない、そう思うことにした。
でも失敗なんてしたくはない。サキさんにも、久保先輩にも、しげちゃんにも老先生にも、皆に支えてもらい、この日を迎えることができたのだから。
角を曲がる。コンビニの前には、火傷率いる不良グループが、改造原付を止めて十数人でたむろしていた。

火傷が僕に気付いて言った。
「あれ、お前池田の仲間だろ？」
僕はどうすればいいのか、判断できなかった。火傷は僕のほうに進んできた。
「すげえ偶然」
火傷は僕の顔を覗き込みながら、そう言った。
逃げないと、そう思ったときにはもう囲まれていた。
火傷の後ろから、剃り込みが出てきた。ジャージ軍団のなかで、彼だけがスラックスに柄シャツだった。金のネックレスも下げて、黒い木刀も持っていた。
剃り込みは僕を睨んで、今にも襲ってきそうな雰囲気だった。
火傷は煙草を咥えて、マッチで火を点けた。マッチのカスを僕に投げた。
それから、剃り込みに言った。
「やっていいぞ」
囲んでいる奴らは傍観しているだけだ。
剃り込みが舌なめずりをした。それから、踏み込んで木刀を大振り薙いできた。僕はそれを避ける。剃り込みはさらに木刀で襲ってくる。
避けたところに、隙間ができた。僕は囲いから一気に逃げた。
突然、携帯が鳴った。ディスプレイには久保先輩の名前がある。
僕は走りながら通話ボタンを押した。緊張で喉が枯れていて、最初言葉が出なかった。
「もうすぐ時間だぞ、なにしてんだ！？」
「あっ、あっー、」
「なに！？」
「コンビニでか、絡まれて……今、逃げてます……」
「馬鹿かお前は！」
「すみません！」

「いいからさっさと戻って来い！」
「はい！」
久保先輩は通話を切った。
僕は学校のほうに走る。このままこいつらを学校に連れて行くのはまずい。でも、どうしたらいいかわからなかった。時間も、ライブまであと五分しかなかった。
相手は原付で追いかけてきた。僕は追いつかれ、進路を塞がれた。
「なに逃げてんだよ」
火傷がそう言った。
そのとき、学校のほうから久保先輩が自転車に乗って走ってきた。久保先輩は自転車を乗り捨てて（それはジュンの自転車だった）、周囲があっけに取られるなか、火傷に走りこみ顔面に跳び膝蹴りを食らわせた。
火傷は原付から吹っ飛んだ。
久保先輩は電光石火の勢いで、動き出した奴に、ボディブロー、右ストレートを打ち、後ろから近づいた相手にバックスピンキックを食らわせた。
一瞬の間に三人がグロッキーになり、囲んでいた奴らは凶器を出し始めた。メリケンサック、木刀、小さなナイフを出す奴もいた。
久保先輩は周りを睨みつけながら、僕に言った。
「さっさとライブに出てこい！」
「でも、この数相手じゃ先輩でもヤバイですよ！」
「余計な心配すんな、お前はオーディエンスを沸かせることを考えろ」
「わ、わかりました！」
僕は全力で学校に走った。

体育館は去年と同じように、人で埋められていた。学校の生徒が多くて、学外の人は遠慮しているように体育館の後ろのほうでグループを作っていた。すでに一時を過ぎている。池田とジュンはもう

舞台に上がっていた。
僕が体育館を走り抜けて行くと、しげちゃんの声が聞こえた。
「つかさ君、なにしてんの！」
「不良グループに絡まれて！　久保先輩に助けられたけど、どうしよう！」
「場所は！？」
「駅前のコンビニの近く！」
「いいからライブに出なさい。あとは引き受けてあげる」
しげちゃんの友達のオカマさんたちが六人程いた。
「こんな可愛い子の邪魔するなんて、許せないわねぇ」
としげちゃんより大きなオカマさんが言った。
「ほんと、野蛮だわ」
とその横にいたオカマさんも言った。
「さ、早く行きなさい！」
僕はしげちゃんに背中を押されて舞台に走った。途中店長の姿も見えた。奥さんと子供を連れている。店長は僕を見ると親指を立てた。焦っていたけど、僕も親指を立てた。
舞台に駆け上がると、池田が僕のギターを渡してくれた。
「……つかさ、悪りぃ」
「お前のせいじゃないよ。……なあ、久保先輩の言ったこと覚えてるよな」
「ああ」
ジュンもこちらを見ていた。
ライブを楽しめ！
スポットライトが当たった。
僕は息を落ち着かせて、マイクに向う。
「皆さん、ロック部は偉大な先輩が作った部です。だから、僕らも負けないように盛り上げます！　楽しんでいきましょう！　――GO！」
ジュンは三回スティックを鳴らした。

『ｊｅｔ　ｗａｌｋ』
『ｍｉｎｄ　ｙｏｕｒ　ｓｔｅｐ!』
最初はとスネイルランプとグリーンデイを演奏する。最後に、ハイスタンダードのラッシュになる。
知っている曲だと、生徒もノッてくれた。前に来て、腕を振り上げてくれる。
『Ｂａｓｋｅｔ　Ｃａｓｅ』
『Ｍｉｎｏｒｉｔｙ』
そして、四曲が終わった頃、学外から来た人たちが体育館に入ってきた。
たぶん、ほとんどが久保先輩が連れてきてくれたお客さんだ。ファッションが皆パンクだった。
僕は一旦止めてＭＣを入れた。ジュンはリズムを刻んでいる。
「生徒の方々、学外から来ていただいた方々、ありがとうございます。ですので――えー……」
興奮してきてもう、頭が真っ白になっていた。なにを言っていいのかわからなかった。
僕が先の言葉に詰まっていると、池田がベースを弾いた。
『ｐｉｎｋ　ｐａｎｔｈｅｒ　ｔｈｅｍｅ』
ピンクパンサーのテーマだった。それは遊びで練習していた曲だ。そしてジュンが叫んだ。
学外から来た人たちも、徐々に舞台の前に乗り込んできてくれた。体育館の後ろのほうも、人が人を呼んで、どんどん増えていた。極端に盛り上がる最前列を固めるように、父兄や生徒が大勢入ってきていた。
僕は困惑した。でもとても興奮していた。
久保先輩の言葉を思い出し、冷静になろうと気持ちを落ち着かそうとする。
僕らは呼吸を合わせる。テンションを上げる。跳ぼう、回ろう、笑おう、かっこつけよう！

『ｎｅｗ　ｌｉｆｅ』
『ｆｉｇｈｔｉｎｇ　ｆｉｓｔｓ，ａｎｇｒｙ　ｓｏｕｌ』
『ｓｔｏｐ　ｔｈｅ　ｔｉｍｅ』
『ｃｌｏｓｅ　ｔｏ　ｍｅ』
誰かが舞台に上がってきて観客に向って両手を挙げ、ダイブをした。それは久保先輩だった。
久保先輩は声を上げながら、人の渦に飲まれた。
僕と池田はお互いを見た。
ジュンはテンポを上げた。
僕は跳ねた、池田は首を振り、ジュンはスティックを回した。
舞台の最前列に、火傷たち不良グループが来ていた。
なにがあったのかわからないけど、その場にいて、腕を振り上げていた。
僕らは全力で歌い、演奏し、体全部でリズムを取った。
『ｄｅａｒ　ｍｙ　ｆｒｉｅｎｄ』
『ｓｔａｙ　ｇｏｌｄ』
久保先輩の言ったことが少しわかった気がした。多分こっちの感情が伝播するんだよ、それがどんどんハコのなかに広がっていくんだ。
今この瞬間、僕らはそこにいるどんな人とも一つになっていて、楽しかった。
『ｓｔａｒｒｙ　ｎｉｇｈｔ』
『ｂｒａｎｄ　ｎｅｗ　ｓｕｎｓｅｔ』
ライブの最後の二曲はハイスタンダードの『Ｍｙ　Ｆｉｒｓｔ　Ｋｉｓｓ』と『Ｃａｎ’ｔ　Ｈｅｌｐ　Ｆａｌｌｉｎｇ　Ｉｎ　Ｌｏｖｅ』だった。
その前に、演奏を一旦止めて、僕はＭＣに入った。
「皆さん、今日は本当にありがとうございます！　僕らは先輩のバンド、ザ・シークレット・ゴールドフィッシュに憧れて今ここにいます。先輩たちには遠く及びませんが、皆さんのロックを愛する気

持ちで、僕らはなんとかライブを収めることができそうです」
キーンとマイクがハウリングを起こした。
「そして、あと二曲なんですが、これは僕が原曲をアレンジしたものです。『Ｍｙ　Ｆｉｒｓｔ　Ｋｉｓｓ』！」
僕たちは演奏を始めた。
店長と相談をして、僕はこの二曲にアレンジを加えていた。それはささいなもので、歌詞の一部や、ギターソロをちょっと変えただけだ。原曲をいじるのは、本当はあまりしないほうがいいと言われた。原曲を知っている人は、下手なアレンジを嫌うし、もしかしたら冷めるかもしれないよ、と店長は言っていた。
でも僕は作りたかった。
ダイブとモッシュはなくなり、体育館の熱は少しおさまった。
僕はサキさんを探したけど、どこにもいなかった。
お客さんは寛大だった。最後までノッてくれ、僕らは演奏を終えることをできた。
ふと池田が舞台裏を指さした。僕はそのほうを見る。そこにはサキさんがいた。
僕はサキさんに叫んだ。
「サキさん、ライブ成功しました！」
サキさんは恥ずかしそうに笑った。
「サキさんがアメリカに行くなら、僕も行きます。だから待っていて下さい、僕もサキさんに追いつきます！」
マイクが全て拾っていた。
体育館は微かな笑い声や野次があったのだけど、サキさんが舞台に歩いてくると静まり返った。
サキさんはマイクの傍で言った。
「待ってあげる。一年だけだよ」
体育館が野次で包まれた。
池田がヘラヘラと笑いながら走り寄ってきて、僕からギターを抜き取った。

それから「おら、行ってこい」と、僕の尻を蹴っ飛ばした。
僕はそのまま、観客に転げ落ちて、生まれて始めてダイブを経験した。池田もベースを置いてダイブしていた。
ジュンは力を振り絞って、ドラムを派手に叩きまくっていた。

後日談になる。
オーディエンスには「楽しかった」「ライブハウスでもやれよ」とか「お前らの演奏好きだよ」などと言ってくれる人もいた。でも久保先輩やしげちゃんに言わせると、下手糞すぎてハラハラした、レベルらしい。
不良グループと久保先輩があのあとどうしてライブに来たか訊いたのだけど、なんでも、不良グループの先輩が学園祭ライブに来ていたらしく、見つかった火傷たちは全員説教までされたらしい。
やる気満々のしげちゃんたちがその場に着いたときには、もう収まっていたのだそうだ。
バイクで来ていたその人は、久保先輩を見つけて輪に入った。
「お前ら、俺の友人になにしてんだ」
不良グループは震え上がった。一応彼らも、縦社会で生きているらしい。
説明を聞いたその人はさらにこう言った。
「ぶっ殺すぞ」
不良グループは心底震え上がった。
久保先輩はおろおろする不良グループに言った。
「お前らもあいつらのライブ観てみろよ」
そして、前列に連れていった。不承不承付いてきた不良グループも、熱気に当てられたのか盛り上がってくれたらしい。それは、去年、久保先輩のライブに参加し、観ていた僕らと同じだったのかもしれない。その不良グループの先輩と直接会うことはなかった。でも音楽を、メロコアをこよなく愛する人ということはわかった。久保先輩は、その人を「俺よりもおっかない人だぞ」と言っていた。

久保先輩がそう言うくらいだから、化け物なんだろうと思う。そんな人がライブに来てくれていたのだとわかると、全てが終わってから、再び震えがきた。
それから、火傷はライブが終わると、池田のところに現れ言った。
「今まで悪かった……」
池田は道に迷っている犬のようにうつむいて、黙っていた。
「金は返す。使っちまったから少し時間掛かるけど」
「……べつに、気にしねえよ」
「もしまたライブやるなら教えてくれ」
池田は少し間をおいてからこたえた。
「わかった」
火傷と不良グループは帰っていった。
ただ、そこに黒い木刀を持っていた剃り込みの姿がなかった。そのことが、少し気になった。

しげちゃんたちはライブのあと、老先生を囲んでいた。
「あら、渋いおじ様ね」
「あたしもタイプかも」
「あんたたち、久留米先生には手を出さないでちょうだい」
「おじ様、今度お店に来て。サービスするわぁ」
老先生は「おお、おお、おお」と、もうどうしていいかわからなそうだった。しげちゃんたちも、色々と楽しんでくれたみたいだ。

僕は体育館の裏でサキさんと二人になった。
「僕も、プロを目指すことにしました」
そう言うと、サキさんは微笑んだ。
「やる気になったんだ」
「はい。もっとあいつらとバンド組んでいたいし、やっぱり音楽好きだから」
それに、サキさんにも久保先輩にも追いついてみせます。

「待っていて下さい」
「いいよ、てか付き合っちゃおうよ。遠距離恋愛もいいんじゃない」
「え、いいんですか」
「できれば、つかさ君から言ってほしかったんだけど、今日は特別ね」
「僕、死んでもいいです」
「私が困るよ」
僕はうれし泣きにむせた。
サキさんはそんな僕に、身を乗り出してキスをしてくれた。
「おまけ」
笑ったサキさんの顔がすぐそばにある。僕は頭がショートして、その場に倒れた。

池田のお兄さんも学園祭に来ており、目を赤く腫らしていた。池田のライブをする姿に号泣していたらしい。
お兄さんは、弟の頭をガシガシと撫でた。
「よくやった！　頑張ったな！　お前は本当によくやったよ！」
池田は嬉しそうだった。
それから、
「お二人とも、これからもできの悪い弟をお願いします」
そう言って、頭を下げた。

店長は気が付いたら帰っていた。

学園祭が終わり、僕らは体育館の片付けをした。
夕方までかかり、僕が一人でトイレに立ったときだ。
手を洗っていると、鏡に剃り込みの姿が映った。
「表に出ろ」
剃り込みは低い声でそう言った。僕は剃り込みに付いていき、人のいないテニスコートまで歩いた。

「最初見たときから、気に食わなかった」
と剃り込みは言った。
「お前の仲間は僕らに手を出さないんだろ。もう終わりでいいじゃないか」
「うるせえよ。お前らの友情ごっこ、見てて気持ちが悪いんだよ。とくにお前がよ」
「僕の友達はお前らにずっと苦しめられてきたんだ。あいつがどんな気持ちだったか、お前にはわからないだろ」
僕は「この剃り込み野郎」と付け足した。
剃り込みは顔を引きつらせた。
「殺してやる」
「その前に何年生？」
剃り込みは「高一」とこたえた。
さすがに、年下になめられるわけにはいかない。俺は久保先輩の後輩なんだ。それにもうサキさんの彼氏だ、僕はそう考えた。
剃り込みは地面に置いていた、木刀を拾った。
僕はその間に走り、間を詰めた。
剃り込みは油断していたのか、焦って木刀を薙いできた。
剃り込みの身長は僕より少し高い程度だ。
僕は左腕でガードを固めながら、去年先輩から教えてもらった、右フックを打った。右フックは剃り込みの顎の先端に綺麗にヒットし、体をふら付かせて膝を付く。でも木刀は離さなかった。
「こんなことする意味ないだろ」
剃り込みはふらふらしながら立ち上がる。
「殺してやる」
どうして僕をそんなに嫌うのかはわからなかった。けど、剃り込みが嫌うような性質が僕にはある。
「帰れよ」
「うるせえ！」
剃り込みは木刀を振った。僕は大きく避けた。

「帰れよ！　クソガキ！」
だんだん腹が立ってきて、剃り込みのペースに乗せられていた。
「うるせえんだよ！　てめえだけはぶっ殺してやる！」
剃り込みはそう叫ぶ。
うるせえのは、
「てめえだ」
僕は右ストレートを打つ。でもそれは避けられてしまった。コンビネーションの左フックも空を切る。そして剃り込みの木刀を左の肩に受けた。鈍い痛みが走り、肩を押さえて後ろに逃げた。
剃り込みも警戒して、少しずつ距離を詰めてくる。
「お前の指使えなくしてやる」
剃り込みはそう言った。
「それは止そうよ」
そう言うと、剃り込みは薄っすら笑んだ。でも、そこはもう間合いだ。僕は去年、久保先輩から伝授された、『ノーモーションの右フック』を全力で打った。
剃り込みの頬に当たる。ふらつく剃り込みの頭を掴んで、顔面に跳び膝を入れた。鼻に当たり、二回目は顎に当たった。
鼻血を出し、今度こそ剃り込みは倒れた。
僕は止めなかった。北方謙三の小説を読んでいてよかった。
五発の蹴りを肝臓に入れた。
剃り込みは丸くなり、手を伸ばし「止めてくれ」と言った。蹴りを止めると、左のわき腹を押さえていた。
「少し態度を改めろ」
僕は息を切らせながら言葉を探して、そう言った。
剃り込みは小さく呻いていた。

長い一日の締めに、しげちゃんのアパートで打ち上げをすることになり、僕たちは朝まで飲み明かした。

## エピローグ

学園祭ライブから早くも半年が過ぎた。

久保先輩から「俺たちのバンドに来るか？」と誘われたのは、ライブから一ヶ月経ってからだった。とてもショックを受けた誘いだった。それが一年前だったら、どれだけ狂喜していたかわからない。でも今、僕は池田とジュンと三人でバンドを続けたい。それを伝えると「ま、わかってたよ。言ってみただけ」と軽く流されてしまった。

それに、先輩のバンドに入ったら、僕は潰れて終わる気がする。

僕ら三人はライブハウスでも活動するようになった。あまりお客さんはいない。オリジナルで曲を作るけど、久保先輩のようにはいかなかった。

ただ、なんの因果か、あの不良グループがライブによく来るようになっていた。そのなかには剃り込みもいる。不思議な縁だと、僕は思った。

サキさんは卒業後、アメリカへ行った。

皆で空港まで見送り、サキさんは笑顔で旅立った。

久保先輩も相変わらずアマチュアでバリバリ活動している。絶対に追いついてみせます。

ただ、この人たちはもうプロになってもいい気がする。

そして、老先生は退職をした。

その日、ロック部は花束を用意して老先生に渡した。老先生がいなければ、僕らはライブをできなかった。迷惑を掛けて、でも、なにも言わないで僕らを最後まで信用してくれていた。もし、あのライブができなければ、僕らはなにも変わることはなかった。

池田とジュンは、花を渡すときに泣いていた。他の多くの生徒や先生も涙を流していた。僕も泣きそうだった。でも泣いて見送りた

くはなかった。そうやって、今年の四月に、老先生は静かに学校から去っていった。
でも、来るなって言われても遊びに行くよ。
しかし、そうなるとロック部は顧問不在となり廃部になるかもしれないと言われた。そんな矢先、下級生の新入部員がたくさん入ってきた。女の子もいる。合計で八人。ロック部はまだまだ廃部にはしない。そして全て整ったら、ロック部はまかせたよと、そんな感じで部室は譲ることにしよう。
今年は僕らがお客さんを連れてくるんだろうか。そうできたら、いいと思う。
『ステイ・ゴールド』
まだ、始まったばかりだ。

## 五章　本番（後書き）

最後まで読んで下さった方、本当にありがとうございました。
拙い作品ではありますが、ほんの少しでも面白いと思っていただける部分がありましたら、とても幸せに思います。

また、誤字脱字が多くすみませんでした。急いで直しています。
その際、細かい部分を推敲させて頂きました。

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9115s/

STAY GOLD　（長編）

2011年5月9日03時24分発行